
バカとテストと恋愛喜劇（ラブコメディ）

神代美樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと恋愛喜劇 ラブコメディ

【Nコード】

N5105V

【作者名】

神代美樹

【あらすじ】

文月学園学園長藤堂カヲルの前に突如として現れた謎の少年、ヴェルサスⅡスクワラン。彼は、一年の『監視』を終え、正式に文月学園の二年生として、学園生活を送ることになった。彼が所属するのは、バカ達が集うFクラス。そこで巻き起こるギャグ、バトル、時々シリラス、そしてメインの恋愛喜劇 ラブコメディ。彼は不思議な力を駆使し、皆の手伝いをしながら、純粹に状況を楽しんでいた。まるで、自身の記憶に深く刻み付けるように……………。

バカとテストと召喚獣二次創作。バカとテストと恋愛喜劇 ラブコメディ、よろ

しく願います！

開幕 プロローグ

夢の中から、意識が浮上してくるような感覚。毎回感じるソレに身を委ねながら漂っていると、唐突に浮遊感が消え、文字通り地に足が着いた。

周囲の空気が落ち着いてきた頃に、ゆっくりと眼を開く。まだ光に慣れておらず風景がぼやけてしまっているが、大まかな内装は窺える。どうやらそれなりに整備が行き通っている部屋らしい。必要最低限の家具と、大型のワークデスクやソファの輪郭が見える。

だんだん視界がはつきりしてきて、部屋の内装が鮮明に見えてきた。どうやら校長室らしい。それっぽい雰囲気の内装だ。

というか、まさしく『校長』っぽい人物が茫然と俺の事を見ている。幽霊やUMAと遭遇したら、こんな表情になるのではなからうか。

この女性がこうなるのも無理からぬ事だ。何せ、何もない空間から突然人間が現れたのだから。

それで動揺しないのは、よほど胆が据わっているか、非日常を渴望しているか、はたまた似た様な境遇の人間くらいのものだらう。しかし、そんな人間はそれほど多くはない。だから、この反応は当たり前前だ。

まあ、それはどうでも良い。いい加減この反応も慣れてしまったし、だからどうするという話でもない。とりあえず、今すべきなのは最も単純な質問、すなわち――

「すみません。此処は何処ですか？」

当たり前障りの無いように、丁寧な態度でこう尋ねるのが一番良い。

第1話 始まりの合図

バカテスト 科学

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を作成する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応するため危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。そういえば、名前の無い解答用紙も完璧な答えだったので、あれは誰だったのでしょうか？

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

俺は今、学園長の部屋に呼び出されていた。

あの場所に現れて丁度一年の今日、俺が呼び出された理由は他にもない。先日行われた振り分け試験の結果が出たのである。

この文月学園にはAからFまでのクラスがあり、二年生以上からは振り分け試験の成績でAから順にクラスが決まっていくなのだと、藤堂力丸学園長から聞いた。そして、その結果は生徒へ個別に渡される。普通それは一般の先生方の役割だが、俺は学園長から直々に渡される。恐らく、彼女なりのけじめの付け方なのだろう。

さて、そんな事を改めて考えている間に、学園長室前まで来てしまった。

一応制服を整えてから立派なドアをノックする。

『入っておいで』

返事を確認して中に入った。こういう所がすっかりしているのは、やはり蔑ろにされるのが許せないからか。それとも、こういう事を怠ると、様々な面でもだらけてしまつと知っているからか。

「失礼します」

そんな事を思いながらドアを潜る。一年前と内装は全くと云つて良いほど変わっていない。唯一違っている所があるとすれば、長い白髪が特徴の学園長の態度くらいのものだ。今は不遜な態度で俺を鋭く見据えているけれど、あの時は――

「ぷっ」

あの時の茫然とした表情を思い出して、不覚にも少し吹き出してしまふ。

「人の顔を見て吹き出すとは、随分失礼じゃないかい？」

「ぷっ、くく……い、いえ、失礼しました。一年前の事を思い出しまして」

そう言つと、若干気まずそうに視線を逸らす。どうやら、あの時の出来事は、思い出したくない思い出にカテゴライズされているようだ。

「ふん。好きなだけ笑うが良いさね。あんたは今日からこの学園の生徒だ。これまでの様にはいられないよ」

「別に俺は、貴女を笠に着たことはありませんよ。それに本当に感謝しています。ここでの生活を支援して貰いましたし、俺の我が儘を聞いて、この学園の生徒にさせていただけた事も、十二分に感謝しています。有難うございました」

俺がそう言つて頭を下げると、あからさまな舌打ちと、何かを搔

きむしる様な音が聞こえた。

「ああ、もう……………はあ。良いから頭を上げな。全く。あんたみたいなのはどうも苦手さね。その言葉や態度に、もっと皮肉や白々しさがあったらどれだけ楽か。それに、アタシは何も感謝されるような事はしていないからね。始めに言っただろう。あれは素性の知れないあんたを監視する為の措置だつて」

「それでも構わないですよ。むしろ、得体の知れない俺に、『監視』という名目であっても衣食住を保障してくれた事を感謝します」

下手をすると、いきなり攻撃されたり、追放されたり、狙われたりと散々な目に合わされる事もあったから、こういう持て成しは素直に嬉しいものだ。

雨風を凌げる場所、毎日三回の食事、清潔な衣服。それが与えられるだけでも感謝しなくてはいけない。

まあ、無償ではなく、それなりの仕事もさせられたけれど、そんな事は大した問題じゃない。

「……前々から思っていたが、あんた相当なお人好しだね。散々こき使ってやったつて言うのに、嫌な顔一つしないなんて」

「別に、事実全く苦じゃありませんでしたからね。それに、食わせて貰っていた身ですから、アレくらい当然ですよ」

「……………本当に、あんたみたいなのは苦手だよ」

溜め息と共に吐き出された台詞に、俺は笑いながら、

「貴女は素直な人には弱いですからね。そう言う人達に、もっと心を開いた方が良いでしょう？」

そう言ったが、地雷を踏んでしまったらしい。

「余計なお世話だよ」

少し拗ねたような台詞に思わず微笑んでしまう。その態度が気に食わないのか、少し視線が痛くなった。

藪の中の蛇をつつく前に、話題を切り換えるでしょう。

「それよりも、学園長。今日は私に何か御用事があったのでは無

いですか？」

「……………ああ、そうだったね」

学園長も、このままでは話が進まないと感じたのだろう。この人は気持ちの切り換えが早くて、凄く助かる。

「今日あんたを呼んだのは他でもない。先日行われた振り分け試験。その結果が出たんだよ。そして、ソレを今この場で発表する。心して聞きな」

スーツの内から、折り畳まれた一枚の紙を取り出した。その紙の中身を見、一つ盛大な溜め息を吐いた。

「学園長であるアタシが言うのもなんだがね。あんた本当にこれで良かったのかい？」

「ええ。勿論。テストの前にも言ったでしょう。私は、ここに勉強をしに来たわけではありません。楽しむ為に来たんです。本質的な意味で、ね？」

「はんつ。学園長を前に二度も同じ台詞が吐けるとはね。大した男だよあんたは。まあ良い。せいぜいその選択を悔いるが良いさ」
文字が書かれている面を乱暴に俺へ向かって突き出してきた。

「あんた、ヴェルサスⅡスクワランはバカどもの巣窟、Fクラス所属だよ」

これが、俺が文月学園で送る二年目の始まりを告げる合図だった。

第2話 Fクラス 前編

バカテスト 国語

【第二問】

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の誤り』
- 『(2) 泣きつ面に蜂』

ヴェルサスⅡスクワランの答え

- 『(1) 河童の川流れ』
- 『(2) 弱り目に祟り目』

教師のコメント

二人とも正解です。他にも(1)なら『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』などがありますね。それにしても、スクワラン君は、日本のことわざも詳しいんですね。今度、島田さんにも教えて上げて下さい。

土屋康太の答え

『弘法の川流れ』

教師のコメント

シニールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（２）泣きつ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

学園長室を後にした俺は校舎半ばの階段を登っていた。少し話が長引いたおかげで、HRには間に合いそうもないので、他の教室の様子を窺っておこうと思ったのだ。

一年生の間は、何処のクラスも全く同じ様式の教室で過ごしていたが、二年生からはクラスによって格差がある。

例えば、優等生が集まっているAクラスの教室は、最新設備が満載で、様々な優遇体勢が整えられており、生徒が快適に過ごせるようになっていて。しかし、逆に（学園長曰く）バカどもの巣窟であるFクラスの教室は……………いや、皆まで言うまい。どうせこの後

行くのだから、その時改めて説明しよう。

それはさておき、漸く三階に辿り着いた。この階の新校舎側にAからDまでのクラスが集中している。と言っても、新校舎側のほぼ半分は、Aクラスの教室に占められているのだけだ。

階段のすぐ左隣が、もうすでにAクラスだ。何回も見たことはあるが、さて今年はどうなっているのか。

廊下に出て、左を向くと一人の男子生徒が大きめの窓からAクラスの中を覗いていた。もしかして、遅刻してきて中に入りにくいのだろうか、とも考えたが、すぐにその考えは消えた。

その後ろ姿を良く良く見てみれば、なんと見知った人物じゃないか。ここは声を掛けるしかあるまい。

俺はゆっくりと、そして静かに、その生徒に近付いた。彼はどうかやうAクラスの内装に目を奪われているらしく、俺が真後ろに立つても気が付いていない。

この状態で声を掛けたりしたら、きつとすつとんきような声を上げて、Aクラスの皆々様に迷惑を掛けるのは必至だ。

なので、仕方無く肩を掴んで此方に振り向かせた。

「えっ、ちよっ、なむっ……………」

「しー。静かにしてないと駄目だぞ。明久」

無理矢理振り向かせた彼、吉井明久の口を塞ぎ、自分の口に人差し指を当てて静かにするように促す。一応その意図は通じたらしく、コクコク頷いたので手を放してやった。

「えっ？ 君、まさかヴェル？ なんでここに居るの？」

「それはこっちの台詞だよ。お前こそこんな所で何やってるんだ？ って、見れば分かるんだけど」

さっき明久が覗いていた窓から、教室内が見えた。まず目を引くのが壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイ。それだけでも相当豪華だが、この教室はその他の設備も充実している。一人に一つノートパソコン、エアコン、冷蔵庫、リクライニングシートが支給されているし、開閉可能な総ガラス製の天井に、名高い芸術

家の絵画（本物）や観葉植物が置かれ、さながら高級ホテルのロビーだ。

「明久には一生縁が無い場所だな」

「無いって断定された！？ そんな事ないよ！！ いつかきつとここで授業を受ける日が……………」

「一生無いから安心しなつて」

「酷い！？」

『戦争』に勝つ事が出来るなら、可能性も無くは無いけど、見込みは無いなあ。最強と最弱じゃ、分が悪すぎるし。

身悶えしている明久を放っておいて、再び視線を中に戻す。どうやら、さっきまでは設備の説明をしていたらしい。今度はクラス代表の挨拶があるようだ。

『——霧島翔子さん。前に来てください』

『……はい』

女性教師（あれは高橋洋子女史か）に名前を呼ばれ、席をたった女子の名は霧島翔子。艶やかな黒髪を肩まで伸ばし、まるで大和撫子の様な風貌の物静かな少女だ。

彼女がAクラスの代表。つまり、優等生が集まるこのクラスの中で、最も優秀な成績を納めた生徒。もっと言えば、二年生でトップの成績を持つ生徒と言うことだ。

「明久から一番遠い存在って事か」

「うぐ……………つ。ま、まあ、それは否定しないけど。でも、残念だよねえ」

「何が？ 成績優秀で容姿端麗。運動神経はどうか知らないが、ほとんど完璧じゃないか。何処が残念なんだよ」

「だって、あれだけの美少女なのに、霧島さんは女の子が好きだっていう噂だからね。本当に勿体無いよ」

「なるほど。しかし仮に男が好きだったとしても、明久に好意を寄せるような事態は絶対ないと思うけど？」

「そういう問題じゃないんだって！？ ていうか、それどうい

意味！？ 暗に僕がモテないって言ってる！？」

「いや、割りとストレートに言ってる」

「なおさら酷いよ！！」

心底、心外だと言わんばかりに明久は憤慨している。いや、どこからその自信が湧いてるのか、全くもって謎なんだけど。

『Aクラスの皆さん。これから一年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねて下さい。――』

おっと。ここはもうHRが終わるようだ。俺達も、さっさと教室に行かなければ行けないな。

「この話の続きは、教室に行ってからにしよう。明久も当然Fクラスだろ」

「さも僕が馬鹿みたいなこと言わないでよ！ って、え？ 今、僕『も』って言った？」

明久にしては意外に早くその部分をしてきた。珍しい。

俺は、にっと笑ってそれに答えた。

「そうだけど？ だって俺も、Fクラスだからな」

その時の明久は、なかなか愉快な顔をして固まっていた。

「へえ。今年から正式にここの生徒になったんだ」

「そういうこと。俺も振り分け試験を受けて、その結果Fクラスになったって訳だ。これから宜しく」

「こちらこそ、宜しくね。それにしても意外だなあ。まさか、ヴェルがFクラスなんて。人は見掛けに依らないってことか？」

「そういうお前は、肩書き通り、相変わらず馬鹿の道突っ走ってるよな」

「ねえ、さっきから何気に酷くない！？ 僕何かヴェルを怒らせ

るような事した!？」

「いや、ただ明久の反応が面白くて♪」

「こんなと同じクラスはイヤ——!」

おいおい。こんなのは随分な言い草じゃないか。まあ、良いか。Fクラスには俺以上の明久の天敵が居るし、その内そんな事も言えなくなる筈だ。

俺が新しいクラスに思いを馳せてウキウキしているのと対照的に、明久はもう既に暗いオーラを放っていた。

さて、そんなこんなで俺達は二年Fと書かれたプレート（真ん中にビビが入ってる）のある教室の前までやって来た。

この時点でお分かりいただけるだろうが、この教室ボロ過ぎる。中に入ってもいないのに、ホコリとカビの臭いが漂ってきた。

「ここが僕らの教室かぁ。嫌なヤツや怖いヤツや痛いヤツはいないよね」

痛いヤツってなんだ、痛いヤツって。明久はクラスメイトにどんなイメージを持ってるんだ。

構わず教室に入っていこうとしたら、明久が躊躇しているようで俺の後に続くとうとしない。

「どうしたよ明久。俺達完璧に遅刻なんだから、いい加減中に入ろうぜ?」

「でも、初日から遅刻なんかしてきたら、皆に悪い印象を持たれそうだし……」

そんな事を気にしていたのか。確かに、その気持ちは解らないでもないが。

ふと、俺にある考えが浮かんだ。明久の心配を杞憂にする、良い考えだ。

「明久、俺に良い案がある。これをやれば、初日から皆の注目のことになること間違いなし」

「えっ? そんな事出来るの?」

「勿論。なんなら俺の命……は賭けられないが、弁当くらいは賭

う間に明久の姿が消え、変わりに怪しげな集団が円陣を組んでいる。

『これより、この者の異端審問会を開始する』

その中の一人が、一歩前に出て高らかに宣言した。手に大鎌を持ちながら。

「ちよっ……………何これ!？」

姿は見えないが、中央部から明久の切羽詰まった声が響く。本気でヤバイ感じの声だ。というか、周りの奴等が放ってる嫉妬の念は、もはや殺気と化している。

これは、正直予想以上の状況だ。このままでは本当に明久の命が危ないかも知れない。

「あー。盛り上がってるとこ悪いけど、ちよつと良いかな？」

『『『なんだ?』』』

君達少し殺気立ち過ぎじゃないかな? 子供だったら泣き出しそうな迫力だよ。などとは、とても言える状況じゃない。

大人な俺は泣くこともせず、咳払いを一つ吐いてから、こいつらを止めに掛かった。

「今、そいつが言ったのは冗談だから。ほら、良く見てみるよ。

女の子なんかとは全く縁が無い、幸の薄く顔してるだろ?」

「ねえ、それただ僕の事貶してるだけじゃないかな!？」

折角弁護してやっているのだから、明久は少し黙っていて欲しい。

『確かに、こいつが美女百人に囲まれるなら、俺なんか千人位に囲まれても良い筈だ』

『確かに、こいつより俺の方が百倍カッコいいしな』

『なんだ冗談か。皆解散だ解散』

殺気があつという間に萎み、一人ひとり自分の席に戻っていった。後に残されたのは、縄で縛られ畳の上に放置されている明久のみ。

「おーい、大丈夫か。明久?」

「う、 うん。一応は大丈夫だよ。助けてくれてありがとう」

複雑そうな表情をしている明久の身体を起こし、縄をほどく。

亀甲縛りか。まあ、かなりスタンダードな緊縛の型だけど、ここまで綺麗に縛るとは……。これだと、縛られているのが男子なのがかなり悔やまれる。縛った本人も泣いているだろう。

「それにしても、お茶目な冗談も解らないなんてどれだけバカなんだろうな？」

「全くだよ！ もう本当に駄目かとも思っちゃったし、ヴェルが居なかったら今頃どうなっていたか……………」

「俺の計画では、明久はクラスメイト達から痛いヤツだと思われ、今後一年、腫れ物扱いされる予定だったんだけどなあ。全部台無しだよ」

「返して！！ さっきの『ありがとう』を返して！！」

明久が泣き喚いている間に、俺は縄をほどき終わった。

「よし。これでOK。何処か痛む所はあるか？」

「心がズタボロなんですけど！」

「外傷は無し、と」

一応明久の身体に付いている埃を払い、乱れた服装を直してやる。まだ文句を言いたそうにしているが、言うに言えず渋い顔をしている。

「まあ、こんなもんか。これをやったのが俺じゃなくて女子だったら、完璧なんだけど……………。お前、早く彼女作れよ？」

「余計なお世話だし、さっきの今でその話題はNGじゃないかな！？」

言われてみれば、『彼女』という単語に反応したのが、再び周りに殺気が満ちていた。

こいつら、他人の幸せを徹底的に邪魔しに掛かる類いの人種に違いない。それを言うと、明久も似たり寄ったりだし…………。

俺は明久の肩に手を置き、真面目な顔でこう言った。

「このクラスは間違いないく明久に相応しい場所だよ」

「どうしてそんな結論に至るのかさっぱり解らない！！」

それこそ、心外だと言わんばかりに頬を膨らませる。その頬を左右から押さえ付け、息を吹き出させて遊んでいると。

「二年の初日から、何バカな事やってるんだ明久」

教壇から声を掛けられた。その声の主に、俺達は同時に視線を向けた。

そこに立っていたのは、俺達と同じ生徒だった。身長はだいたい180センチ強程で、細身だが、まるでボクサーのように引き締まっているだけで、別段華奢な印象は与えない。髪は短くツンツンとしていて、触ると硬そう。野性味たっぷりの顔で、意識の強そうな目をしているが、今は呆れたように垂れ俺達、というか明久を見ていた。

「あれ、雄二？ そんなところで何やってんの？」

明久がこの生徒の名前を呼ぶ。

雄二……。そうか。この子が坂本雄二か。クラス名簿で名前は確認していたけど、実際に会うのは今日が始めてだ。噂では、昔は神童と呼ばれていた程の天才児だったらしい。しかし、何時の頃からかぐれ始めたとかなんとか。

まあ、噂は噂。関係無い。これから知っていけば良いだけの話だ。
「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってたんだ。俺はこのクラスの最高成績者だからな」

「へえ。ってことは、雄二がFクラスの代表なんだ。なるほど……」

明久の顔が明らかに綻んでいた。大方、雄二を上手く丸め込めば、クラスを自由に出来るとか何とか考えているのだろう。

「つまり、このクラスの全員が俺の兵隊って訳だ」

ふんぞり返って床に座っているクラスメイトを見渡している雄二。なぜ、皆床に座っているのか。簡単だ。このクラスには椅子がない。だからこそ、さっきの怪しい集団もスムーズに移動が出来ていた訳だが。

「それよりも、こいつは誰だ？ 明久の知り合いか？」

一通りクラス全体を眺め終わると、今度は俺に視線を移してきた。その質問に答え、俺について説明しようとする明久を手で制し、一步雄二に近付く。

まずは自分から挨拶するのが礼儀というものだ。

「初めまして。俺の名はヴェルサス」スクワランと言います。今年からこの学園の生徒になりました。どうぞよろしく。えっと、雄二君」

「お、おう。よろしくな。俺はFクラス代表の坂本雄二だ。後、雄二君なんて止めてくれ、気色悪い。俺はお前をヴェルって呼ぶ。

だからお前も、俺の事は気軽に雄二って呼んでくれ。敬語も無しだ」

「解った。雄二、よろしくな」

互いに握手を交わし、笑い合う。

見た目は少し不良っぽい雰囲気醸し出しているが、思った通り、根は良い子の様だ。それに、頭の回転も悪く無い、と思う。

良い友達になれそうだ。

「あの、新しい友情を育んでいるところ悪いですが、席に着いて貰えませんか」

不意に、ドアの方から覇気のない声が聞こえてきた。

そこには、いかにも寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た冴えない風体をしたオジサン、福原慎先生が立っていた。

そういえば、Fクラスの担任は福原先生だったっけ。

「早く席についてください。HRを始めますので」

「はい、わかりました」

「うーっす」

「了解しました」

俺達はそれぞれ返事をして適当な場所（席？）に着く。

福原先生は俺達が座るのを壇上で待ち、それからゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしく願います」

福原先生は、黒板に名前を書こうとしたが、すぐに止めた。このクラスには、チョークもまともに揃っていない上に、黒板もボロボロだ。それを思い出したのだろう。

というか学園長。せめて黒板とチョークはしっかりとした物を用意しようよ。これじゃ、授業にも相当支障が出る。

今まで何度かこの教室内を見た事はあったけど、ここまでしっかり見たことは無かった。やっぱり、実際に経験してみないと分からないことは山ほどある。

この事は後で学園長に進言した方が良いな。

密かに、学園長に進言する事を決心していると、福原先生がこのクラスの設備について説明を始めていた。

しかし、五十人程いるこのクラスだが、支給されているのは卓袱台と座布団だけだ。机も無いし、椅子もない。生徒全員が畳に座って勉強するって、一体いつの時代の学校だよ！　って感じた。

古すぎて、かえって斬新な気さえする。

「先生、僕の座布団に綿がほとんど入ってないんですけど」

俺の後ろに座っていた明久が、突然声を上げた。どうやら支給された設備に不備があったらしい。

ついてない奴だ。

「我慢してください」

我慢しないといけないのか。

「先生、窓が割れていて風が寒いんですけど」

あ、また明久が不備を指摘した。

「我慢してください」

せめてビニール袋とセロハンテープくらい渡してやってよ。

「先生、卓袱台の足が折れてます」

また明久だ。

「我慢してください」

先生、流石にそれは酷くないか？

「無理だよ！！」

明久もそれはあんまりだと思ったらしい。当然といえば当然なのだけだ。

「冗談です。後で木工ボンドを支給しますから、自分で直して下さい」

修理も自分でしないといけないのか。Aクラスに比べて随分設備や待遇に差があるんですけど。学園長は、こういった優劣をはつきりさせるの、好きだからなあ。

それにしても明久……。君は本当に全くツイてない。いくらFクラスが廃屋並みの内装でも、三つも不備があるその席(?)に着くなんて、かなり稀な事だぞ。言うかもはやギャグだよ。

「他に不備がある人はいませんね？ 何か必要があれば極力自分で調達するようにしてください」

……………ギャグなのはこの扱いの方が。

第3話 Fクラス 後編

「それでは、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願います」

福原先生がそう言っていると、車座を組んでいた廊下側の生徒の一人が立ち上がり名前を告げる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

見れば、話しているのは少し不思議な喋り方をする少女……いや、少年だった。小柄な体躯。肩にかかる程度の長さの髪。それを左右に分けるように髪留めを着けていた。

じっくり見ても女子と間違えてしまいそうな、可愛いらしい顔をしている。それなのに何故男子だと解るかといえば、男子の制服を着ているというのと、去年から何度か見掛けた事があるからだ。……もっとも、俺が見たのは男子生徒から告白され、「ワシは男じゃー！」という悲痛な叫びを上げていた姿なのだが……彼の名誉の為に他言はすまい。

「——と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

可愛いらしい微笑みを浮かべて、彼は自己紹介を締め括った。

背後で明久が頭を抱えて悶絶していたが、気にしない気にしない。

「……………土屋康太」

次の生徒は、やけに口数の少ない男子だった。というか、また見覚えのある顔だ。確か、盗聴機とかカメラとかを設置している場面に会ったんだよね。女子更衣室で。

……………いや、俺は疚しい事なんて何もしてないからね？ 学園長の命令で隠しカメラが無いのか、探していただけだから。まあ、カメラじゃなくて仕掛けた本人を見付けてしまった訳だけど。しかし、案外すばしくて油断したら逃げられたんだよねあ。

結局、あの時は隠しカメラを見付けて破棄しただけで終わっただけで、別に良いか。今さら証拠も無いし。

しかし、改めて見るみると小柄だけど引き締まった良い身体付きをしている。運動神経もさぞ良いだろう。しかし地味な見た目だし、あまり目立つタイプではなさそうだ。

日常的に、目立つとやりにくいような事でもしているのだろうか。

「……………」

結局、土屋康太はあまり話さないまま自己紹介を終えた。

今度話して直に色々聞きましょう。

次に立ち上がったのは、男子ばかりのFクラスの中で稀少な女子だった。ふわりとしたポニーテールの髪。勝ち気そうな吊目に、澁刺とした笑顔。ほっそりとした身体はまさにスレンダー美人と言った様子だ。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話は出来るけど読み書きが苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので趣味は——」

この娘もまた、見覚えがある。というか、俺がさっき言っていた俺以上の明久の天敵って言うのが彼女なんだけど。

「趣味は吉井明久を殴ることです」

ほら、明るい笑顔のまま、語尾に『』まで付けて、何とも危険な趣味を言って退けているじゃないか。

「はろはろー」

笑顔でこちら（明久）に向かって手を振っている。

「……………あう。し、島田さん」

「吉井、今年もよろしくね」

明らかに落胆の声。それはそうだろう。折角女子が居たっていうのに、それが自分の天敵だったのだから、そのショックは相当のものだ。

「……………おかしい。僕がこいつらと同レベルなんて！」

心の声が漏れてるぞ、明久。

それに正直、君と同レベルでガツカリするのは彼等の方だと思う。島田さんの自己紹介が終わると、他に目立つような発言をする生

徒もないまま、名前を言うだけの作業が続いた。そして、遂に俺の番がきた。

ここでどれだけインパクトのある自己紹介が出来るかで、俺のここの立場が決まる。俺には一年のブランクがあるし、うまく溶け込むには第一印象が大切だ。

さて、このメンバーに対して一番良い挨拶はなんだろうか。

.....。

.....。

.....。

.....。

..... やっぱり、普通にいくしかないな。さっき明久がどんな目に合ったかを考えれば、迂闊な事を言うのは非っ常——にまずい気もするし、それが一番無難だ。

魚心あれば水心ってね。

「皆さん。初めまして。俺の名前はヴェルサス・スクワランと言います。気軽にヴェルって呼んで下さい。今年からこの学園の生徒になったため友達が少ないので、友達になってくれると嬉しいです。宜しくお願いします」

一礼して、席に着く。何人かは拍手もしてくれたし、まあまあの手応えだと思う。

さて、次はいよいよ（問題の）明久の番だ。何かまた余計な事をしそうな気もするけど、それを楽しみにしている自分もいるし——

——とりあえず、成り行きを見守るとしよう。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね」

あつ、馬鹿。

『ダアアーリーーン!!』

野太い声の大合唱。俺も随分多く不快な物は体験してきたけど、これもなかなかの部類に入る。ノリが良いのは嫌いじゃないけど、ちよつとこれは……………。

俺でさえ少し気分が悪いくなくなってしまったのだ。言われた本人はどうなっているのか。

振り返って見ると、明久は顔が真っ青な上に膝が笑っていた。相当な吐き気も催しているらしく、今にも倒れ込みそうだ。

「――失礼。忘れて下さい。とにかくよくお願い致します」
明らかな作り笑いを浮かべ、早々に（というか倒れ込むように）席に着いた。

恐らく今、明久は改めてFクラスの恐ろしさを思い知っている事だろう。……………正直俺も、このクラスを再評価し直さないとけないと感じていた。

しかし、こんな事があつたというのに、誰一人気にした様子もなく、その後も別段変わったことも無いまま自己紹介が続いていった。そして、明久が舟を漕ぎ始めた気配がし出した頃、不意にドアが開き、彼女は現れた。

「あの、遅れて、すみま、せん……………」

『えっ?』

俺を含めた数人以外、ほぼ全員が思わず声を上げていた。別に彼女がおかしな格好をしていた訳ではない。

確かに、まるでウサギのように保護欲を掻き立てる可憐な容姿の少女が、男子ばかりのこの場に現れれば、多少場が熱気に包まれても不思議ではない。だが、そうではない。場に満ちているのは熱気というよりむしろ、困惑だ。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さ

んもお願いします」

生徒が騒いでいる中、平然としている福原先生が彼女に話し掛けた。見た目は貧弱そうな先生だが、結構肝が据わっている。ただマイペースなだけかもしれないけど。

「は、はい！ あの姫路瑞希といいます。よろしくお願いします

……」

身体を縮こまらせ、か細い声を出す彼女の姿は、かなり愛らしいものだった。しかし、皆はそういう理由からざわついている訳ではない。

「はいっ！ 質問です！」

既に自己紹介を終えた生徒——たしか柴崎功……だったはず。違ったらごめん柴崎（仮）君——が高々と挙手した。

「あ、は、はいっ。なんですか？」

「なんで、ここにいますか？」

柴崎（仮）君が、彼女にこんな失礼な質問をしてしまうのも無理はない。というか、彼の持った疑問を、ほとんど全員が持ったはずだ。

俺でさえ知っている事なので簡単に説明させてもらうと、彼女の成績はFクラスなんてバカの集団には相応しくないほど優秀なのだ。入学して最初の試験では学年次席の成績を納め、それ以後の試験でも上位一桁に名を列ねていた秀才。それが彼女、姫路瑞希だ。

つまり、柴崎（仮）君の質問をもうちょつと言葉を足して言えば、『なんでキミみたいな優等生がAクラスじゃなく、バカばかりのFクラスに居るの？』

って感じかな。流石に自分で『バカばかり』などとは言わないだろうけど、それに似た事を言うはずだ。

では、何故彼女はここにいいのか。それは、

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

こついう事だ。

彼女は元からあまり身体が丈夫そうではない。恐らく日々の勉強で疲労が溜まって、熱が出てしまったのだろう。

この学園は、『自己管理も自分の責任』という観念を持っている為、定期試験を体調不良で欠席・中退・早退した場合、追再試を受ける事が出来ない。つまり問答無用で無得点扱いになってしまう。だから彼女は、否応なしにFクラスになってしまった訳だ。

悲しいけど、これが現実なのよね。

さて、姫路さんの言い分を聞いて納得していたクラスメイト達も、ざわざわと言いつつ話を始めていた。

『そう言えば、俺も熱——の問題——が出たせいでFクラスに』
それだけでFクラスになったりしない。

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

出てたのは基本問題だった気がするし。

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』
テストを受けてる場合じゃないだろ。

『黙れ一人っ子』

しかも嘘かい！

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

すぐバレるような嘘を吐くんじゃない！

学園長の言葉は間違っただけじゃない。まさにここは『バカの巣窟』だ。

「で、ではっ、一年間よろしく願いますっ！」

ざわついてきた教室内に居たたまれなくなったらしく、彼女は逃げないようにして明久と雄二の間の席に着いた。

「き、緊張しましたあ……」

席に着いて、漸く肩の荷が下りたようにホッと息を吐く彼女。しかし、何故そこに座ったのだろうか？ 幾らここが狭い教室と言っても、教壇からここまででは少し遠い。その間に、空いていた席は幾らでも……。

『『『ちつ……………』』』

……………前言撤回。明久の隣の方がまだ幾らか安全だ。他の男子生徒の間なんかに座っていたら、彼女は何をされることか分かったもんじゃない。

おっとりしていそうだけど、意外としっかりしていて、お兄さんは安心したよ。

「あのさ、姫——」

「姫路」

などと一人で感心していると、明久が声を掛けようとして雄二に邪魔されていた。

おいおい明久、そんな人生のエピローグが始まったような顔をするな。まだ序盤も終わってないんだから。

「は、はいっ。何ですか？ えーっと……………」

慌てて雄二の方を向いた彼女だったが、如何せん、名前が分からないらしく少し困り顔だ。

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしく願います」

当たり前だけど、この教室に相応しくないほど礼儀正しい娘だな。しつかりやっていけるのだろうか。

「ところで、姫路の体調は未だに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

ここで明久が口を挟んだ。明久はバカだけど、いやバカだからなのか、心根は優しい子だ。本当に彼女を心配したのだろうか。

「よ、吉井君！？」

一方彼女は、明久の顔を見て大層驚いていた。

「姫路。明久がブサイクですまん」

雄二。それはフォローになってないと思う。むしろ、傷口に塩を刷り込む行為だ。

「そ、そんな！ 目もぱっちりしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

「可愛い？」

あつ、しまった。思わず口に出してしまった。

明久が、なんて事言うんだコイツみたいな顔をして俺の事を凝視していた。

「そう！ 可愛いんです！！」

しかし、彼女は力いっぱい俺の意見を肯定していた。明久の表情が固まる。

「その……ごめん、明久」

「僕、もうお嬢にいけない……」

明久はさめざめと泣いていた。

「流石に可愛くはないと思うが、そう言われると、確かに見てくれば悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも、明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

渡りに舟とはまさにこの事か。雄二の思わぬ発言で、明久の顔がぱつと明るくなった。

「雄二、それは誰——」

「そ、それって誰ですかっ！？」

明久の台詞が姫路さんの必死な声に遮られる。

さっきの可愛い発言といい、今の必死さといい。もしかしてこの娘は……。

「確か、久保——」

明久が息を呑む。姫路さんは身を乗り出す。

そして、雄二が下の名前を口にした。

「——利光だったかな」

久保利光 ↓ ♀（性別／オス）

「……………」

「よしよし明久。俺の胸で存分に泣け」

再びさめざめと泣き出した明久を愛しながら、雄二に視線を向ける。

「雄二、あんまり明久を苛めてやるな。今のは少し悪ふざけが過ぎるぞ」

「悪い悪い。明久、今のは半分冗談だ。安心しろ」

「え？ 残りの半分は？」

「なんだ。半分冗談か。それなら良い」

「良くないよ？ 全然良くないからね、ヴェル！」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「ねえ雄二！ 残りの半分は！？」

明久が一段と大きな声を上げる。

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

そのせい（恐らくそれだけではないだろうが）、先生が教卓を、パンパン、と叩いて警告を発してきた。

「あ、すいませ——」

バキィッ サラサラサラサラ……

教卓が砕け細かい粉末になって崩れていき、風に流されて飛んでいく。

「……………いやいやいや！ 幾らボロくても流石にそうはなるまい。そうはなるまい！」

せめて効果音をバラバラにすべきだ。そうすればまだ、まだセーフのはず。いや、軽く叩いただけでゴミ屑になるのも駄目だと思うけど、粉末よりは遥かにマシだ。

「え……………替えを用意してきます。少し待っていてください」

俺の葛藤など露知らず、先生は教室から出ていった。

「あ、あはは……………」

姫路さんも、苦笑いをしていた。

その隣で、明久がふと真剣な顔をして何か考え込んでいた。そして、徐に顔を上げ雄二を見据えた。

「……雄二、ちよつといい？」

「ん？ なんだ？」

欠伸をしていた雄二は、声を掛けられ明久に視線を向けた。

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

二人は立ち上がり、廊下に出ていった。その時、明久は姫路さんと目が合ったようだ。彼女は少し頬を赤らめて、目を逸らす。さつきから思っていたけど、やっぱり

「姫路さん」

「えっ？ あ、はい。なんでしょう？ えーっと……」

「俺はヴェルサス。ヴェルサス」スクワランって言います。気軽にヴェルって呼んで」

「は、はい。ヴェル君。私は姫路と言います。それでその、私に何かご用でも……？」

「えつとさ。さつきから思ってたんだけど、姫路さんって、明久の事好きだよな？」

周りの生徒に聞こえないように、彼女に顔を近付けて出来るだけ声を抑えて尋ねた。最初は俺の質問の意味が解っていない様子で、不思議そうな顔をしていたが、徐々に理解してきた様子で目が段々と開かれていき、顔を真っ赤にして――

「え、ええ――！！！！！！？」

――絶叫した。

「姫路さん、どうしたのっ！？」

廊下にいた明久達にも、その叫びが届いていたらしい。慌ただし

くドアを開けて、明久が覗き込んできた。

「な、なな何でもありませんっ！！ 吉井君は廊下で坂本君とお話ししてくださいっ！！」

「そ、そう？ 大丈夫なら良いんだけど……………」

釈然としない面持ちで、明久は渋々顔を引っ込めていった。

さて、話題の中心であり邪魔者であった明久が消えた事で、ようやく話が進められる。そう思って姫路さんを見ると、

「えつとあのそのななななでそれを、じゃなくて何を言ってるんですか！？」

目をぐるぐると回しながら、明らかに挙動不審な女生徒が立っていた。

幾らなんでも動揺し過ぎだと思う。

『なんだなんだ』

『一体どうしたんだ姫路さんは』

『挙動不審な姿も可愛いなあ』

何事かとクラス中の視線が彼女に集まる。しかし、混乱している彼女はそれに気付いていない。

「姫路さん姫路さん。まずは落ち着いて。そして座って」

「あつ……………は、は、はい……………」

周りの注目を集めている事に気が付いたようで、力が抜けたように、彼女はへたりこんだ。少し経って、彼女の呼吸が整った頃を見計らい、話し掛ける。

「大丈夫、姫路さん？」

「は、はい。なんとか…………。でも、なんでヴェル君がその事を？ 私達、今日初めて会いますよね？」

「そうだけど、さっきの態度を見てたら何と無くね。今までも、同じような人達をいっぱい見てきたから、そういうことすぐに分かるんだよ。多分、雄二も薄々気付いてるんじゃないかな」

「さ、坂本君ですか！？」

これは完全に俺の推測だけど、ほぼ間違いないはずだ。しかし、

今の発言も姫路さんにはショックだったらしく、赤い顔をして俯いていた。

「あ、あのヴェル君。この事、吉井君に言いますか？」

俯いたまま、恐る恐る俺にそう尋ねてきた。まあ、本人としてはそれが気になるところだろう。いきなり好きな人を言い当てられ、それで終わりだとはとても思えないはずだ。

「言わない言わない。こういう事は、本人が勇気を出して言わないとね。それに、第三者から言われて気付かれても、嬉しくないだろう？」

しかし俺は、だからどうしようなんて気は全く無い。だから、安心させるように微笑み掛けながら、俺はそう言った。彼女は少し不安そうにしているが、一応は俺の言葉を信じてくれたらしく、微かに頷いていた。

「だから、俺は頑張つて、としか言えない。まあ、あいつはライバルもそんなにいないから、大丈夫だと思うけど」

それに一人は『男』だしな。しかし、それは言うまい。言わぬが花、知らぬが仏ってね

「は、はい！ 頑張ります！」

拳を硬く握り、決意を露にする姫路さん。こんな可愛い娘に好かれるなんて、明久も隅に置けないなあ。

その姿を微笑ましく、思いながら見ていると、雄二、明久、それと福原先生が教室に入ってきた。

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

二人が席に戻ると同時に、壊れた教卓をボロい新品（間違っない）に替えた福原先生がHRを再開した。

「えー、須川亮です。趣味は――」

また、単調な自己紹介が続いてく。その間に俺は後ろを向き、明久に話し掛ける。

「明久、さっき雄二と何を話してたんだ？」

「うん、ちよつとね」

ちらりと、横に座る姫路さんに視線を向けた。それは一瞬だけだったけど、それで大体何を考えているのかは解った。

「なるほど、姫路さんの為に上位クラス……いや、Aクラスへ戦争を吹っ掛けようって魂胆か」

「えっ、なんで……？」

「明久は分かり易過ぎなんだよ。しかし、戦争ねえ。しかも相手はAクラス。勝算は有るのか？」

「それは………」

自信無さげに目を伏せ、口を嚙む。自信は無いという事か。

いや、この質問は酷だな。戦争は一人や二人がやろうと思って始められるものじゃない。勝つためには全体の意志が一致して、団結しなければならぬ。それがこのクラスで可能だろうか。それが問題だ。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先生に呼ばれて、雄二は立ち上がり、前に出ていく。

ゆっくりと、しかし足取りは確かに、雄二は教壇に歩み寄っていた。その背中はとても頼もしく見え、代表としての威厳をありありと示している。

「坂本君は、Fクラスのクラス代表でしたよね」

福原先生に問われ鷹揚に頷く雄二。

雄二は自信に満ちた表情で教壇に上がり、俺達の方に向き直る。

そして、教卓に手を着け、全員に聞こえるようにはっきりと言った。

「Fクラスの坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

クラスメイトから大して注目されているわけでもない。恐らく真面目に聞いていない人もいるだろう。しかし、それでも雄二は言葉を続ける。

「さて、皆に一つ聞きたい」

ゆっくりと、一人ひとりの顔を見、目を見るように告げる。

間の取り方が上手いのと、その対応の巧みさからか、全員の視線はすぐに雄二に向けられるようになった。

皆がしっかりと自分を見ている事を確認した後、雄二の視線は教室の各所を巡り出す。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

その視線に釣られて、俺と明久以外の生徒も、それらの設備を順番に巡っていた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが——」

一呼吸おいて、静かに告げる。

「不満はないか？」

『大ありじゃあつ!!』

二年F組生徒の魂の叫び。

俺の心配はどうやら杞憂だったらしい。この瞬間、間違いなく、Fクラスは一つになっていた。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ！』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！』

皆が堰を切ったように次々と不満をあげるなか、俺は明久に話しかけていた。

「なあ、明久。さっき俺、勝算があるかって聞いたよな」

「え？ あ、うん」

いきなり話し掛けられ、戸惑ったように返事をする明久。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは代表としての提案だが――」

「本当は、そんなことどうでも良いんだよ」

「えっ？」

明久は俺が何言いたいのかわからないようで、頭の上に疑問符を大量に浮かべている。俺は優しく微笑みながら、言葉を続ける。

「俺は、分の悪い勝負は嫌いじゃない」

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

雄二が戦争の引き金を引いた瞬間、明久は、また間抜けな顔を
して俺を見詰めていた。

第4話 宣戦布告

バカテスト 英語

【第三問】

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは

」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「
●
」♪*
x

」

教師のコメント

できれば地球上の言語で。

ヴェルサスⅡスクワランの答え

「これは私の祖母メアリーが愛用していた、彼女が結婚する際に彼女の父から贈られた大切な本棚です。彼女が亡くなる前に、私が譲り受けました。私も死ぬまで大切にします」

教師のコメント

勝手に話を作らないでください。

さて、戦争の開幕が雄二によって宣言された訳だが、クラスメイ
トの反応はあまり芳しいものではなかった。やはり、いきなりAク
ラスに戦争を吹っ掛けるのは無謀だと感じた者が多いようだ。

それはそうだ。向こうは天下のAクラス。片やこちらはバカばっ
かりのFクラス。戦力差はまさに天と地程ある。それこそ、リクラ
イニングシートと座布団以上の差だ。

そんな桁違いの実力を持つ相手とは戦いたくないと思うのが人の
性。仕方がないことだ。

しかし、雄二は負ける気は毛頭無いらしい。さつきと変わらず不
遜な態度でそこに立っている。

「みんな、俺が言った事は無謀だと思っているだろうが、そんな
ことはない。必ず俺達は勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
嘘やハツタリではない、確かな自信を持って雄二は言った。

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

しかし、そんなことを言っても信用出来る訳がない。だから皆、
否定的な意見ばかりを言うわけだが、やる前から無理だと言つのは、
あんまり好きじゃないな。

喩えそれが、どんなに無茶で無謀に思える事だとしても、だ。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことで
きる要素が揃っている」

そんな要素があるか？

とりあえず、周りを見渡してみる。

まず目に付いたのはやはり姫路さん。彼女はAクラスと渡り合え
る実力を持つ唯一の人物だ。間違いなく攻撃の要になる。彼女は要
素と見て良いだろう。

次に目を引くのは、畳に顔をつけ姫路さんのスカートを覗いてい
る土屋康太君だろうか。気配が無さすぎて彼女には気付かれていな

いが、かなり悪目立ちしている。

「……………（ボタボタ）」

……………鼻血まで出してるし。

そんな彼を見ていて、ふと思い出した名前があった。名前といっても本名ではなくて渾名なのだけど。

確か、寡黙なる性職者【ムツツリーニ】とか言ったかな？ その名前の由来はムツツリスケベらしい。今の彼と普段の目立たない彼の姿を比べれば、そのムツツリ度は明白だ。

ムツツリーニは保健体育が得意という噂もある。土屋君が本当にムツツリーニだとしたら、保健体育では戦力になるだろう。それにカメラや盗聴機の扱いはプロのそれだと言うことは確認済みだし、あの身体能力だ。実践以外での活躍の場も多いだろう。彼は情報戦や隠密行動などで大きな戦力になるはずだ。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「呼ばれてるぞ。ムツツリーニ君」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

卓袱台の下に潜り込んでいたムツツリーニ（これからはこう呼ぼう）君の肩を叩き、引きずり出す。顔にくつきり畳の後がついている上に、鼻血まで出しているのに、必死に首を振る彼の姿は、少し哀れみを誘う。

「おい、ヴェルが今あいつの事ムツツリーニって言わなかったか？」

「言った言った。間違いなくムツツリーニって言ってたぞ」

「ムツツリーニって、あのムツツリーニか？ そんな馬鹿な……………」

「だが見ろ。あそこまで明確な証拠があるのに、まだ白を切るつもりだぞ」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……………」

「……………違う！！（ブンブン）」

必死に首を振るが、誰一人として話を聞いていない。みんな完全に土屋康太「ムツツリー二」と認識していた。

「そうだ。その土屋康太こそ、あの有名な寡黙なる性職者だ」
ムツツリー二

「……………！！（ブンブン）」

良かった。本人は否定しているが、雄二が言い切ってくれたおかげで、その事実が確かなものになった。

しかし、あれほどはつきり覗き行為をして、その証拠も隠せていないのに、それでも隠し通そうとするとは……………。

ある意味筋の通った、好感の持てる態度かもしれない。

当人はと言えばまだ認めたく無いようで、顔が擦りきれるんじゃないかって程量の跡を擦りながら前に出ていった。

……………やっぱり哀れかも。

「ねえ、ヴェル」

「うん？ どうした、明久？」

背中を指で突つつかれ、明久の方に振り向いた。

「ヴェルはムツツリー二がムツツリー二だって知ってたんだね」

ああ、その事ね。それが気になるのは当たり前だろうけど。

「いや、知らなかったよ」

「えっ？ でもさっき……………」

「あれは、噂を聞いてたし、去年女子更衣室にいたアイツを見掛けた事があったからだよ。それに、あそこまではつきり覗きをしていれば、自然とな」

「ああ、なるほど」

全くムツツリー二はしょうがないな、みたいな笑みを浮かべながら、壇上に立つ彼を見ている明久だった。君も人のこと笑えないと思うけどなあ。

まあ、別に良いか。

「次に姫路だ。姫路のことは説明する必要もないだろう。皆もそ

の力はよく知っているはずだ」

「えっ？ わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待してる」

やはり彼女はこのクラスの伝家の宝刀ってことらしい。本当に桁が違う訳だし、流石は学年二位の実力の持ち主だ。

『そうだ。俺達には姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』

その彼女の為の戦争なんだけどね、これは。

「木下秀吉だっている」

秀吉か。そういえば、さっき演劇部に所属してるって言ってたな。学力はここに所属している時点で低い事が窺えるが、演劇か。もしかして、演技で場を攪乱させたり、工作員として行動させるつもりなんだろうか？

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

木下優子……というと、確かAクラスの女子だったよな。そうか、秀吉は彼女の弟だったのか。なるほど、それで皆期待してるという事か。

「当然俺も全力を尽くす」

自分の胸板を叩き、雄二が高らかに宣言する。

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれてたんじゃなかったか？』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

いや、たぶん実力だったと思うけど？

そう思ったが、折角高まっている場の士気に水を差したくなかったので黙っている。しかし、

「それに、吉井明久だっている」

……シン――

明久の名前が出た瞬間、場が静まり返った。

おい、俺の我慢はなんだったんだ？

「ちよつと雄二！ どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！ 全くそんな必要ないよね！」

「そうだぞ、雄二。《観察処分者》の明久の名前を出す必要は全く無かっただろ」

「ヴェルそれは言っちゃダメええ！」

気持ち悪い声を出すんじゃない。

『観察処分者？』

『それって確か、馬鹿の代名詞だったよな？』

それ、正解です。

「ち、違うよつ！ ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そうだ。馬鹿の代名詞だ」

なんとか誤魔化そうとしていた明久の努力は、雄二によってふいになった。

「肯定するな、バカ雄二！」

《観察処分者》とは、学生生活を営む上でかなり問題のある生徒に課せられる処罰の事だ。ちなみに、今現在《観察処分者》は明久だけしかない。その上、明久がこの学園が開校して以来（といっても歴史があるわけではないが）初の観察処分者の為、それはまさにキング・オブ・バカの称号というわけだ。

「あの、それってどういうものなんですか？」

頂点に近い場所にいた姫路さんには、底辺に位置するその称号に馴染みがないらしい（当たり前だ）。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそついった類の雑用

を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

観察処分者用の召喚獣は、本来の試験召喚獣と違って物に触れる事が出来る。召喚獣は、見た目は召喚者をデフォルメしたような可愛らしいものだが、その力は（点数にもよるが）人間の何倍何十倍とある。

その力で重いものを運んだり、移動させたり、運搬したりといった雑用をするのだ。

「そうなんですか？ それって凄いですね。物に触れられるって便利ですよ」

姫路さんの目がキラキラと輝いていた。羨望と尊敬の念が込められた視線を送られて、明久はむずがゆそうにしている。

「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ」

「そうそう。試験召喚獣は教師がいないと召喚出来ないから、明久には全くメリットが無いからね」

「余計な事言わないでよ！」

だって、このまま勘違いしたままだと姫路さんが可哀想じゃないか。

真実を言わないのは嘘を吐くのと五十歩百歩だよ？

「それに明久は、召喚獣に掛かる負担の約七割がフィードバックするから、疲れるばかりで全然楽しくないし」

「全部バラされたあ！ て言うかなんでそんなに詳しいの？」

だって、俺がフィードバックの変換率を身を持って設定したんだから、とは学園長との約束で言うわけにはいかないし。仕方無い。

「学園長から聞いたんだよ。それに、俺達は去年一緒に雑用してた仲じゃないか」

「あつ。そう言えば、そうだったね」

納得するの早いな、おい。

「えっ？ ヴェル君も観察処分者なんですか？」

今度は姫路さんからの質問。今の会話の流れから俺も観察処分者

だと考えるのは自然だけど、俺の場合は事情が明久とは全く違う……
…んだけど、詳しくは話せないし。まあ、簡単な説明で良いか。

「違う違う。俺は明久が観察処分者になる前から雑用を手伝ってたから、新しい雑用係（明久）が来た後も継続して手伝ってただけ
フィードバックもするけど」

最後のは蛇足だったかな。そう思ったけど、知られたからと言って別に困るものでもない。と思ったんだけど。

『おいおい。それじゃあ、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいって事じゃないのか？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが二人いるってことになるよな』

おつ。良い勘してるじゃないか。だけど、それはちょっと違うな。俺は別に痛みがフィードバックするのは気にしない。いや、むしろそっちのほうが臨場感があって真剣になれる。

明久の方は、戦闘に参加する気はあんまりないみたいだけど。

「みんな、勘違いするな。雑魚は明久だけだ。俺はフィードバックなんか厭わないぞ」

「ヴェル、君だけは味方だと思ってたのに！」

傷を舐め合うのは味方じゃないよ。明久。

「そうだ。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」

「雄二、そこはフォローしてよ!？」

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「せめてこつちを見て！」

本当にいてもいなくても同じような扱いを受けていた。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ!!』

「ならば全員筆^{ペン}を執れ！ 出陣の準備だ！」

『おおーっ!!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！ Aクラスのシステムデス

くだ！」

『うおおーっ!!』

「お、おー……」

クラスの熱気と怒声に気圧された姫路さんも、小さな拳を掲げていた。明久が彼女の行動を見て百面相している。大方、守ってあげたいけど、結局守られる事になるだろうな、とか考えているのだろう。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

さつきは無視した明久に大役……というか、一番危険な役目をさせようとしている雄二だった。

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

流石に自分の身の危険がかかっていると頭の回転が良いな。

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加える事はない。騙されたと思って行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

雄二の迷いの無い言葉に少し迷いが出ている明久だった。

明久、よく考える。どうやら雄二は君を貶める事は全く厭わない人種らしいぞ。

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

まだ迷っている明久に追い討ちをかける雄二。

その一言で明久の顔から警戒色が消え、代わりに仕方無いなという風に肩を竦め、こう言い放った。

「わかったよ。そこまで言うなら僕が使者をやるよ」

「ああ、頼んだぞ」

クラスメイトの歓声と拍手に送り出され、憐れなスケープゴートがDクラスへと向かっていく。

「雄二」

「なんだ、ヴェル？」

「君、明久には容赦無いよね」

「まあな」

「騙されたよっ！！」

あれから数分後、ボロボロのボコボコにされた明久が教室に戻ってきた。

俺と雄二は、明久のその姿を見て一言。

「やはりそうきたか」

「二人ともやはりってなんだ！ やっぱりこうなるって分かってたんじゃないか！」

「当然だ。これくらい予想出来ずに何が代表だ」

「というか、明久だって薄々こうなる事は予想してただろ？」

雄二があそこまで断言していたから信じ込んでしまったただけだとしても、その前段階で危機を感じたのなら断れば良かったのに。

「ぐっ……！ 確かにそうだけど、少しは悪びれてよ！」

俺もまさかここまでボコボコにされるとは思わなかったんだ、って言ったら火に油なんだろうなあ。

「吉井君、大丈夫ですか？」

「大丈夫、吉井？」

酷い有り様の明久に女子二人が近付いていく。二人の優しさに、なんだか感極まった顔をした明久だった。

しかし、明久気を付ける。片方はおそらく別の心配をしているは

ずだ。

「うん。大丈夫だよ。見た目ほど大した傷じゃないから」

「そうですか。良かった……」

「本当に良かった——」

「二人とも、心配してくれてありが……」

「まだウチが殴る余地はあるんだ……」

ほらな。

「もうダメ！ 僕、死にそうっ！」

島田さんの発言で、慌てて畳の上を転げ回る明久。何とも痛々しい姿だった。

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

雄二は本当に明久の友人なのだろうか？ 未だに転げ回っている明久に見向きもせず、いち早く教室から出て行ってしまった。

まだ少し、判断材料が足りないな。

「あの、痛かったら言ってくださいね」

優しさ全開だね、姫路さん。これは明久の好感度も上昇間違いなしだ。

「大変じゃったの」

秀吉も明久の苦労を労い、肩を叩いて廊下に出ていく。

「あの二人は良い友人だな」

「ヴェルや雄二と違ってね！」

あらら。まだご立腹でいらっしやる。しょうがないなあ。

「そう拗ねるなって。今日は俺の弁当を分けてやるから」

弁当という言葉に反応して、明久の耳がピクリと動く。もう一押しかな。

「今日は多目に作ってきてあるから、少しと言わず半分位分けても良いぞ？」

「ヴェル、君は僕の一番の親友だ！」

抱き着いてこようとする明久の頭を押さえて離す。

幾ら食生活があんな状態でも、手のひら返すの早すぎじゃないかな？

「……………」（サスサス）

そんな事をしている俺達に、自分の頬をさすりながらムツリーニが近付いてきた。

「ムツリーニ君。畳の跡はもう消えてるけど？」

「……………！！」（ブンブン）

「それより鼻血を拭いた方がいい。はい、ティッシュ」

「……………」（ゴシゴシ）

「ムツリーニ、そこまでバレバレなのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思う」

俺もそう思う。

「……………！！」（ブンブン）

それでも否定しようとしているムツリーニ。

「——何色だった？」

「みずいろ」

即答だった。

「やっぱり、ムツリーニは色々な意味で凄いよ」

「それで隠せていると思っているあたりが特にね」

「……………！！」（ブンブン）

そうやってのんびり教室内で話をしていると、

「ほら吉井。アンタも来るの」

島田さんが、明久の腕を引っ張った。

うげっ、て感じに明久が表情を歪ませた。しかし、島田さんの力が余程強いのか、すぐに諦めたように返事をする。

「あー、はいはい」

「返事は一回！」

「へーい」

「……一度、Das Brechen——ええと、日本語だと……」

Das Brechen ってドイツ語だな。島田さんはドイツ育ちって言うてたし、思わず出たのだろう。

確か、日本語だと——

「……………調教」

そうそう、調教——ってなんでムツツリーニはそんな事を知ってるんだ。

「そう。調教の必要がありそうね」

「調教って。せめて教育とか指導って言うてくれない？」

「じゃ、中間とってZuchting——」

「……………それはわからない」

なんでだ。

「それは折檻。島田さん、それ悪化してるから」

「そう？」

なんで調教と教育・指導の間が折檻なんだろうか。良い娘なんだけど、少し常識が足りていない。

「それにしてもムツツリーニ。どうして『調教』なんてドイツ語知ってるの？」

俺も気になっていた事を代わりに明久が聞いていた。さて、気になるその答えは——

「……………一般教養」

「どの方面の一般教養だ、それは」

「相変わらずムツツリーニは性に関する知識だけズバ抜けてるね」ズバ抜け過ぎだ。もはや偏り過ぎといっても過言じゃないぞ。

「……………！！（ブンブン）」

そんな会話をしている内に、俺達は屋上に通じる扉の前まで辿り着いた。それを雄二が開け、外に出る。

眩い日差しに、姫路さんのスカートを注視しているムツツリー二以外の全員が目細めた。

「明久。宣戦布告はしてきたな？」

フェンスの前にある段差に座った雄二が、明久を見据えてそう尋ねる。

明久は確かにDクラスへ赴き、ボコボコにされて帰ってきたが、宣戦布告が受理されなかったら洒落にならない。

「一応今日の午後に関戦予定とは告げて来たけど」

「午後からって事は、先に昼食か。腹が減っては戦は出来ないってこと？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「今日は大丈夫！ ヴェルがお弁当を分けてくれるからね！」

「今日は、じゃなくて今日も、だろ？ 全く、週に二回は俺に集ってくるくせに」

そう、明久はよく俺に集ってくる。その度に何かしら明久をからか……もとい、明久に試練を与えてクリアしたら弁当を分ける事になっている。大体は失敗するのだが、俺が面白ければ一応クリア扱いにしているので、ほぼ毎回分けていた。

今日の言い出しっぺは俺だったが、恐らくもともと集るつもりだっただろう。

「えっ？ 吉井君は普段お昼を食べないんですか？」

姫路さんの驚いた声。

「いや、一応食べてるよ」

「……あれは食べていると言えるのか？」

先に雄二が横槍を入れた。その言葉に、明久が不満そうな顔をする。

「何が言いたいのさ」

「いや、お前の主食って——水と塩だろう？」

「失礼な！ きちんと砂糖だつて食べてるよ！」

「吉井、それは食べるとは言わないわよ」

「舐める、が正しい表現だろうな」

今の会話で皆の明久に対する視線が妙に優しくなっていた。明久は、逆に辛そうだった。

「ま、飯代まで遊びに使い込んでるんだから、自業自得だよな」

「し、仕送りが少ないんだよ！」

嘘を吐け。大方、仕送りのほとんどを娯楽に使ってるんだろう。

「……あの、良かったら私がお弁当を作ってきてきましようか？」

「え？」

姫路さんの優しい言葉に、明久がすつとんきょうな声を上げる。なるほど、それは良い案かもしれない。

「良いな、それ。良かったじゃないか、明久」

「えっ？ それは僕にとっては願ってもないことだけど、本当に良いの？」

「はい。明日のお昼で良ければ」

「ありがとう、姫路さん！ とっても嬉しいよ！」

明久の声が弾む。姫路さんも頬を染めて、少し照れているようだ。良いねえ。青春の一風景だよ。

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だ、け、に作ってくるなんて」

やけに刺のある島田さんの言葉。面白くないのも無理ないか。気になる男子に、可愛い女の子が魅力的な提案したら、それは不機嫌にもなる。

仕方ない。ここは俺が助け舟を出すか。

「ならさ、明日は皆で弁当を持ち合わないか？」

「……えっ？」「」

皆の視線が俺に集まる。

「皆で持ち合えば、それを話題により親睦を深められるし、それに何より俺が皆と早く仲良くなりたいたいからさ。そんなに悪い提案じ

やないと思うけど、駄目かな？」

「別にワシは構わぬが」

「……………俺も」

「……ウチも構わないわよ」

「俺も別に構わないが、明久はどうするんだ？ こいつの食事が侘しすぎるから、こういう話になったんじゃないか」

皆が賛同の声を上げるなか、雄二がもつともな質問をしてきた。その点もしっかり考えてあるさ。

「明久の分は姫路さんに作ってきてもらえば良い。もともと姫路さんが自分で作ってくるって言ったんだから、その意見は尊重すべきだろ？」

「まあ、確かにな。良いんじゃないか」

雄二の賛同も得られ、皆が一樣に頷いた。姫路さんが嬉しそうにしているのはもちろんだが、島田さんも少しだけ嬉しそうに見える。「じゃあ、この話はこれで決定ってことでお仕舞い。試召戦争の話に戻ろう」

明久が、おお、そういうえばみたいな顔をしていた。おいおい。こっちが本命だろうに。

「まずは確認。今日の午後からDクラスと戦争が開幕する。それは間違いないね」

「ああ。そうだ」

雄二が鷹揚に頷く。

「のう、雄二。どうしてDクラスから攻めるのじゃ？ 段階を踏むならEクラスからじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？ 一体どういう狙いがあるのじゃ？」

「ああ、それか。色々理由はあるんだが、Eクラスを攻めないのは、戦うまでもない相手だからだ」

「え？ でも、僕らよりクラスは上だよ？」

明久が、頭に疑問符を大量に浮かべながら雄二に尋ねる。確かに、明久の疑問はもっともだ。自分達より上のクラスを戦うまでもない

と切って捨てるのは不思議だろう。

「明久、クラスが上といっても一つしか変わらないんだぞ？　そんなに差があると思うか？」

「思わないけど……でも、だったらなんでDクラスなの？」

「Dクラス相手に俺達Fクラスは危なげも無く勝てるか？」

「????」

「要はそれが一番の理由なんだろう、雄二？」

また疑問符を大量展開している明久を置いてきぼりにして雄二に問い掛ける。少し驚いた表情をした雄二は、それでも確かに頷いた。
「あ、ああ。まあな。厳しい戦いになる初陣を勝利で飾れば、全体の士気高揚にも繋がる。戦いに勝つには、一にも二にもまずは気持ちだ。それにこれはAクラス打倒に必要なプロセスでもあるからな」

どうやら、雄二はまだ色々と考えている事があるらしい。伊達に昔は神童と呼ばれていた訳ではないようだ。

「でもそれって、Dクラスに勝てなかったら意味ないよね？」

「負けるわけないさ」

明久の心配を笑い飛ばす雄二。

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる」

勝てる、と雄二は言い切った。バカばかりの集まるこのFクラスが勝てる。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは——最強だ」

何の根拠も無いその言葉は、まるで魔法の呪文のように明久達へと浸透していった。勝てるという自信に満ちた彼らの表情がそれを表している。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ」

学園長、Fクラスになったことを後悔するって？　そんなことは

絶対ありませんよ。だって、こんなに面白い子供が居るんだから。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

俺もこの子供達の為に、力を尽くそうじゃないか。

第4・5話 学園長室にて

昼休み。

約束通り明久に弁当を分けた後、すぐに俺は学園長室にやって来た。理由はもちろん、午後に行われる試召戦争についてのことだ。

「それでどうしたんだい、ヴェル？」

腕を組み、不遜な態度で俺を見据える学園長。今朝会ったばかりで、また昼休みに来た俺を不審に思っているだろうが、それを表には出さない。

いや、もしかしたら何を言いに来たのか解っているのかもしれない。

「はい。実は、今日の午後からウチのクラスがDクラスと試召戦争をすることになりました」

『試召戦争』という単語に、彼女の眉が少し動く。

「ほう。新学年の初日にもう上位クラスへ戦争を吹っ掛けるとは面白いじゃないかい。それで、アンタはどうしてここに来たんだい？ わざわざそれだけを報告しに来た訳ではないだろう」

やはり、何についての話なのかはある程度予想していたらしい。当たり前か。最低クラスが戦争を始めようって言うんだ。先生方の間では話題になっていることだろう。

「理解が早くて助かります。実は、折り入って学園長にお願いがあつて来ました」

「お願いだって？ 振り分け試験で無記名だったことに目を瞑って、得点をくれ、と言うのならそれは無理だよ。アンタは自分の意

思で全教科に名前を書かなかったんだ。つまり無得点扱いなんだよ。アンタには点が無い。自業自得さね」

厳しい彼女の言葉。

確かに俺は、先日の振り分け試験の際全ての教科で解答用紙に名前を書かなかった。おかげで、問題は普通に解いたが得点はゼロ。そして当然のごとくFクラスになった。

しかし、それは俺がわざとやったこと。学園長の言う通り自業自得だ。だから、俺はそもそもそんな事は考えていない。

「いえ、そうじゃありません」

「……なに？」

俺の言葉に学園長が眉をひそめる。流石に、俺がそんなことを言うとは思ってもいなかったんだろう。

「俺は、昼休みの間に十分を使って簡単なテストを受けようと思っています。学園長には、そのテストでの得点を、戦争で使う事を認めて欲しいんです」

俺の本当の願いはこれだ。

召喚獣の攻撃力である点数は、もっとも近い時期に受けたテストの得点が反映される。今回の場合でいえば、そのテストは振り分け試験ということになるが、俺の点数はゼロ。なら新しいテストを受ければ、その点数が使用出来ると考えた。しかし、それは本来は許されない。何故ならそのテストは、授業で行われる小テストにしろ、中間・期末といった大きなテストにしろ、学園長公認の正規のものでなくてはいけないからだ。

俺が受けようとしているのは、言わばまだ非正規のテスト。このままでは点数を使用出来ない。

もし、0点の教科がある場合、その生徒は試召戦争開始後に回復テストを受け、新たな点数を得ることが出来る。補給テストは時間が懸かる代わり、かなり点数を稼ぐ事が可能だ。

だが、今の俺に必要なのは点数じゃない。召喚可能な試験召喚獣だ。それこそ、召喚できるなら1点だって良い。

「……なるほど、そういうことかい。しかし、良いのかい？ それだと、他の連中に比べても、更に低い点でしか戦争に参加出来ないよ」

「構いません。例えば全教科1点だけでも俺は戦います」

「……………本気かい？」

「本気です」

迷いのない俺の返事に、学園長は額を押さえて溜め息を吐いた。そのまま暫く思索した後、唐突に彼女は頭を上げる。

「……………アンタは言い出したら聞かないからね。分かったよ。認めようじゃないか、アンタのその考え。少ない点数でせいぜい頑張るな」

「ありがとうございます、学園長」

その言葉に、俺は深々と頭を下げた。儀礼的とかそんなのではなく、本当に感謝の意を込めて。

「良いから頭を上げな。それにさっさといかないと昼休みが終わるよ。テストを許可はしたが、授業に遅れたりするのは許さないからね」

「はい。では、失礼します」

軽く一礼して退室する。

彼女の許可は得た。後は、十分の間に全教科何点取れるか。それは俺の努力次第。

とにかくにも、俺は今出来る事をするしかない。

第5話 Dクラス戦 前編

バカテスト 数学

【第四問】

問 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A + B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、
 ？？？の中から選びなさい。

？ $\sin A + \cos B$ ？ $\sin A + \cos B$
 ？ $\sin A \cos B$ ？ $\sin A \cos B + \cos A \sin B$
 n B 『

60

姫路瑞希・ヴェルサスⅡスクワランの答え

『(1) $X = \pi / 6$
 (2) ？
 『

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) X 〃 およそ3?』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちは解りますが、その上更にク
エスチョンマークまでつけるとは予想外でした。

吉井明久の答え

『(2) およそ?』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそと
クエスチョンマークをつける生徒は君が初めてです。

「まずは俺達先攻部隊が活路を開く！ 皆気合いを入れろ！！」

『うおおーっ！！！！』

先攻部隊の隊長になった俺は、拠点（教室）を出発する前に喝を
入れていた。約十人程の少数部隊だが、皆気合いは十分のようだ。

「よし、行くぞ！」

『おうっ！！』

全員で一斉に教室を飛び出し、渡り廊下に向かう。Fクラスは旧校舎の一番端、Dクラスは新校舎の一番端に位置する為、両者がぶつかり合うのは必然的にそこになる。そこを制した方が、この戦争に勝つ。

「来たぞ、Dクラスだ！ 皆、相手一人につき必ず二人で攻めろ！ 出来るだけこちらの戦力を温存させるんだ！」

『おう！』

新校舎側から迫り来るDクラスの先攻部隊。今回の試召戦争は、学年主任である高橋洋子先生が立会人の為、総合科目が召喚獣の得点になる。総合科目はクラスの实力差が直接戦力差になってくるので、かなり戦略を立てないと勝つのは厳しいだろう。いや、それより大切なのはみんなのやる気か。

しょうがない。みんなにやる気の出る事をしてやろうじゃないか。

「秀吉、皆を激励してやってくれ」

俺の隣に立つ先攻部隊の副隊長、秀吉に指示を飛ばす。

秀吉は見た目は完全に美少女だ。彼に激励してもらえば、やる気も出るだろう。

「ワシか？ しかし何故——」

「良いから！」

「う、うむ……みんな、頑張るのじゃ！」

可愛らしい表情で、皆を激励する秀吉。その一言だけで、場の熱気は一気に臨界点に到達した。

『っしやあ！ やったらあああ！！』

『やれる！ 今の俺なら世界も狙えるぜえ！』

『秀吉、君の為ならこの命捨てても良い！！』

みんな、気を付けてくれ。仮にも秀吉は男だ。

さて、やる気も気合いも煩惱も充分なFクラスの男達はさつさと召喚して、敵陣の真ん中に突っ込んでいった。

ヤバイ。少し煽り過ぎたかもしれない。

「おい、Fクラスの馬鹿達が突っ込んでくるぞ！」

「しかも、なんか目がヤバイ！ 奴ら死ぬ気か！？」

「みんな慌てるな！ たかがFクラスだ！ 冷静に応戦しろ！」

先行した連中と、彼らに気が付いたDクラスの生徒達が戦闘を開始した。

………二人一組で戦えと言ったのに、一対一^{サン}で勝負しちゃってるし。

「ヴェル！ 先に行った仲間の何人かが既にやられてしまったぞい！」

「くそっ！ 彼等の馬鹿さ加減を計算し忘れてた！」

『戦死者は補習！ さあ来い馬鹿ども！』

『い、嫌だ！ 鬼の補習はいやだああああ！！』

『だ、誰か、誰か助けてくれえええ！！』

『諦めろ！ さあ、戦争が終わるまで何時間でも指導してやる！』

『いやだああああ！！！！』

突如として現れた鉄人こと西村先生が、戦闘不能になった生徒を担いで去っていった。

試召戦争で戦死した生徒は、西村先生の鬼の補習を受けることになる。その補習が終わる頃には、趣味は勉強、尊敬するのは二宮金次郎という優等生になっているらしい。

洗脳じゃないのか、それ。

「とにかく、これ以上戦死者を出すわけにはいかない！ 行くぞ秀吉！！」

「合点じゃ！」

慌てて戦闘領域に駆け付けるが、既に三人が戦死。残る五人もほ

とんど瀕死状態だ。一方Dクラスの戦士達はまだまだ健全だ。一人だけ大幅に点を消費しているのは、仲間達の努力だろうか。

「君たち、一旦退くんか。ここは俺と秀吉が食い止める!!」

「ヴェルに秀吉! すまねえ、ここは任せた!」

俺達二人を残し、生き残っていた仲間達がこの場を立ち去る。

これで、向こうは十人。こちらは二人。

物量的にはこちらが圧倒的に不利。しかし、それだけで勝負が決まらないのもまた、試召戦争だ。

「「^{サモン}試召獣召喚っ!」」

幾何学的な魔方陣が床に広がり、そこから俺達の姿をデフォルメした容姿の身長八十センチ程の召喚獣が現れた。

秀吉の召喚獣は袴姿で装備は薙刀。槍や長巻には負けるがリーチはあるし、斬撃に特化している分、難しい操作はあまり必要としない。良い長柄武器じゃないか。

一方、俺の召喚獣と言えば、フェイクレイヤードのポロシャツにボンテージパンツという格好にシングルタイプのトレンチコートを羽織り、手にグローブを着けただけの姿をしていた。

「ヴェル、主の召喚獣の武器はどうしたのじゃ? 見たところ何も持っていないようじゃが……」

秀吉の不安そうな声。それはそうだろう。二人しかいないこの状況で、相方の実力が気になるのは当然のこと。

だから俺は、安心させるように笑顔で言い放った。

「安心して。素手でも大丈夫だから」

「もう駄目じゃ!!」

全てに絶望したような絶叫が渡り廊下に響き渡る。その間に、召喚獣の頭上に点数が表示された。

『Fクラス 木下秀吉』

総合科目 624点

&

Fクラス ヴェルサスⅡスクワラン

総合科目 250点

「平均25点!? そんな点数で戦えるのか!?」

「大丈夫、なんとかなる」

というか、流石に十分じゃこれが限界だったんだよ。

「なんだ。格好つけたわりに、こいつら弱いじゃないか」

「さつさと倒して坂本を討ち取ろうぜ!」

俺達の点数を見て、Dクラスの先攻部隊の内からそんな声が次々と上がる。

人を見た目で判断するのは良くないと思うよ。

「ヴェル……なんだか非常に嫌な予感がするのじゃが……」

「大丈夫大丈夫。絶対負けないから」

その言い方に、向こうは少しカチンときたらしい。顔が険しくなった。

「絶対負けないって? その減らず口、すぐに聞けなくしてやる。

中村、菊地、行け!!」

「「おう!」」

二人の召喚獣が迫る。

『Dクラス 中村司郎

総合科目 1039点

&

Dクラス 菊地直樹

総合科目 1164点

俺との点差は約四倍。秀吉だったら約二倍。この状況だところらには全く勝機が無いように思われる。実際、秀吉は既に戦意を喪失

気味だ。

一応、ここまでは予想の範疇ではある。もちろん、さっきの事もだ。乱戦になるより、こっちの方が俺も動きやすいし。

「秀吉、後衛を頼む！」

「し、しかし、それではお主が——」

「大丈夫。何とかする。だから、秀吉は俺が合図したら攻撃してくれ」

「——了解じゃ。やってみよう」

「サンキュー」

秀吉を後退させ、俺一人だけが前に出る。突っ込んでくる二人の武器は、それぞれ突撃槍とレイピア。両方とも突きに特化したタイプの武器だが、リーチに違いがある。まずは、レイピアの菊地君の方を倒した方が良いな。

「行くぞ——！」

突撃してくる中村君の召喚獣をかわし、菊地君の召喚獣に飛び掛かる。もちろん、それをただ黙って見ている彼ではない。レイピアを突きだし、俺の召喚獣の胸を狙ってきた。

その一撃を紙一重で避ける。しかし、僅かにかすってしまったらしく、フィードバックによって左頬に鋭い痛みを感じた。だが、その攻撃によるダメージは僅かだ。俺はそのまま彼の召喚獣の胸ぐらを掴み、一本背負いの要領で、秀吉に向かって投げ付けた。

「今だ秀吉！ そいつの胸を狙って薙刀で突け！」

「——ッ！ 了解じゃ！」

召喚獣にも急所がある。例えば、頭や喉、胸などを攻撃されれば、普通は一撃で戦死してしまう。逆に、かすり傷程度の攻撃や手足の先などへの攻撃はほとんどダメージにならない。つまり自分がどれだけ点数が低かったとしても、急所を狙えば一撃で倒せるし、逆に相手の点数が高過ぎても、かすり傷程度なら戦死する可能性が低いつてことだ。

今回の場合、秀吉よりも点数が高い菊地君であるが、胸に攻撃さ

れた為に戦死してしまったって訳だ。

「戦死者は補習っ！！」

再び現れた西村先生に菊地君は連れ去られていった。これで向こうも戦死者を一人出した。あと九人。

「ナイス秀吉！ 正確な突きだった！」

「まさか、こんな方法があるうとは……凄いのじゃ、ヴェル！」
そんなことを言っている間に、次は中村君の召喚獣に迫る。彼の武器が大きい分、投げるのは難しい。なら次は、俺がなんとかするしかないな。

「くそっ、よくも菊地を……！」

凄いスピードで突撃してくる彼の召喚獣をさっきと同じ要領でかわし、今度は足を払って転ばせる。その時の衝撃で突撃槍が手を放れる。

俺はその武器を拾い上げ、地面に横たわったままの召喚獣に突き立てた。拾った武器は召喚獣の消滅と共に、俺の手元から消滅する。

「な、なんで！？ 俺の召喚獣の武器だろ！？ どうして戦死したんだ！？」

予想外の事態に、中村君は戸惑い、疑問を口にする。周りの生徒（秀吉も含む）も、何が起きたのか分からないといった表情だ。その中で俺だけが、平然（いや、飄々か？）と立っていた。

さて、では種明かしといきますか。

「あんまり知られてないけど、自分の武器でもダメージは受けるんだよ。それに攻撃力のほとんどは武器に集中してるからね。君の得点である1039点がそのまま君に返ってきたって訳だ。ごめん中村君」

ただ、武器に攻撃力が集中してるってことは、他の生徒の召喚獣の武器を持っているだけでも少しずつダメージを受けてしまうってことだ。その点は注意しないといけない。

「貴様も戦死かつ！ 徹底的に叩き込んでやるからこっちに来い！」

「い、いやだあああ！！！」

さて、二人目も倒した。残り八人。まだ敵の増援は来ていない。今の内に数を減らしておかないと。

「さあ。次の人、掛かってきなよ」

1000点を越えた二人を倒した今でも、俺の点数はさつきとあまり変わらない223点。自分の点数をほとんど消費しないまま仲間を二人も屠った俺を警戒してか、向こうは動く気配がない。

「来ないなら、こっちから行くまでなんだけどね」

持久戦に持ち込まれると、点数の低いウチのクラスは不利だ。そこを理解した上で、俺は敵陣の真ん中に突っ込んでいく。流石に、俺が動けば向こうも動かない訳にはいかず、一人ひとり俺に仕掛けてきた。

しかし、みんな武器を振り下ろす・振り払う・突くといった単純な動きでしか使えていないので、避けるのは簡単だ。というか、幾万幾億の戦いを経験してきた俺に、これらの攻撃は稚拙過ぎる。

「みんなもう少し召喚獣の扱いに慣れた方がよいよ」

言っただけからふと思った。滅多に召喚獣を喚び出す機会なんて無いのに、どうやって慣れるというのか。我ながら馬鹿な事を言っただけだ。

自分の浅はかさを反省しながら、最初に飛び付いてきた三体の内一体を秀吉に向かって投げる。今度も上手く秀吉が止めを刺してくれた。残り二体は点数の高い方の武器を奪い、もう一体を倒して、奪った本体にも止めを刺した。

しかし、流石に250点という少ない点数では動きに限界があった。召喚獣は攻撃を受けるだけでなく、何かしらの行動をするだけでも少しずつ点数を消費していく。まして、敵の召喚獣を投げ付け

たり、武器を奪い取るなんて荒業をしているんだ。点数の消費も激しい。残った点数はあと116点。これであと五人は少し厳しいかもしれない。

「ヴェル、ワシも加勢するのじゃ!」

「秀吉……わかった、頼む!」

秀吉も前衛に加わり、少しずつ敵の点数を減らしていく。しかし、やはり秀吉は彼ら同様に扱いに慣れていないのでダメージを受けてしまっている。

だけど、残った点数で敵を殲滅するにはもう少しだけ準備が必要だ。

「秀吉、もう少し頑張つて!」

「う、うむ……。じゃが、もう限界じゃ……!」

流石にこれ以上、秀吉が頑張るのは無理があるか……………。

「ヴェル! 秀吉!」

俺が限界を感じ始めっていると、タイミング良く待機していた中堅部隊が増援にやって来た。なんだか、訳もわからず猛進している猪みたいに全員が全力ダッシュしていたけど。

「明久、援護に来てくれたんじゃない!」

中堅部隊隊長の明久を見付けた秀吉の嬉しそうな声。それが明久が来たからなのか、それとも仲間が援護に来てくれたからなのかは分からない。

とにかく、中堅部隊が来てくれたおかげで、Dクラスの先攻部隊を殲滅する新しい作戦が出来るはずだ。

「良いタイミングで来てくれた、明久! 中堅部隊のみんなは援護を頼む! 秀吉、君は一旦退いて点数を補充してくれ」

「何を言っておるのじゃ! ヴェルの方が点数の消費が激しいではないか!」

「俺はまだ大丈夫。それに、この子達を倒したら俺もすぐに戻る

から、心配しないで」

最後の方は、相手に聞かれないよう秀吉に耳打ちするように言った。もし聞かれたら敵を無闇に焚き付けることになるし、聞かれない方が良い。

「……………うむ。それならば良いが、あまり無理はせぬようになる？」

「解ってるよ」

そう言って、秀吉の頭に手を置き優しく撫でる。秀吉は気持ち良さそうに目を細めた後、急にハツとしたように身を離し、顔を真っ赤にして去っていった。

その後ろ姿を眺めながら、俺は思った。

ああ、つい癖で人の頭を撫でてしまったけど、もしかして俺、やってしまったか？

……………はっ！？ 殺気！？

その殺気に振り返ってみれば、そこには今朝見た怪しい集団が立っていた。この連中、怖い。鞭やら鎌やらの武器を持っているのも怖い、それ以上に殺気が本気だ。学生が出せるものじゃ無いぞっ？

「ヴェル、君を殺らなければいけない日が来るなんて、僕は悲しいよ」

「なんで自然にその集団に溶け込んでいるんだ明久！」

今朝かなり酷い目に合わされていたというのに！

「そんな事より、今はDクラス戦に集中しろ！」

指差すその先で俺の召喚獣が必死に戦っている。普通の会話をしていた間も、俺の計画通りに動かしていたのだ。もうあと少しで理想の体系になるっていうのに！

「そうよ吉井！ 今は戦争中なのよ！ 隊長のアンタが隊員を引っ張らないでどうするの！」

あれ？ なんだらう。島田さんは明久を諫めて俺をフォローしよ

うとしてくれてるんだよね？　だけどそのフォローは、明久を後押ししているだけじゃないか？

「……隊員を引っ張る？　そうだね。僕が隊長だもんね」

「そうよ！　だからほら、隊長らしく行動で示しなさい！」

島田さんが更に明久の背を押す。おいおい。洒落に成らないぞ。

召喚獣の方は敵を殲滅するのに完璧な体勢を築いているが、如何せん俺の方が良くない。

まさかこの場面で仲間から攻撃されようとは誰が思う？

しょうがない。少し荒業でこの場は乗り切ろう。

「ヴェル、覚悟おおお！！」

奇声を上げながら突っ込んできた明久をひらりとかわし、召喚獣達の方に突き飛ばす。召喚フィールド上で、相手クラスの召喚獣がいる場所はバリアのようなものが発生していて通る事が出来ない。もしそのバリアに触れると、電気ショックのような衝撃が走り、一瞬電撃が発生する。

明久も、その例に漏れずバリアにぶつかり感電(?)し、電撃を発生した。その音と閃光と明久に驚いた相手の動きが完全に停止する。

その隙に、点数の一番高いDクラスの塚本君の武器を奪い、彼の召喚獣を中心に円形に並んでいる他の召喚獣を切り刻んだ。そして最後に、塚本君の召喚獣の胸に剣を突き立て止め。これで、先攻部隊の殲滅が完了した。しかし、残った点数はあと23点。もうこれ以上戦うのは無理だ。

召喚獣が消滅したことで、明久の体を止めていたバリアも無くなり、床に倒れ込んだ。いつもなら心配してやるが、今日は俺を襲って返り討ちに合った訳だから、心配出来ない。

俺は地に伏せたままの明久に背を向けながら、

「明久、馬鹿やってないで立ち上がれ。ほら、Dクラスの子達が化学の五十嵐先生と布施先生を連れて来たぞ」

一応の忠告をして回復テストに向かおうとした。しかし、その邪

魔をする生き残った怪しい集団。

おいおい。今は仲間で足の引つ張り合いをしてる場合じゃない
っていうのに。仕方がない。

「ごめん、島田さん！」

「えっ！？　きゃあ！？」

一言謝ったあと、呆然と俺達の攻防を見守っていた島田さんのスカートを捲る。彼女は慌ててスカートを押さえるが、中身はバッチリ見られたようで、怪しいクラスメイト達はイヤらしい声を上げていた。その隙に、彼らの脇を抜ける。

「ヴェル！　あんた覚えてなさいよ！」

「ごめん！　今度明久に何か奢らせるから許して！」

「なんで僕！？」

「お前だつてスカートの中身を凝視していただろうが！　このスケベ！」

「実行犯の君にだけは言われたくない！」

そりゃそうだ。

「とにかく、後は頼んだからな！」

『あつ、待て！　ヴェル！』

『吉井！』

『な、なに？　島田さんどうしたの？』

『そ、その——見た？』

『へっ！？　い、いや、見てない見てない！　島田さんの下着が水色だったなんて見てない僕の背骨に激しい激痛が！？』

激しい激痛って意味が重複してるぞ。

『しっかり見てるじゃない！！ 吉井のバカ！ 変態！ スケベ
ー！！』

『NOOOOOOOO！！！』

何故に英語？

いや、今が好機だ。明久が島田さんにお置きされている間に、さつさと行くとしよう。俺はそれから振り向きもせず、一心に回復テストが行われている教室まで走った。

明久、君の犠牲は無駄にはしない！

「すみません！ 回復テストを受けます！」

ピンポンパンポーン 《連絡致します》

回復テストを受け始めて約三十分が経った頃、校内放送が流れ出した。聞き覚えのあるこの声は確か、須川君。

今は試召戦争中だっというのに、何をやっているんだ彼は？

《船越先生、船越先生》

船越先生？ それってあの数学の船越先生（四十五歳♀独身）か？
彼女、婚期を逃して単位を盾にして生徒に交際を迫り出したんだ

よなあ。俺も何度かアプローチされたけど、丁重にお断りさせてもらいました。だって俺、一応恋人が居るし。今は離れ離れだけど。それはともかく、その船越先生を呼び出してどうする気だ？

《吉井明久君が体育館裏で待っています》

あれ？ 須川君じゃなくて明久が彼女に用があるのか。しかし、一体何の用が……？

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

……なるほど。そういう事か。こんな事を須川君に言わせたのはきつと雄二だな。間違いない。

まあ、良いか。明久のことだ。自分でなんとかするだろう。というか、

——バキィッ！

……というか、なんとかしないと明久は島田さんと姫路さんに殺される。

第6話 Dクラス戦 後編

あの、明久の寿命を縮めかねない放送から更に三十分後。明久達中堅部隊と本隊が回復テストをしに教室に入ってきた。

丁度俺はテストを終えたところだったので、教室を出ようとした俺は彼等と鉢合わせしたのだが、その姿を見て少し驚いた。

「明久、なんで濡れてるんだよ？」

そう。明久を含めた何割かの生徒がびしょびしょに濡れていたのだ。まるで、通り雨に遭ったみたいだ。

「ああ、これ？ いや、ちょっとそこでスプリンクラーが作動して」

「どんな『ちょっと』だ、それは。スプリンクラーが作動するのはちよつとした事じゃないだろ？ まさか、壊したんじゃないよね？」

その問いに、表情が固まる明久。その顔を見て、俺は深々と溜め息を吐いた。

はああああ。それじゃあ、これから直しにいかないといけないってことか。

何時もならパンチの一発でもお見舞いしているところだけど、さっきの放送の件もあるし、許してやろう。

「まあ、良いよ。それより回復テスト頑張つてね。船越先生の彼氏クン？」

「それは誤報なんだよ！！ ヴェル、勘違いしないで！！」

「はいはい。照れるな照れるな」

「照れてるんじゃないくて、って、なんで島田さんと姫路さんは笑顔で僕の肩を掴んでるの？　なんだか力強くない？　あの、二人とも痛いんだけどおおおおお！？！？」

「怜悯明久。達者に生きろ。生き延びろ。教室に戻ってきた時に君が存命であることを祈ってるよ。」

「いやあああああ！！」

明久の断末魔をBGMにして、俺は渡り廊下付近のスプリンクラーまで来た。

これは、想像以上に酷いな。

スプリンクラーの水で床がびしょびしょなのは当然だが、それ以上に白い粉が床に広がっている。これは、消火器の粉か。これを使って目眩ましにでもしたってことだろうな。こんなことするのは、やっぱり明久だよなあ。まったく。

やっぱり後で一発殴っておこう。

スプリンクラーの方も鈍器で殴られたように壊れているし、床の隅には若干凹んだ消火器が転がっている。あいつは学校の備品のなんだと思ってるんだ？

とりあえず、さっさと直して教室にもどろう。幸い、この時間ほどのクラスも授業中だし、DクラスとFクラスの生徒達は回復テスト中で廊下には俺以外誰もいないし、気配もない。

俺は惨状の中心辺りに立ち、そして、右手の指をパチンツ、と一つ鳴らした。その直後、俺の周囲が眩い光に包まれる。そして、それが消えた後、惨状の形跡は何一つ残っていなかった。床も天井もスプリンクラーも全て元通りだ。

「これでよし、と」

一応後で学園長に報告しないと、と考えながら俺はその場を後にした。

「うう……………酷い目にあつたよ」

「明久。君は一時間近く前の傷を何時まで引き摺ってるんだ？」

明久達が、回復テストを受け終わり、暫しの休息を楽しんでいると、

「明久、よくやった」

俺達の総大将、雄二が明久を労ってきた。しかし、何の前触れもなく突然現れて明久を誉めるなんてのは、普通に考えなくても怪しい。

訝しむようにその顔を見てみれば、それはもう爽やかな笑顔を浮かべていた。こういう顔をしている人間って、大抵人の不幸を楽しんでるんだよねえ。

「雄二、校内放送、聞こえてた？」

明久も、その顔からその結論に至ったらしく雄二にそう尋ねていた。

「ああ。バッチリな」

更に笑みを深めた雄二は親指をグツと明久に向けて出している。やっぱり、こいつが首謀者か。

「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

しかし、明久は放送を流した須川君自身を恨んでいるらしい。その気持ちは分からないでもないけど。

「須川か？ あいつならもうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

「というか明久。戻ってきたらどうするつもりなんだよ」

「やれる、僕なら殺れる……！」

殺る気かよ。

「殺るなつての」

雄二のもつともな意見にも耳を傾けない明久だったが、

「ちなみに、だが。あの放送を指示したのは俺だ」

「シヤアアアッ！」

雄二の大胆なカミングアウトに、獣のような声を上げて飛び掛かっていた。

鋭い踏み込みで雄二の懐に入り、いつの間にか取り出していた包丁をコンパクトに突き出す。狙いはどうやら肝臓らしい。この体勢なら雄二は避けにくい上にその箇所は致命傷になりやすい。更に右手を硬く握り、即席のブラックジャックを作り、雄二からは死角になる頭上から振り下ろそうとしていた。

凄いな、おい。もはや殺しのスペシャリストの動きだぞ。

いや、傍観している場合じゃないだろ。ウチのクラスから殺人犯を出すわけにもいくまい。

仕方ない。少し明久の傷口に塩をすり込むことになるが、構ってられるか。

「明久。あそこに船越先生が」

「さらば！！」

俺の一言で全ての攻撃を寸前で止め、卓袱台を蹴散らしながら掃除用具入れに飛び込んでいった。

「サンキュー、ヴェル」

「いや、気にしないで。雄二もどうせ同じようなこと言つつもりなんだろ？」

「まあな」

互いに笑い合う。

いやあ、犯罪を未然に防ぐことが出来て俺も嬉しいよ。

「さて、馬鹿は放っておいて、そろそろ決着をつけるか」

「そうじゃな。ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合いじゃろっ」

「……………」
（コクコク）」

いつの間にか周りに集まってきていたクラスメイト達。明久はまだ掃除用具入れに入ったままだが、話しはこのまま進むらしい。

「おっしゃ！ Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうっ！』

みんな意気揚々と教室を後にする。しかし、相変わらず明久は閉じ籠もったままだ。

雄二の命の危機は去ったことだし、いい加減明久にも出てきてもらわないといけないな。

「明久、船越先生が来たって言うのは嘘だから。早く出てきなよ」
みんなが出ていくなか、俺だけは明久が出てくるのを待っていた。そして、完全に誰もいなくなった頃、恐る恐るという感じに、明久が格子から顔を覗かせる。

何度か視線を巡らせた後、本当に嘘だった事が解いたらしく、慌ただしくそこから飛び出してきた。

「ヴェル！ 雄二は！？」

「たぶん渡り廊下に居るんじゃないか？ Dクラスに総攻撃を仕掛ける訳だし」

「分かった、ありがとう！！」

「待てって」

勢いに負かせて雄二を殺りに行こうとする明久の腕を掴む。すると親の敵でも睨み付けるように俺を見てきた。当然か。雄二を殺ろうとするのをことごとく邪魔している訳だし。

しかし、明久に雄二を殺らせる訳にはいかない。なんたって、雄二はウチのクラスの代表だからね。

「明久、雄二を殺るのは後にしてくれ。今は戦争中なんだから」
「今殺らないと僕の気が済まないよ！」

「そう言うなって。それに今は両勢力が入り乱れての戦いが起きてるんだ。雄二の近くによるのだって難しいぞ。それよりも今は戦争に徹して勝利を掴んで、その後にゆっくり雄二を殺れば良いじゃないか」

「でも……………」

まだ納得できていない様子の明久だが、気持ちは揺れているらしい。もうあと一押しかな。

「それによく考えてみるよ。戦争が終われば雄二だって気が抜けるはずだ。そうすれば隙も出来る。そう思わないか？」

「なるほど！ 名案だよヴェル！ 分かった！ じゃあ早速Ｄクラス代表を討ち取りに行ってくるね！」

「おう！ 行つてこい！」

流石に討ち取るのは無理だと思うけど、良い時間稼ぎにはなるだろう。

明久が出ていったのを見送り、俺も戦場へと駆け出していく。今はＨＲも終わって、生徒達が続々と下校していた。そんな中で戦争をしている訳だから、誰が敵で、誰が味方なのかを判断するのが難しくなっていた。

「下校している連中にうまく溶け込め！ 取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

生徒の中から雄二の声が聞こえる。

それにしても、人混みを使った良い作戦を思い付くものだ。しかし、その作戦は敵側も使ってくる筈。それに注意しないと足元掬われるぞ。

実際、雄二が率いる本隊の背後から、恐らく別動隊であろう六…

…いや、七人の敵が迫っていた。

固まって行動しておらず、人並みに紛れて近付いてきている。しかし、時折その七人の間でアイコンタクトが行われている為、すぐに分かった。雄二達はまだその接近に気付いていないようだし、俺が片付けるとしよう。

まずは一番近くにいる子から――

「そつちから回り込め！ 俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を――」

「日本史で——」

一人ひとり片付けていく合間に仲間の様子を窺ってみれば、皆上手いこと敵を取り囲んで多人数で戦っている。すっかり雄二の作戦を聞いて戦っているようだ。

なんだ。皆集団戦は得意みたいじゃないか………馬鹿なだけで感心しながら残りの敵を倒す。最後の一人に止めを刺した時、彼らは現れた。

「援護に来たぞ！ もう大丈夫だ！ 皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

そう指示を飛ばすのはDクラス代表の平賀君。いよいよ敵の大將と本隊のご登場らしい。

「Dクラスの本隊だ！ ついに動き出したぞ！」

・ウチのクラスの誰かの声が響く。

これでこのクラスには双方の主戦力が集ったというわけだ。

「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！ 他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

平賀君の号令が伝わり、雄二がDクラスの生徒達に取り囲まれる。雄二自身が、周りに本隊を付き添わせているから簡単にやられたりはしないだろうが、それも時間の問題だ。

「Fクラスは全員一度撤退しろ！ 人混みに紛れて攪乱するんだ！」

そういう雄二の指示が聞こえる。確かに、このままだと状況は良くなりそうもない。その指示はもつともだ。

「逃がすな！ 個人同士の戦いになれば負けはない！ 追い詰めて討ち取るんだ！」

しかし、それを見越した平賀君の指示。Dクラスとしてはこのまま一気に押しきりたいところはずだ。逃がすつもりは毛頭あるま

い。

平賀君は本隊の人達も追撃に当てていた。さっきの別動隊も合わせて挟み撃ちにするつもりだったところか。

しかし、後ろの敵は俺が殲滅している。その作戦は失敗だ。

俺は姿を見られないようにこっそりと平賀君に近付いていく。やはり、平賀君の周囲は防御が薄くなっていた。しかも彼の近くには現国の竹内先生と古典の向井先生がいる。それに、俺の近くには、明久もいた。これならどちらかは確実に平賀君に辿り着ける。

「向井先生！ Fクラス吉井が——」

「Dクラス玉野美紀、試験^{サモン}召喚」

「なっ！ 近衛部隊！？」

明久がDクラスの女子進撃をに阻まれた。
今がチャンスだ！

「竹内先生！ Fクラスヴェルサスが——」

「Dクラス新田信治、試験^{サモン}召喚」

「なに？ まだ居たのか？」

人混みから現れた新たな男子生徒に、明久同様俺も阻まれた。
ちっ。敵の大将は目の前なのに。

「残念だったな、二人とも。おや、片方は船越先生の彼氏くんじゃないか」

「ち、違う！ アレは雄二が勝手に」

「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を。新田君は、彼氏クンの友達にね」

「「わかりました」」

俺達に、玉野さんと新田君の召喚獣が迫ってくる。

「ちくしょう！ あと一步でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

「「それは無理だろ」」

「ちよっと！ Dクラス代表の平賀君が言うのは分かるけど、な

んでヴェルまでそんなこと言っのさ！」

「ごめん。つい本音が」

「そこは本音を隠し通してよ！！」

俺達がこうやって漫才をしていると、平賀君が腹を抱えて笑い出した。

「はははは！ 流石はFクラス。馬鹿ばかりだね。お前たちじや、俺は倒せないよ」

馬鹿にしたように、俺達を見下しながら鼻を鳴らす。
ちよつとム力つくな。

「それは同感。確かに僕達じゃ無理だろうね」

「ああ。確かに、俺達じゃ無理だろう」

「だから——」

俺達は顔を見合せ、頷き合ってから

「姫路さん、よろしくね」

「は？」

『何を言っているんだ、この馬鹿達は？』って顔をしている平賀君。

「あ、あの……」

人混みを掻き分け現れた彼女、姫路さんが彼の肩を申し訳なさそうに叩いた。

「え？ あ、姫路さん。どうしたの？ Aクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど……？」

流石は姫路さん。名前もその実力も有名だ。そんな彼女がFクラス所属なんて誰が思うだろう。

そう。雄二が撤退の指示を出したのも、俺達が近衛部隊がいると分かりながら飛び出したのも、全ては姫路さんをスムーズに平賀君の元まで辿り着かせるため。

「いえ、そうじゃなくて……その、Fクラスの姫路瑞希です。え

つと、よろしく願いします」

「あ、こちらこそ」

「その…… Dクラスの平賀君に現代国語勝負を申し込みます」

「…… はあ。どうも」

「あの、えつと…… さ、試獣^{サモン}召喚です」

『Fクラス 姫路瑞希

現代国語 339点

VS

Dクラス 平賀源二

現代国語 129点』

「え？ あ、あれ？」

まだ状況がよく分かっていない平賀君には悪いけど、これで

「ご、ごめんなさい」

チエツクメイトだ。

Dクラス代表平賀君が討死。

その知らせは瞬く間に両軍に伝わり、ウチのクラスは歓声を上げ、Dクラスからは落胆の声が上がる。

まさか、自分達が下位クラス、しかも底辺であるFクラスに敗北するなんて思ってもいなかっただろうから、その衝撃は大きいはず

だ。

もちろん、俺達の勝利には幾つもの作戦と力業、更に姫路さんという強力な伏兵が居たからこそのものだ。もし、Dクラスが俺達を下位クラスだと侮らず、緻密な計画の元で攻め入ってきたら、どうなっていたかは分からなかっただろう。「凄げえよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「「「坂本万歳！！」」」

「姫路さん愛してます！」

勝利クラスの代表である雄二は、言わば英雄のようなもので、いたるところから賞賛の声が響き渡る。見れば、クラスメイトに囲まれ照れ臭そうに頬を掻いている雄二の姿があった。

「坂本！ 握手してくれ！」

「俺も！」

流星は英雄。クラスメイトから握手を迫られている。その人波に紛れ明久が雄二に近付いていく。

……………何故かまた包丁を持って。

咄嗟に明久の狙いが分かったが、しばらく傍観していることにした。

どうせ、酷い目に遭うのは明久だろうし。

「雄二！」

「ん？ 明久か」

「僕も雄二と握手を！」

明久が包丁を持った手を突き出す。

「ぬおおっ！」

あわやそれが刺さろうという瞬間、雄二が明久の手首を掴んでいた。

おお。流星は雄二。

「雄二……！！ どうして握手なのに手首を押さえるのかな……！！」

流石は明久。そこまで殺気をみなぎらせていて、気付かれないと思っていたとは、馬鹿だなあ。

「押さえるに……決まっているだろうが……！ フンッ！」

「ぐあっ！」

明久は手首を捻りあげられ、悲鳴を上げながら包丁を落とした。その包丁を、冷たい目で見下ろす雄二。

「……………」

「……………」

無言で見詰め合う二人。

なかなか面白かったけど、これ以上は何もなさそうだ。

「はいはい。二人とも止め止め」

二人の間に割って入る。ついでに落ちている包丁を拾っておいた。なんせ明久がこの包丁をいつ取るかと画策していたようだからな。先手を打っておくことにする。

「ヴェル、止めないでよ！ これは僕の敵討ちなんだ！」

「どうやって自分で自分の仇を討つんだよ？ そもそも死んですらいらないじゃないか」

だというのに包丁に本物の殺意を込めて刺そうとするのは友達としてどうなのだろう。

「そうだぞヴェル。こいつは徹底的に痛め付けないと分からない馬鹿なんだ！ 黙ってやらせろ！」

「君たち、本当に友達？」

「誰がこんな馬鹿と友達だつて（だと）！？」

「……………」

「……………」

互いの胸ぐらを掴み、顔のくれあいをする二人。

「どうやら友達ではないようだ。」

「というかそもそもヴェルが言ったんじゃないか！ 試召戦争が終わった後なら雄二も油断してて殺り易いって！」

あ、それを言っちゃう？

「……………ほう。その話詳しく聞かせてもらおうか、ヴェル？」
ガシッ、と俺も手を強く掴まれた。

「雄二……………そんなに力強く握られると少し照れる」

「どこに照れる要素がある！？」

「同じ男同士でも照れるくらい雄二が格好良いってことだよ。それにほら。俺の手を握った瞬間、悪寒がしたんじゃない？」

明久に聞こえないように、雄二に耳打ちする。雄二の表情が少しばかり強張ったけど、本人は気づかれまいとしていた。

「なんのことかわからない」

「そうか？ 俺はびんびん殺気を感じてるんだけど？ これって

雄二の幼馴染みの……………」

「ヴェルすまん！ お前は悪くない！ 悪いのは全部この馬鹿だ

！」

「なしてその結論にいいやああああ！！」

俺の手を解放した直後、雄二は明久の手を捻り上げていた。捻り上げるっていうより、擦切ろうとしている。とんでもない方向に明久の手が回っていた。

「ゆ、雄二ごめんなさい！！ 僕が悪かったあああ！！」

「ちっ」

あつ。一応謝ったら放してあげるんだ。意外と優しい。

「……………ブツブツ」

「？」

雄二が何かブツブツ言っている。よく聞いてみると。

「……………血の海」

なにをする気だ、こいつ。

「くそお……まさかFクラスに姫路さんが居るなんて」

そんな馬鹿な事をしていると、ふらふらとした足取りで、Dクラス代表の平賀君が近付いてきた。

「あつ、その、すみません……」

姫路さんはそんな平賀君に向かって身を縮めて謝っている。

「姫路さん。謝らなくても良いんだよ。これは戦争なんだ。伏兵を忍ばせるのも立派な戦術だよ。それに平賀君も、負けたのは姫路さんが居たからってだけじゃないだろう？」

頭を下げている彼女の佇まいを正し、項垂れている平賀君に声を掛ける。俺が言ったことをしっかりと理解していたらしく、彼はすぐさま顔を上げた。

「そうだな。俺達が負けたのはFクラスを甘く見ていたからだ。だから、姫路さんが謝る必要はない」

負けたDクラスは、勝ったFクラスと違い代表である平賀君に冷たい態度を取っていた。

彼は敗軍の将なのだ。仕方のないことだといえばそれまでだが、しかし、負けた責任が全て彼に有るわけではない。一人ひとりに同じような驕りと偏見があつたのは間違いないのだ。

しかし、代表の平賀君がその責任を甘んじて受け入れている以上俺は口を挟まない。挟まないが、彼らにはそれをよく考えてもらいたい。

「規約通り、DクラスとFクラスの設備は入れ換えよう。だが、今日はもう時間が時間だし、作業は明日でも良いか？」

少しげっそりした表情で平賀君はそう言った。こんな姿を見て「今すぐやれ」とはとも言えないが、そもそも言う必要はない。

「もちろん明日で良いよね、雄二？」

しかし、明久はよくわかっていないらしく、平賀君の提案を肯定していた。

「いや、その必要はない」

「え？　なんで？」

心底意外だという表情で雄二を見詰める明久。本当にこの子は馬鹿だなあ。

「明久。俺達の目標はAクラスだって、最初に雄二が言ってただろ」

「そ、それはそうだけど。でも折角勝ったのに設備を交換しないのって勿体無いような……………」

「ヴェル、止めとけ。明久に説明したって分かるわけがない」

横槍を入れてくる雄二。明久がそんなことないよ！　って抗議していたが、そんなことあるだろう。

「……………それもそうだね」

「止めて！　その反応は僕の心を容赦無く傷付けるから！」

さつきは身も傷付けられたし、まさに身も心もぼろぼろだね。

「大体、他人に聞く前に自分でよく考えてみる。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「なっ！　そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

「そうだぞ雄二。明久は小学生に『馬鹿なお兄ちゃん』って呼ばれてるんだ。なっ？　明久」

「…………人違いです」

「明久、まさか本当に…………？」

気まずそうに明久は目を逸らす。しかし、その沈黙こそが最大の肯定だということを彼は理解していない。

「とにかく、Dクラスには手は出さない。そういう訳だから、平賀君。この戦争は『和平交渉にて終結』ってことで。それで良いんだよな、雄二？」

「ああ。そうだ」

「それは、俺達にはありがたいが…………。それでいいのか？」

「もちろん、条件はある。ヴェルも言ったがこれは『和平交渉』だからな」

ニヤリと笑う雄二が、一瞬悪人に見えたのは秘密だ。

「……………その条件は？」

しばらく思索した後、平賀君は雄二に問うた。

仕方ないだろう。Dクラスは敗者なんだ。敗者に選択権なんてそもそも存在しない。

「なに。そんなに大したことじゃない。ただ、俺が指示を出したら窓の外にあるあるアレを動かなくしてもらいたいだけだ」

雄二が指差した先にあるもの。それは、Dクラスの窓の外に設置されている室外機。しかもそれは、Dクラスのものではない。スぺースの関係でここに間借りしているBクラスのものだ。

「Bクラスの室外機を壊せって？」

「ああ。そうだ。設備を壊すんだから、当然教師に睨まれる可能性もあるだろう」

その設備を直さないといけない俺も、少し恨みたいんだけど？

「しかし、それだけでクラスの交換が避けられるんだ。お前らにとつても悪い取引じゃないと思うが？」

俺は設備が壊されるのを黙認しないといけない上に、それを直すのも止めないといけないのか。学園長にどやされるなあ。

あの人、ねちねちと嫌味を言ってくるんだろなあ。まあ、仕方がないか。

はあ。

「それは、こちらにとつては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「………そうか。ではこちらにはありがたくその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願ってるよ」

「平賀君。無理はしなくて良いんだよ。俺達が勝てるわけないって思ってるんだろ？」

「まあな。勝てるわけないさ。なんたってお前らはFクラスなんだから。ま、社交辞令だな」

「ははっ。そうかもな。だが、俺達は勝つ。絶対に」

雄二の自信に満ちた言葉に、平賀君は目を丸くする。それから、顔を綻ばせてこう言った。

「そうかい。せいぜい頑張ってくれ。一応は応援するよ」

「ああ。室外機の方はよろしく頼む」

「分かってるよ」

じゃあ、と手を振りながら、平賀君は去っていった。彼の姿が見えなくなってから、雄二は皆の方を向いて。

「さて、皆！ 今日のご苦労だった！ 明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくり休んでくれ！ 解散！」

その号令が伝わると、皆は雑談をしながら教室に戻っていく。そんな中、俺だけは階段の方に向かって歩き出していた。

「あれ？ ヴェルは教室に戻って帰り支度はしないの？」

そんな俺の動向に疑問を抱いたらしい明久が声を掛けてくる。無視する訳にもいかず、俺は振り向いて答えた。

「ああ。ちよつと野暮用があつてね。先にそつちを済ませてから教室に戻るよ」

「野暮用って？」

む。用事の内容まで聞いてくるとは珍しい。もしかして変に邪推しているんじゃないな。

「大したことじゃない。少し学園長に用があるだけだよ」

「学園長に？ 一体なんの用があるの？」

この反応、疑ってるな？ だけど、今明久に話して、また学園長に同じ内容を話すのは面倒臭いし。どうしたものかな。

……………そうだ。

「なら、明久も着いてきなよ」

「え、っ!？」

あからさまに嫌そうな顔。そうだな。観察処分者の明久に見れば、学園長室とか職員室にはあんまり近付きたくないはずだ。安易に近付くと、すぐに教師の誰かに捕まって雑用させられるわけだし。

「え、遠慮しとくよ!　じゃあね、ヴェル!」

「また明日な、明久」

凄まじい速さで逃げた明久の背に向かって手を振る。別に着いてきても構わなかったんだけど、まあ良いや。

俺は明久の姿が見えなくなると、すぐさま階段を降りていった。

第7話 攻めと受けとラブレター

Dクラス戦が終結し、全員が帰宅する中、俺は再び学園長室に訪れていた。

「アンタ、今日一日で三回もここに来ているね。一体どういつつもりだい？」

「あはは……すみません」

少し呆れ顔の彼女に罪悪感を抱く。まだ学校生活初日なのに、なんでこんなにここへ来ているのだろう。それもこれも、昼休みに大事な用件を伝え忘れたからだ。

さて、せっかくだから本題に入る前に、戦争の結果もついでに話しておくしよう。

「学園長、俺達FクラスはDクラスに勝利しました」

「そうかい。負けたクラスは設備が劣化して落ち込んでいることだろう。必死に勉強して向上を目指しなと言ってやったかい？」

「いえ、俺達はクラスの設備の交換はしませんでした」

「……………なんだって？」

それまでしたり顔でいた学園長の表情が固まる。

下位クラスが上位クラスに攻め入るのは、設備の向上を目指してだ。その本懐を遂げないことに不信感を抱くのは当然のことである。

「今回の戦争は『和平交渉による終結』で双方了承しました」

「ほう。なかなか面白いじゃないかい。それで？」

それだけじゃないんだろう？ という表情で俺を見ている。俺はその顔に笑い掛けながら答えた。

「流石、学園長。俺の話はそれだけじゃありません。実は戦争中に、ウチのクラスを代表するバカが学校の備品を壊しまして」

「ああ。あの観察処分者の吉井明久とかいうクソガキかい。なるほど、それはきつちりと指導してやらないといけないね」

「一応は、俺が全て直しておきましたから、指導はほどほどお願いします」

「アンタは相変わらず優しいねえ」

「ははっ。そうですね」

「……………嫌味だよ？」

「分かってます。この一年、伊達に貴女と付き合ってきていませんよ」

「ふんっ。まあ良いさね。話はそれだけかい？」

「あ、いえ。もうひとつだけ」

「というか、この話が本題だ。」

「なんだい？」

「実は、Fクラスの設備のことでお話が」

「なんだい。そのことかい。それなら以前にも言ったが、自分達の力でなんとかしな。その為の戦争だろう」

『設備』という単語に眉をひそめ、俺の事を冷たい態度であしらう学園長。仕方無い。彼女はそういうところを拘る人だから。

「いえ、教室全体の話ではなくて、黒板とチョークのことです」

「黒板とチョーク？ それがどうしたって言うんだい？」

突然、『黒板とチョーク』なんて言われても困るよね。だから俺は、その問いに一つ頷いてから、ゆっくりと説明を始めた。

「はい。そのふたつは、授業を受ける中でも最も重要な物であると俺は思っています。しかし、Fクラスの黒板はボロボロで、文字もろくに書けません。チョークもまともに揃っていないので、書くこと自体が不可能です。ですから、もしFクラスの行う戦争が一段落したら、その二つの設備だけは、勝敗に関わらず向上してもらいたいんです」

「……………」

「学園長は言っていましたよね。学生の本分は勉強だと。その勉強を、学校側が妨害するのはいかなものかと思えます。確かにFクラスには問題児が多いですが、真面目な生徒もいます。そういった生徒の為に、どうかお願いします」

「……………なるほど。つまりアンタは設備の不備のせいで勉強に集中する事が出来ない。そういうことかい？」

彼女の視線が痛くなる。『設備のせいにせず、自発的にやる気を出して勉強をしろ』と、その目は言っていた。

「いえ、そうではありません。環境が人を変える、とそう言いたいのです」

ものは言い様と言われるかもしれないけど、彼女の言った事と俺の言う事には天と地ほどの差がある。

そもそも言いたい事の根本が違う。

「……………」

「……………」

しばらく黙っている俺達二人。何かしら思う事があるらしく、学園長は案外早く声を出した。

「そうさね。後になって設備のせいで、とかなんとか見当違いな苦情を持って来られても面倒だ。それくらいなら替えてやろうじゃないか」

「ありがとうございます。学園長」

彼女にしては珍しく物分かりの良い答えに少し拍子抜けしてしまっただけ、替えてくれるというのだ。有り難く受け取るとしよう。

「……………まったく、こっちはその程度の事じゃ返せないくらい借りがあるっていうのに……………」

「はい？」

借り？ 俺が何かしただろうか？

「なんでもないよ。良いからさっさと帰りな」

「あ、はい。失礼しました」

しつ、しつと手を振る学園長を不思議に思つて眺めてから、俺は学園長室を後にした。

「あつ、ヴェル」

「ん？　なんだ、明久か。どうしたんだ？　もう帰つてたんじゃないのか？」

自分の荷物を取りに教室に向かう途中、階段を登ってきていた明久と出会った。おかしいな。あれからもう二十分くらい経つたと思うんだけど。

「そうなんだけど、実は卓袱台の下に教科書を忘れちゃって」

「そうか。君はバカな上にうっかりしてるね」

「バカはデフォルトなのっ？」

何を今更。学園長に『Fクラスを代表するバカ』で『明久』と理解されたのだから、明久がバカなのはもう定義みたいなものだ。

「そんなことより、俺も今から荷物を取りに行くつもりだったんだ。一緒に行こうよ」

「あ、うん。そうだね。今日は疲れたし、ぱつと取りに行つて、ぱつと帰ろう」

明久もその話に異存は無いようで、俺の隣に着いて歩き出した。雑談しながらしばらく歩いていると、Fクラスのボロい教室が見えてきた。

「たっだいま」

まるで我が家に帰つたような明久の言葉に少し笑ってしまう。確かに、畳が敷き詰めてあるここは、教室と言うより、日本風の家に近いものがある。

「明久にしては、意外に的を射た言い回しだね」

「一言余計だよ!」

「あははは。悪い悪い。そう怒るな……………って、姫路さん?」

「えっ?」

「ふえ?」

明久の間抜けな声と、姫路さんの可愛らしい声が重なる。

誰も居ないと思っていた教室に、彼女は一人残っていた。一体何をしていたのかと思ったけど、その答えは彼女の卓袱台の上にあるものを見てすぐに分かった。

女の子らしい可愛いピンク色の便箋。

その脇に置いてあるピンクの封筒とシャープペン。

それを見られて赤くなる彼女。

彼女は、ラブレターを書いていたのだ。

「よ、吉井君にヴェル君!? い、いい一体どうしたんですか!」

「どうしたんですかって、俺は自分の荷物を取りに来たんだよ。ほら、その卓袱台の下にある」

「えっ? あっ……………本当ですね。気が付きませんでした」

「で、明久は教室に忘れた教科書を取りに来たんだ。な、明久?」
そう言つて、彼女のラブレターを見詰めたまま固まっている明久の背を叩く。しかし、何のリアクションも無い。

まあ、確かに好きな女の子がラブレターを書いていたらショックだろうなあ。それにこいつは明久だ。そのラブレターが自分宛てだ

とはまず考えないはず。大方、雄二辺りに宛てられたものだと考えているのだろう。

「よ、吉井君？ 大丈夫ですか？」

全く動かない明久を心配して、慌てて姫路さんが立ち上がった拍子に、彼女のラブレターが卓袱台から落ちた。そして、運良く（いや、悪くか？）その一文が目に入る。

《あなたのことが好きです》

うん。紛う方無きラブレターの出だしだ。俺の推測は間違っていないかったらしい。

そして、恐らくこれは明久に宛てたものだろう。本人は気付かないだろうけど。

「……………」

当の本人こと明久は、その『ラブレター』をゆっくり拾い上げると、綺麗に折り畳んだ。そして、優しく微笑みながら、慌てている姫路さんに手渡しして一言。

「変わった不幸の手紙だね」

いくらなんでもそれはない。

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」
ほらみる。姫路さんがとても困っているじゃないか。

「明久。どうみてもこれは正真正銘ラブレターだ」

「嘘だ！ これは不幸の手紙だ！ 実際に僕はこんなにも不幸な気分になっているじゃないか！」

「どこの世界に見ただけで不幸になる手紙がある！ 現実を見る！ これはラブレターだ！」

「うそだあああああああ！」

何も聞きたくないと言うように、明久は耳を塞いでいやいやと首を振る。そんなに認めたくないのか。

「吉井君」

そんな風に暴れまわっている明久の手を優しくきゅっと握る姫路さん。その手の感触に気が付いた明久は暴れるのを止めた。

「落ち着いて下さい。そんなに暴れると身体をぶつけて怪我をしちゃいますよ？」

姫路さんの気遣うような言葉に、がつくりと膝をつく明久。

「……仕方ない。現実を認めよう……」

「ねえ。俺と姫路さんと随分納得度合いが違うんだけど？」

「だって、書いた本人が言ってるんだから、認めないわけにはいかないよ」

最初は認めてなかったくせに。

「それよりも、姫路さん。そのラブレターの相手ってウチのクラス

の——」

「……はい。クラスメイトです」

「そっか……」

低く呟きながら、ちらつと俺の顔を窺ってくる。

おいおい。なんで俺を見る。

「明久。言っておくけど、そのラブレターは俺宛じゃないからな」

「えっ！？ 違うの！」

「違います！！」

突然大声を上げた姫路さんに明久は肩を震わせて驚いていた。

「というか、姫路さんと今日初めて会った俺がどうして好かれるって言うんだよ。別に何かしたわけでもないっていうのに」

「だ、だって今朝、二人で何か話してたじゃないか！ 姫路さんも大きな声を上げてたし……」

「そ、それは……その……」

意外と変なことで勘繰ってくるな。まさか、俺だと思うとは。完全に予想外だ。

話していた内容が内容なので、姫路さんは困ったように俺に視線を送ってくるし……。

こういう時は素直に話すのが得策だろう。

「あれは、姫路さんの好きな人を俺が言い当てただけだよ」

「えっ!？」

「ヴェ、ヴェル君!？」

二人が驚いたように俺を見ってくる。姫路さんに至っては、少し顔が青ざめていた。俺が口を滑らせないか心配しているのだろう。

だから俺は何も言わない事を示すために、自分の口に人差し指を当てながら一言。

「大丈夫。誰が好きかは言わないから。今朝も言っただろう？」

俺は応援するだけだって」

「ヴェル君……」

「えっ？ て事はヴェルは姫路さんの好きな人を知ってるの？」

「ああ。まあね。だけど、聞いても教えてはやらないから。たださつき姫路さんが言った、クラスメイトに好きな奴がいるっていうのが本当だ、って事くらいは教えても良いかな」

というか、『君だよ』なんて言っても信じる気がしない。むしろ、からかっていると思うか、嘘だと思うかのどちらかな気がする。

「そっか……それは本当なんだ……」

明久の声が沈んでいく。

また変な風に勘繰っているな？

「……姫路さん。ちなみに、そいつのどこが好きなの？ そりゃ確かに外見はそれなりだとは思っけど」

「あ、いえ。外見じゃなくて、あっ、もちろん外見も好きですけ

ど！」

「憎いっ！ あの男が心底憎い！」

「そう、ですか……？」

この会話からも分かるけど、明久は宛てられたのが雄二だと思っているようだ。そして、明久が勘違いしていることに、恐らく彼女は気付いていないらしい。

「明久。大丈夫だ。お前の外見もそれなりだと俺は思う」

「本当、ヴェル！？」

「ああ。もちろん。今朝姫路さんも言ってたじゃないか。明久は可愛いって。ね？ 姫路さん」

「はい！ 私もそう思います！」

「やめて！！ それ以上僕の純情を痛め付けないで！！」

朝に引き続き、再び可愛い宣告をされた明久は、身体をくねらせて悶絶していた。

「それに、私の友達も結構騒いでいましたし！」

「え？ ホント？」

姫路さんの思わぬ言葉に、これ幸いと詰め寄る明久。まあ、そうだよ……。

「はい。よくわからないですけど、坂本君と二人でいる姿を見ては『たくましい坂本君と美少年の吉井君が歩いているのって絵になるよね』ってよく言っていました」

「良い友達だね。仲良くしてあげてね」

「その友達には眼科を紹介した方がいい。手遅れになる前に」

「ちよつと、ヴェル！ 変な横槍入れないでよ！」

いや。明久は確かに整った顔かたちはしてるけど、明久を美少年なんてのは流石にないと思う。

「『やっぱり吉井君が受、け、なのかな？』とも」

「『その友達とは距離をおこう。姫路さんにはまだちよつと早いと思う』」

そうか。そういう目で見れば、明久は美少年だろう。

しかし、雄二と明久か……互いに蹴落とし合い貶め合っているこの二人の絡み。

うん――

流血沙汰になることは間違いないな。

明久は明久で何を想像しているのか、今にも吐きそうな顔をしていた。

その気持ちは分かるよ……。

「それにしても、外見もってことは、中身が良いの？」

「というか、中身の方が重要だと思うけど？」

「そ、そうですよね！ 中身の方が好きです！」

「そうだね。肝臓とか頑丈そうだもんね」

「中身って臓器の事じゃないだろ！」

この子はどんな思考回路をしているのか、未だによく分からない。

「えっ？ じゃあ、まさかありえないと思うけど、そいつの性格が？」

「ありえなくありませんっ」

また大きな声で言う姫路さんに、明久は驚いたような顔を向ける。

「……そいつの性格のどこが いいの？」

「や、優しいところとか……」

「ああ。なるほど、確かに優しいよね」

明久は馬鹿だけど、いや、馬鹿だからなのか。自分の利害など関係無く人助けをしていることがある。姫路さんは小学生の頃から明久の事を知っているらしいから、当時からそういう場面を見ていたのだろう。

もしかしたら、彼女自身が明久の優しさに触れた事があるのかも
しれない。

「今から番号を教えるから、二人ともメモの準備はいい？ 大丈夫、とっても腕の良い脳外科医だから」

「別に気が変になったわけじゃありません！」

「言つとくけど、俺達は至って正常だ！」

異常なのは君の思考回路だと思う！

「その人は、優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……私の憧れなんです」

胸の前で手を合わせ、目を臥せながら言う姫路さんの言葉には、とても強い想いが込められていて、流石の明久も茶化せないようだった。

「その手紙」

「は、はい」

「良い返事が貰えると良いね」

明久。今の君は潔くてかなり格好良いぞ。

「はいっ！」

嬉しそうに笑う姫路さんは本当に魅力的だった。

「じゃあ、お二人とも今日はお疲れ様でした」

「姫路さんもお疲れ様。今日はゆつくり休んでね」

「はい。それじゃ、また明日」

「じゃあね」

ペコリとお辞儀をして教室を後にする姫路さんを、俺と明久で見送る。明久だけはさつきから黙ったままだったけど。

「明久。大丈夫か？」

「……………うん。大丈夫だよ」

大丈夫そうにはとても見えない。それは勘違いだって言いたいくらいだけど、それは姫路さんの意思に反する。

「さつ。荷物も持ったし、早く帰ろう」

「……………うん。大丈夫だよ」

「それはもう良いから」

まだ呆けたままの明久に教科書を入れた鞆を持たせ、教室を出て

いこうとした。
丁度その時。

ガラッ――

「ん？　なんだ明久にヴェルか」
雄二が、扉を開けて入ってきた。

「あれ？　雄二も何か忘れ物？」

「ああ。ノートをな。ったく。明久にあほって言った手前、見られたら気まずいと思って、明久が帰った頃を見計らって来たつもりだったつてのに……」

「そうか。残念だったね」

「ああ。全くだ。それよりも、明久はどうしたんだ。さっきから俺を睨んでるようだが」

雄二がそう言うので、視線を明久に向けてみる。見れば、まるで仇でも見るかのように雄二を睨む明久がいた。

やっぱり、あのラブレターが雄二宛てだと思っているらしい。

「……………」

「おい、明久」

黙ったまま雄二に近づいていく明久を止めようとしたけど、手が少し届かなかった。そのまま彼は雄二の隣に立ち、上目遣いに彼を睨め付ける。

「雄二。僕は……………」

あわや、殴り合いになるかとも思ったけど――

「僕は受けなんかじゃなあああい！！」

叫びながら、明久は廊下を駆け抜けていった

ってそつちかよ！！

「どうしたんだ明久の奴。訳の分からない事を言いながら走り出したりして」

「恋に悩む少年の暴走ってやつかな」

「なんだそりゃ？」

雄二は知らなくても良いんだよ。

こうして、俺の騒がしかったFクラス初日は幕を閉じたのだった。
……………これで良いのか？

第8話 彼女の料理は殺しの香り 前編

バカテスト 物理

【第五問】

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え
『粒子』

教師のコメント
よくできました。

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

ヴェルサスⅡスクワランの答え

『速度』

教師のコメント

ヴェル君にしては珍しい間違いですね。一体どうしたのでしょうか？

「ふ」

今日の弁当持ち合わせに持つていく為の料理の準備中。あらかたは昨晚のうちに作っておいて冷蔵庫に入れておいたんだけど、それが出来ない料理を今作っているのだ。

俺自身の分も含めて七人分。しかも、一人ひとり別に作っているから、少し手間が掛かる。

まあ、美味しいって言うってもらえれば、それだけで充分なんだけど。

「さてと。これで良いかな」

冷蔵庫から取り出した七つの小型の弁当箱にそれぞれの料理を詰め、紙袋に入れる。流石に数が多くて、鞆には詰め込むことが出来なかった。

「よし。今日も張り切っていくか」

荷物を持ち、出ていく前に自分の部屋に向かう。そこに置いてある写真に行ってきたますを言うために。それが俺の習慣になっていた。いつからだったかは、忘れてしまったけど。

「じゃあ、行ってきます」

俺が学校に着いた頃、既に予鈴が鳴り出していた。しまった。少しゆっくり来すぎてしまったようだ。

足を速めて教室に向かっていると、向こうから見覚えのある生徒が疾走していた。

あれは、明久か。

「明久、おはよ——」

「ううううおおおおお！！」

脇目も振らず俺の横を駆け抜けていった。

「———— 普通の人間でも、ドップラー効果って起こせるんだな……」

凄まじい速さで遠退いていく明久の背を見詰めながら、俺は見当違いなことを呟くのだった。

「おはよー」

教室の戸を開けて中に入る。昨日、Dクラスに勝利したというのに、相変わらず畳と卓袱台のままだ。しかし、教室にいる生徒が誰も文句を言っていないってことは、雄二が説明したのだろう。

この教室もまた、俺達が勝つために必要な条件ってわけだからな。しかし……

「おうヴェル。もうすぐテストが始まるぞ」

胡座をかいている雄二が、英語の教科書をしまいながら話し掛けてくる。俺は、周りを警戒しながら振り返った。

「ああ、雄二おはよう」

「？ どうかしたのか。そんなに辺りを見渡して」

「あ、いやなんと言つか、俺の生存本能や危機察知能力が告げるんだよ」

「何を？」

「この教室に死の臭いが漂ってるって」

「はあ？」

呆れ顔の雄二には悪いけど、俺は至って正常だ。間違いないこの教室には何かヤバイものが隠されている。しかも、命に関わるような何かが。

それが何かはさっぱりだが、すぐ近くにあるような気がする。

「姫路さん。ちょっとごめん」

「えっ？ あ、はい。どうぞ」

明久の卓袱台の周囲には何も無いことが明白なので、その隣の姫路さんを調べてみる。最初に一言断ってから卓袱台の下、畳、彼女の鞆の中を調べさせてもらった。

しかし――

「――何も無い、か」

結果は何も無し。卓袱台の下には何も置いてないし、脇にはお弁当が入っているであろう袋が置いてあるだけだ。畳にも異常はない。鞆の中には教科書が入っているだけで、それ以外に変わった物は何一つ無い。

「雄二、君もちよつと調べさせてもらつて良いかな？」

「別に構いはしないが。ヴェルの勘違いなんじゃないか？ ここは日本なんだ。武器やら爆弾やらを持つてくるような奴はいないだろ」

「このクラスにその常識は通用しないと思う」

「……………否定できない」

「だろ？」

それから監督の船越先生（と何故か疲れきった様子の明久）が教室に入ってくるまでの間、教室中を探し回ったけど、何も見付からなかった。おかしい。絶対何かあるはずなんだ。

しかも、俺のすぐ近くに。
しかし結局、何も見付けることはできず、ただ無意に時間が過ぎていった。

そして気が付けばいつの間にか昼休み。

「おかしいなあ…… 本当に何も無いぞ」

「やっぱりお前の勘違いなんじゃないか？」

本当にそうなのだろうか？ そうするとまずいなあ。長らく戦場という状況下に身を投じていないから、勘が鈍ったのかもしれない。また、実戦に近い訓練をしないといけないな。

「うあー…… づがれだー」

真剣にどんな訓練をしようか考えていると、明久が机に突っ伏していた。まあ、君は疲れただろうね。

昨日の放送の件で船越先生と一悶着あったみたいだし。

「うむ。疲れたのう」

「…………… (コクコク)」

俺達の回りに、秀吉とムッツリーニが近付いてきた。二人とも、手に弁当箱を提げている。

「秀吉。今日はポニーテールなんだ。可愛いね」

「ヴェルよ。ワシは男じゃから可愛いと言われても…… その、困る」

俺としては秀吉のその反応の方が困る。ただでさえ見た目は美少女な上に、今日は（明久が大好きな）ポニーテール姿だ。可愛いと言わずに何と言えと？ それに、明久なんかは可愛さのあまりまた悶絶しているし。

このままだと本当に男だと思われなくなるよ？

「男なのは分かってるんだけど…… 秀吉に格好良いつて言うのは

「なんだか憚られてさ」

「何故じゃ！」

「何故と言われましても」

見た目が見た目だから、とは言わない方が良くかもしれない。

「それより、早く弁当食べようよ。昨日の言った通り皆で持ち寄ったのを食べながら、親睦を深めようじゃないか」

これ以上秀吉に突っ込まれる前に話題を変える。二人ともそのために近付いてきたのだから、あまり不自然な話題転換ではなかったと思う。

「島田さんも姫路さんもおいでよ」

「というか、この二人の為に提案したことなので来てくれないと困る。」

「そ、そうねっ。今行くからちよつと待ってて」

「わ、私もすぐに準備しますから」

二人は慌てて荷物を片付けると、鞆から袋を取り出して近付いてきた。

「……………」

「……………」

何故か俺は、二人にすっごく睨まれてるんだけど、どういうこと？

「さ、さあ。屋上にも行くのか。この教室じゃ、美味しい物も美味しく食べられないからさ」

二人の視線を回避するために、男子陣に向かって呼び掛ける。みんな異存はないようだ。特に明久なんかは首を何度も縦に振っている。

「それもそうじゃな」

「うん。それで良いと思うよ」

「……………」 (コクコク) 「」

「行きましょう！」

「行くわよ！」

女子のテンションがおかしいけど、敢えて突っ込むまい。

「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」

「ん？ 雄二はどこか行くの？」

「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

気の効いた事を言う雄二。そういうことなら、その厚意を受け取るでしょう。

「なら、雄二の弁当箱は俺が持っていこう。両手が空いていた方が作業しやすいだろ？」

「サンキュー。そう遅くはないはずだから、先に食べててくれ。俺の分は残しとけよ」

「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

「雄二、安心しろ。明久が食べようとしたら指を三本折つとくから」

「なんでそこまでするの！？」

冗談だって。

「ああ。任せたぞヴェル。じゃ、行ってくる」

そう言って、雄二は財布を持って教室を出ていった。自販機や売店があるのは一階だから大変だろうけど、雄二ならあっという間に戻ってくるだろう。

「僕らも行こうか」

「そうですね」

それぞれ自分の弁当箱を持って屋上まで歩く。姫路さんは明久の分まで作ってきていたから、袋が他に比べ重そうだ。よほど張り切って作ってきたのだろう。

しかし、教室を出たというのにまだ死の臭いが漂っている。一体、どういう訳なんだ？

「天気が良くて何よりじゃ」

「そうですねー」

周りに気を遣いながら歩いている内に、屋上に着いてしまったらしい。

今日もまた快晴で、屋外で食べるには持ってこいの天候だ。

「あつ。私、シートも持ってきてるんです」

「おお。姫路さん準備良いね」

「もちろんです!」

姫路さんがバッグからビニールシートを取り出す。

「瑞希、ウチも手伝うわ」

「ありがとうございます」

二人は協力して作業を進めていく。それは良いんだけど、さつきからどうも俺と張り合ってくるというか、対抗してくるというか……。

「明久。もしかして俺なんかしたか?」

シートを敷いたり、雑談している中、明久を引っ張り出してこっそり聞いてみた。

彼女達とまともに話したのは昨日が初めてだし、今日だって何かした覚えはない。しかし、彼女達が俺を目の敵にする原因と言えばコイツ以外にあるまい。

「? ヴエルどうかしたの?」

「さつきから島田さんと姫路さんがどうも俺に敵対心を覚えてるみたいなんだけど」

「そう? 僕にはいつもと変わらないと思うけど? ただ、島田さんが普段よりちよつと優しいかな」

……………しまった。コイツは馬鹿で、その上鈍感だったんだ。質問を替える必要があるか。

「明久、昨日か今日の内に彼女達の様子がおかしかった時はないか?」

「おかしかった……か、どうかは分からないけど、そういえば昨日の昼休みはちよつと変だったかな」

「昼休み?」

昨日の昼休みは学園長実に行っていたし、その後はテストを受けていたから彼女達とは会っていない。ただ、明久に俺の弁当を渡してみんなにも分けるように——って、まさか。

「もしかして、二人の様子が変になったのは俺の弁当を食べてからじゃないか？」

「そう言われれば、そうかも」

明久の言葉で確信した。二人は俺の弁当を食べて、俺に敵対心を抱いたんだ。

…………… 傍迷惑な。

「はあ…………… まっ、それで彼女達がやる気を出してるなら良いか」

「???? なんのこと？」

「明久は知らなくても良いんだよ」

「????」

明久が疑問符を浮かべているのを横目で確認しながら、色々と準備をしている二人を眺める。二人とも張り切ってるなあ。

少女達が奮闘する姿を微笑ましく見守っていて、ふと疑問が浮かんだ。じゃあさつきから漂うこの危険な空気は一体なんなのか、と。

「いや、気のせいだ。気のせい」

一人、自分を納得させ、俺も二人の手伝いに入る。傍観していようと決めていたのに、手を出してしまったのは、やはり不安だからだろうか。空はこんなにも青いの、なんだか行く末が真っ暗な気がするの、気のせいだと思いたい。

「準備は整ったわね」

「はい」

「ようやく弁当にありつけるのう」

「…………… (コクリ)」

「よし。みんな食べよう！」

俺達は円形にシートに座り、それぞれの弁当を自分の前に置く。

「あれ？ ヴェルは弁当箱が七つもあるんだね」

俺が袋から取り出した小型の弁当箱を見て、明久が声を上げる。ちなみに、明久の前には姫路さんが作ってきた弁当が置いてあった。「ああ。一人に一つずつ作ってきたんだ。同じ弁当箱を皆でつつ

き回すのも効率が悪いかなと思って」

言いながら、一人ひとりに手渡していく。

「それぞれ中味が違うから。明久のは色々な栄養素を摂れるようにしてある。たまにはまともな物を食べなよ」

ソルトウォーターがご馳走だなんて、俺は絶対に認めない。

「大丈夫！ ヴェルの弁当を食べてるから！」

「家で、も、！ まともな物を食べなよ！」

「わかってるよ」

絶対わかってない。

仕方ない。良い機会だ。今度、食事のなんたるかを教えてあげよう。前々から、明久の食生活には言いたいことがあったんだ。

一つの決心をした後、次に姫路さんに向き直る。

「姫路さんのは野菜多目のヘルシーな料理を入れておいたから。身体の中の老廃物を除去出来るし、ビタミンも豊富だから体調を整えるにはちょうど良いはず」

「あ、ありがとうございます……」

嬉しいような、憎たらしいような。そんな表情で弁当箱を食い入るように見詰める姫路さん。何もそこまで凝視しなくても……。

「秀吉は演劇部ってことで喉を痛めないように、大根や蜂蜜を使ったおかずが入ってる。余計なお世話かもしれないけど、演劇部のホープにはこれからも頑張ってほしいからね」

「そんな気を使わぬとも良いのに……」

「俺が作りたくて作ったんだ。遠慮せずに食べてよ」

「そうか……そういうことなら、ありがたく頂くでしょうかのう」
微笑みながら弁当箱を抱える秀吉は、やっぱり可愛らしかった。

「ムツツリーニは普段神経を使う作業が多いだろうから、疲労回復の為に土鼈甲どべいかいを始めとした数種類の薬草、食材で作った俺のオリジナル料理。滋養強壮の効果は抜群だ。これで君の耐久力は二割減間違いなし。パンチラだけで出血死できるほどの鼻血が出せる」

「……………！！」（ブンブン）

「……………冗談だつて。でも滋養強壮や疲労回復には持ってこいだから食べてみて」

「……………（コクリ）」

ムツッリーニは少し警戒したような顔をしているけど、食べてはくれるはずだ。

土鼈つひはな甲とは鼈つひはなの甲羅を乾燥させたもので、実際に栄養ドリンクや健康食品にも使われている。それ以外の食材たちも似たような物で、疲労回復に効果がある。

ただ、どれも精力剤にも使用されているから、ムツッリーニには毒かも知れないけど、良いよね」

「で。島田さんのは——」

「ウチには？」

「——島田さんのは、緑黄色野菜と豆乳を掛け合わせた健康的な料理を入れました」

まさか、豊乳の効果が期待されるビタミンAやビタミンE。それと、女性ホルモンに近い大豆イソフラボンが含まれている食品で作りました。とは言えまい……………」

「美味しく出来ているはずですから、是非食べてください」

「……………なんで敬語なの？」

お願い。気にしないで。

「さて、俺の料理はこんな感じだけど、皆はどう？」

配った料理の説明も終わり、今度は俺が皆の料理を見る番になった。

お弁当の楽しいところは、やっぱりこれだよね。

「ワシは、こんな感じかのう」

先陣を切って秀吉が自分のお弁当の中身を見せる。

卵焼き、アスパラガスのベーコン巻き、野菜炒め、ブロッコリーにプチトマト……といった、野菜中心のおかずが詰め込まれていた。

「秀吉、美味しそうなお弁当だね。それ自分で作ったの？」

わざわざ身を乗り出すまでした明久が、至極当然の質問をする。

俺も秀吉は料理できないと思っていたから、気になっていたのだ。

「いや、これは姉上が作ってくれたのじゃ」

「へえ。お姉さんが……」

なるほど納得。秀吉には悪いけど、やっぱりなと思ってしまった。

「秀吉のお姉さんって、Aクラスの木下優子さんだよね。凄いな

あ。頭も良くて料理もできて、自慢のお姉さんだね」

「いや、それほどのものでは……」

明久の言葉に秀吉は言葉を濁しながらも否定していた。

学校で優等生だからって、家でもそうとは限らない。

今の秀吉を見て、不意に何故かその言葉が浮かんできた。

「秀吉、苦労が多いね」

「そうなのじゃ。今朝も冷凍食品でおかずを誤魔化そうと思って
おったのに」

誤魔化そうとするんじゃない。

「姉上に『アンタがそんな貧相な物を食べてたら、私の品格まで
疑われるじゃない！ 私がアンタの分も作るから、そんなものは持
っていかないで！』と言われ、折檻を——」

「君のお姉さんは、一体どんな人なんだ？」

所謂ツンデレ……なのだろうか。それともただのツンツン？ ど
ちらにしても、青ざめている秀吉を見て、そのお姉さんは怒らせな
いほうが賢明な気がした。

「じゃあ、次はムツツリーニ。いつてみよう」

「……………（コクリ）」

「おつ。ムツツリーニは中華か。春巻き、餃子、焼売……シューマイ……凄いな。
これ全部自分で作ったのか？」

「……………紳士のたしなみ」

中華のことを指すのか、それとも料理自体のことを指すのか。俺としては後者だと嬉しい。

やっぱり、今は男の子だって料理ができないといけないよね。

「しかし、やけに焼売の数が多いな。ひい、ふう、みい——全部で十四か。なんでこんなに？」

「……………それは——」

「いっただつきまーす！」

ムツッリーニが何かを言いかけた瞬間、明久が焼売の一つを手で摘まんで口に放り込んだ。

パク——モグモグモグ……………

「ぶふっ——！」

幸せそうな表情で口をモグモグさせていた明久が、突然奇妙な声を上げた。

「なんだ？ どうしたんだ明久？」

「……………焼売の幾つかは辛子だけ入れてみた」

原因はこいつか。

「ひみはなんへことをふるんは——！」

「吉井。呂律が回ってなくて、情けない声しか出てないわよ」

「大丈夫か明久。ほれ、ワシの茶を飲むのじゃ」

ゴクゴクゴク——

秀吉から手渡された水筒の中身をすべて飲み干さん勢いで飲んで

いく。そして、口の中が落ち着いたところで気を直して。

「なんてことをするんだ君は！」

良かったな、明久。微妙に台詞が違うけど、今度はしっかり言えたじゃないか。

「意地汚く真っ先に食べようとするからそうなったんだぞ？ 少しは反省しなよ」

「うっ…………それはそうだけど」

カロリーがあ、とかなんとか溢している明久は無視してムツリ――二に向き直る。

「それで？ これは結局どういうことなんだ？」

「……………ロシアンルーレット」

「中華なのにロシアって……………」

「……………（ポツ）」

「照れないでくれ」

照れるくらいならわざわざ中華料理でこんなことしないでほしい。

「……………辛子焼売は全部で四つ」

「七分の二の確率で入ってたんですか。それにしても、土屋君はどうしてこんなことを？」

俺が胸の中で思い悩んでいる内に、姫路さんが話を進めてしまう。確かに、なんの理由も無しにこんなことはしないだろう。

理由が無ければないで問題があるけど。

「……………スリルがあった方が盛り上がる」

なるほど。それは嬉しい気遣いだ。確かに、こういうサプライズがあった方が場の雰囲気も変わる。しかし、

「結局、全部の辛子入り焼売は明久の口に入る気がするから、スリルは感じないなあ」

「ちよつとヴェル！ なんてこと言うのさ！ そんなことあるわけ……………」

素早く焼売を一つ選出し、明久の口に放り込む。

それが普通の焼売だったなら、明久がただ喜ぶだけだ。しかし、

俺が選んだ焼売は、皆の期待を裏切らず、

「ぶへおあつー!!」

辛子焼売だった。

「うう……酷いよヴェル……」

「意地汚い事をした罰だよ。反省しなさい」

「うう……」

ガクリと、明久は地面に突っ伏したまま動かなくなる。

大袈裟だなあ、明久は。人間、普通の料理くらいじゃ気絶しないよ。例え辛子しか入っていない焼売だったとしても。

……………普通なら、ね。

「ど、どうしたのじゃヴェル!? 突然黒いオーラを出し始めて」

「……………暗黒物質の方が、百倍怖いよ……………」

「意味が分からんぞ!? しつかりするのじゃ!」

秀吉に何度も肩をガタガタと振らされ、俺は我に返った。

はっ。あのおぞましい物は一体何処に!?

慌てて周囲を見渡すが何もない。良かった。またあんなものを見るのは御免だ。夢で本当に良かった。

「ありがとう秀吉。助かったよ。ちょっと白昼夢を視てみたいだ」

「そ、そうか? それだけなら良いが……」

秀吉は、まだ少し心配そうな顔をしている。良い子だ。

俺は感謝の意も込めて、彼の頭を撫でながらもう一度お礼を言う。

また気持ち良さそうに目を細めていたけど、やっぱり恥ずかしいらしく顔を赤くしてすぐに離れていった。

「アンタ。恥ずかしげもなく、よくそんなことが出来るわね」

「だ、駄目ですよ！　そういうのはもっと大人になってからです！　！」

「何を言ってるんだ姫路さん」

一体、彼女の思考ではどんな事を考えていたんだ？

「……………許すまじ！」

「ムツツリーニ。君も何を言ってるんだ？」

どうやら、もうすでに秀吉は男として見られていないらしい。

「それより、次は島田さんだよ」

突然襲い掛かってきたムツツリーニと明久（いつの間にか復活していた）を軽くあしらひ、島田さんに視線を向ける。

「う、うん。分かった」

島田さんが蓋を開けている間に、二人の屍を椅子にして腰掛ける。うゝん。あんまり座り心地は良くない。

「二人とも、もっと食べて体重を増やした方が良いね」

「……………君、案外酷いよね」

「……………鬼」

失敬な。俺は正当防衛に徹しただけだ。

「冗談はこれくらいにして。島田さんの料理はどんなのかな」

「そんなに自信無いんだけど」

そう言いながら、俺達の方に弁当箱を寄せる。その中身は、ハンバーグ、だし巻き玉子（海苔、蒲鉾巻き）、空豆とジャガイモのサラダ、蒸したエビ……等々、少し手の込んだ物が多かった。

「へえ。美味しそうだね。全部島田さんの手作り？」

「ヴェル、何言ってるんだよ。島田さんがそんな女の子らしいことする訳がな未だかつて感じたことのない痛みが腕に！？」

「ウチが作ったのよ！　なにか文句がある！」

「ありません！　あるわけありません！」

寝たままの姿勢でダブルリストロックを仕掛けられた明久が悲痛な声を上げる。

島田さん、なんでそんなにキレのあるプロレス技を仕掛けられるんだ。

「分かれば良いのよ」

「うう……酷い目にあつた……」

「島田さん島田さん。いくらなんでもやりすぎじゃないか？」

「うっ……」

地面に這いつくばって呻き声を上げる明久を一瞥して、彼女は氣まずそうに顔を逸らす。

流石に罪悪感はあつたようだ。

「これじゃ明久は自分で食べることも出来ないし、島田さんが食べさせてあげてよ」

そつと島田さんにアドバイス。昨日は姫路さんばかりちよつとした手助けをしてしまったから、島田さんにも何かしてあげないとフエアじゃない。

「な、なに言ってるのよ！」

しかし問題なのは、この娘が素直じゃないってことだ。折角仲良くなるチャンスを、ことごとく外しているわけだし。

「だから、『あゝん』とか言いながら、明久の口に料理を運んであげれば良いんだって」

「そんなの出来るわけないでしょー！」

「島田さん。難しく考えすぎだよ。これは『お詫び』なんだ」

「お詫びって、なんの？」

それ本気で聞いている？

「だから、明久に『酷いことしてごめん』って、『お詫び』に食

べさせてあげるってこと。このままだと明久に嫌われるぞ?」

島田さんの言葉に頭痛を覚えながらも、なんとか話を進める。

「……………」

『嫌われる』という単語がグサリときたのか、島田さんは顔を歪ませる。

そういうことも考えていたようで、本当に安心した。もし考えていなかったなら、もう俺にはどうしようもない。

「し、しょうがないわね。吉井は動けないみたいだし、ウチが食べさせてあげるわよ」

早速行動に移っている。活発で行動力もあるのだから、明久に好かれるようなことをしてほしいものだ。

「そんな。島田さんにそんなことしてもらうなんて悪いよ」

口調は申し訳なさそうだけど、明久の顔は明らかに引きつっていた。味を心配してるのか、毒が盛られているとか訳のわからない妄想をしているのだろう。

「島田さん。先に一口食べても良いかな?」

「別に構わないけど……………」

構わないって顔はしていないけど、俺は構わずに箸を一番近くにあったハンバーグに伸ばす。一口大に切り分けられているそれらの中から一つ摘まみ、口に放り込んだ。

「このハンバーグとっても美味しいよ、島田さん!」

正直驚いた。料理は出来るだろうなと思っていたけど、俺が想像していた以上の出来だ。

これなら明久も気に入るだろう。

「そ、そう?」

島田さんも嬉しいご様子。自分の手料理を誉められて嬉しくないはずがない。

食べさせたい人に言われたら、もっと嬉しいはずだ。

「ねえ、ヴェル。それ本当?」

「まだ疑ってるのか。明久。俺が料理に妥協しない性格なのは知

ってるだろ？」

「そ、そうだね。ヴェルはそういう人だったね。じ、じゃあ島田さん。お願いしても良いかな」

「わ、分かってるわよ……！」

何度か深呼吸を繰り返す。やはり心の準備は必要なのだろう。

そしてその後、島田さんはおかずの一つを掴み、雛鳥のように口を開けている明久に近付けていった。

「あ、あゝん」

可愛い！

顔を真つ赤にしながらも『あゝん』と言った島田さんは大変女の子らしくて可愛いよ！

「……………裏切り者は赦さない」

……物騒なことをいうムツツリーニの口を塞ぐとしよう。

「ずるいです、美波ちゃん」

ごめん姫路さん。今は我慢して。

「しかし、客観的に見るとシニールな光景じゃな……」

秀吉の言葉に、改めて二人を見してみる。片方は、恥じらいながら手料理を食べさせようとしている乙女。もう片方は、地面に這いつくばり、首だけを動かして食べようとしているバカ。

うん。確かにシニールだ。

だけど、そんなことは関係無い。だってこれは恋愛イベントの条件を満たしているはずだから！

しかし、そのイベントを崩壊させる怒声が、平穏な屋上に響き渡った。

「させません、豚野郎——！！」

突如として現れたその少女は、明久に止めを刺し、島田さんに抱き着く。

咄然とする俺達一同と、身動きしない明久を尻目に、至福の表情で島田さんのぺったんこな胸に頬擦りをする少女。

クルクルと巻いたツインテールを靡かせ、さっそうと現れた彼女の正体とは……？

後半に続く！

——っ、て、え、っ！？ 続くの！？

第8話 彼女の料理は殺しの香り 前編（後書き）

なんとか一週間以内に仕上げられた……。
次はもう少し早く更新できるよう頑張ります！

第9話 彼女の料理は殺しの香り 後編

前編の最後に現れた謎の少女。

別に謎でも何でもないんだけど、今回はまずその正体に迫ってみよう。

「ちよつと止めなさい美春!!」

「嫌です! もう離しません! お姉さま」

「イヤ——!!」

えー。簡単に今の状況を説明すると、島田さんは彼女——Dクラスの清水美春に押し倒され、そのぺったんこを堪能されている。

「ちよつとヴェル! 今ウチの悪口考えてなかった!？」

「滅相もございません」

女の勘ってどの世界でも恐ろしい。

まさか自分が危機的状况に置かれていても気が付くとは。今後は彼女の胸の事は『地平線』と呼ぼう。

「なんだか、無性にアンタの両目を抉りたくなっただけ」

「気のせいです」

困った。これも駄目ならなんと呼べば……？

「お姉さま」 そんな豚野郎は放っておいて、美春と二人つきりで逢瀬を楽しみましょうよ」

「二人つきりって、吉井達がいるじゃない!!」

「豚野郎共なんて眼中にありません!」

相変わらず、どれだけ男が嫌いなんだこの娘は。

「ウチは今、みんなと一緒に弁当を食べてるの！ 美春とだけは嫌！ 身の危険も感じるし！！」

「大丈夫です！ お姉さまお手製の愛情弁当は責任を持って美春が食べますから！！」

「ウチの話を聞きなさい！！」

そろそろ冗談を言っている場合じゃないようだ。早く助けないと島田さんの貞操が危ない気がする。

本当なら他の皆にも協力して欲しいけど、ほとんどが呆然としているだけだし、一人は生きているのかも分からない。

「生きてるよ！！」

——訂正。一応生きてはいるらしい。

「いい加減にしなさい」

「きやうん！」

軽く頭の天辺にチョップを入れ、襟首を掴んで美春を引き剥がす。見た目通り、美春は軽いので簡単にできた。

「な、何をするんですか！ この——ヴェル、さん？」

振り返りざまの般若のような顔から一転、困惑した表情を浮かべて、俺の顔を窺う。

さっき島田さんが俺の名前を呼んでいたんだけど、どうやら気付いていなかったようだ。

「久しぶり美春。一ヶ月ぶりくらいだね」

「ど、どどうしてここに！？」

「だって、俺はFクラスに所属してるから」

「え」

そんな顔をされると傷付くなあ。

「あの、ヴェル君はこの子とお知り合いなんですか？」

「うん。まあね」

美春は、駅前にある『ラ・ペデイス』という喫茶店の店長の娘だ。俺はその店の常連なので、何度か顔を合わせたことがある。それに、一時期店の手伝いをしていたこともあるので、話したこともある。

最初は俺も《豚野郎》と呼ばれていたけど、何度か話している内に、「ヴェルさん」と呼んでくれるようになっていた。

しかし、最近は色々と忙しくて店に行くことが出来ていなかったし、昨日のDクラス戦でも会うことができなかった。だから、久しぶりに再会したってことなる。

「それより、君はまた人に迷惑を掛けてるみたいだね」

「い、いえいえとんでもない！！ 美春はただお姉さまと親睦を深めようと……………」

「その過程で島田さん本人やその他大勢（俺達）に迷惑を掛けるじゃないか」

「うつ……………」

身体を小さくしてしゅんとする美春。自覚があるのか、それとも俺がいたから罪悪感を覚えたのか。

どちらにしても、今は反省する気があるみたいだし、今日のところはあまり責めないでおこう。

「良いか。今度は気を付けるんだぞ」

「はい……………」

平身低頭の美春の頭にそつと手を添えて、優しく撫でる。恐る恐る顔を上げた彼女に、俺は微笑みかけた。

「ヴェル。アンター一体何者……………！？」

戦慄に似た表情を浮かべて、島田さんが俺を凝視してくる。

「美春」

「な、なんででしょうか……………？」

怒られると思っているのだろうか。名前を呼んだら身を固くした。そんなに警戒しなくても良いだろうに。

「美春。今日は俺が赦す。思いつ切り島田さんに抱き着け」

「ちよつとヴェル！？ 何言ってるの！？」

「ヴェルさん！！ い、良いんですか！？」

「良くないわよ！！」

「ああ。俺が全面的に赦す」

「アンタが赦してもウチは赦してないわよ！！」

「分かりました……………美春。行かせていただきま

—す……………」

「美春！？ 止めなさい！ ちよ！？ イヤ……………！！」

ふう。これで美春は大人しくしているだろう。

一件落着、と。

「やっぱり君って酷いよね」

「……………鬼畜」

「そんなことないよ。ねえ、秀吉？」

「……………すまぬ。否定出来ぬ」

そんな馬鹿な！？

「あ、あはは……………」

騒がしい屋上で、姫路さんが一人乾いた笑いを浮かべていた。当然といえば、当然か。

「何やってるんだ、お前らは……………」

そうやって騒ぎ合っている中、ジュースを買いに行っていた雄二がやって来た。この惨状（？）を見て、頭が痛そうな顔をしている。

「雄二いらつしゃい。まだ昼飯の途中なんだ」

「それは見れば分かる。早くしないと昼休みが終わるぞ？」

ジュースを配り、空いている場所に座る。もちろん、端でじゃれている島田さんと美春からは離れて。

その間に、腕時計で時間を確認する。

「もうそんなに時間が経ってたか。じゃあ早く食べるとしよう。」

最後姫路さん。よろしく」

「は、はいっ」

弁当箱をそつと前に出して、蓋を開ける。中身はから揚げやエビフライにおにぎりやアスパラ巻きなどの定番メニュー。

見、た、目、は、普通に美味しそうんだけど、なんだ？
この身体の芯をも凍らせるような戦慄は……？

まるで、一品だけでも人の魂を刈り取ることができる殺人兵器のような、そんな気がする。

「美味しそうだね。僕のお弁当もこれと同じ料理が入ってるの？」

「はい。その、自信はないんですけど……」

「じゃあ、頂きま——」

「……………（ヒョイ）」

「あつ、ずるいぞムツツリー二っ」

「ムツツリー二！」

さっきあれだけ痛め付けたのに、動きが全く衰えていないムツツリー二が、エビフライを掠め取っていった。

そして、流れるように口に運び——

「……………（パク）」

ボタン ガタガタガタガタ

豪快に顔から倒れ、小刻みに震えだした。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

男たち一同、顔を見合わせる。

「わわっ、土屋君!？」

姫路さんが慌ててムツツリー二に駆け寄る。

優しいね姫路さん。

「……………」 (ムクリ) 「

ムツツリー二が(震えながら)起き上がった。

「……………」 (グツ) 「

そして、姫路さんに向けて親指を立てる。

たぶん、美味しかったと言いたいんだろう。

ムツツリー二、まじで紳士だな、おい。

「あ、お口に合いましたか? 良かったですっ」

姫路さん。「良かったですっ」じゃない! これは異常事態だぞ

!?

「良かったらどんどん食べてくださいね」

姫路さんが笑顔で進めてくる。

またか。またなのか! やっぱこういうパターンなのか!!

見た目は良いけど味は壊滅的ですってアレか!?

(……………皆。あれ、どう思う?)

(……………どう考えても演技には見えん)

(……………わざわざ演技する意味も無いだろう)

(つまり……………)

(……………(これが彼女の実力)……………)

認めたくないが、未だに震えているムツツリー二がいる以上認めない訳にはいかない。

(…………とりあえず、俺がもう一度アレを口にしてみる)

(そんな！？ 危険だよヴェル！！)

(そうじゃぞ。お主もムツツリー二のあの姿を見たであろう)

(俺も流石に止めた方が良いと思うぞ)

表情は笑顔のまま、こんな会話をしている俺達に気付いた様子のない姫路さん。今は、彼女の鈍感さに感謝したい。

(大丈夫。俺はありとあらゆる毒素を無効にできるから！)

(凄いや、ヴェル！ それなら大丈夫だね！)

(お主は本当に何者じゃ？)

気にするな。

(じゃあ、いくよ)

(……(健闘を祈る)……)

軽く敬礼してくれた仲間に、俺もこっそり返して戦場へと赴いた。

「ヴェル君。どうぞ」

「ありがとう、姫路さん」

笑顔が凄く怖い。もしかして確信犯じゃないかという考えが頭を過ったけど、そんなことはない。だって、わざわざ嫌われるようなことをする娘じゃないだろうから。

玉子焼きを箸で摘む。

そしてそれを穴が空くほどジーツと眺めた。頼むから、規格外の味はしないでくれよ。

「頂きます」

思い切ってパクリと食べる。

その瞬間、世界が反転した。

美味いか不味いなんてのを超越した何かを、その玉子焼きは俺に示してくれた……ような気がする。

「……………（ゴクン）」

口に残っていた玉子焼きを完全に飲み込む。また意識が遠退きそうになった。しかし、なんとか踏み止まり、皆の方を向く。

姫路さんは笑顔だけど、男達はすっかり青ざめてしまっている。

「ヴェル君。美味しかったですか？」

俺の臨死体験と男たちの驚愕に気付いていない姫路さんは、無邪気な笑顔を向けてきた。そんな彼女に、俺はにっこり笑い掛けて。

「君に料理を教えよう」

「……ちよつと待て!!」

暗に不味い発言をした俺を三人がかりで押さえ付けようとしてきた。だから俺は、素早く彼らの口に兵器をぶち込んだ。

ボタン ガタガタガタガタ × 3

悲鳴も上げず儚く散った俺の大切な友人達。

すまない、みんな。だけど仕方ないんだ。彼女のソレは、もはや料理なんかじゃない。人を殺すための兵器だ！ 誰かが止めないと大変なことになる！

特に明久。君は下手をすると、将来毎日コレを口にしなければいけない。間違いなく早死にするだろう。

これは君たちのことを思っていることなんだよ……………！

「あ、あの。吉井君達は大丈夫なんですか？」

「もちろん。急に立ち上がったから、みんな立ち眩みを起こしただけ。それよりも、姫路さん」

「は、はい」

彼女の両方に手を置いて、真っ直ぐにその双眸を覗き込む。急に視線を合わされて困惑しているのか、目が泳いでいるがどうでもいい！

それよりもこの話の方が大切だ！

「姫路さん！ 君に料理を教えたいんだけど、良いかな？」

「え、ええ？ お口に合わなかったんですか？」

合うとか合わないとか、美味いとか不味いとかいう次元の話じゃないんだ。とは流石に言えない。

彼女を傷付けず、かつ彼女が自発的に料理の手解きを受けてくれるようにしないといけない。じゃあどう言えば良いのか。

簡単だ。

「いや。俺の口には合ったよ。だけど、明久には合わないね」

「そんな……一生懸命作ってきたのに……」

「がっかりすることはない。合わないなら合うものを作れば良いんだ」

「えっ？」

「俺は明久の好きな料理も味付けも把握してる。それを君に伝授しよう——」

「よろしくお願いします先生！」

俺の両手を包み込み、必死な顔で懇願してくる姫路さん。予想以上に食い付いてきたな。

「じゃあ今週の日曜日に俺の家——はまずいよな。姫路さんの——」

「瑞希とお呼びください先生！」

性格が激変している！？

ま、まあ本人がそう言ってるんだから、呼ばせてもらおうか。

「——こほん。瑞希の家は大丈夫？」

「私の家、ですか？ たぶん、駄目だと思います……」

そつだよねえ。女子の家に男一人で行ったりなんかしたらあらぬ誤解をされる。じゃあ、どうしたものだろうか。

「お姉さま……」

「誰でも良いから助けてー！」

じゃれ合っている島田さんと美春。

うーん。姫路さんばかり鼻^{ひいき}肩にする訳にはいかないよね。島田にも協力してもらわないといけないかな。

「姫路さん。エビフライ一つ貰うよ」

「？ 良いですよ」

「ありがとう」

他に比べて少し小さめのエビフライを選んで、転げ回っている二人に近付く。動き回っている上に、風も吹いているので、スカートが捲れて際どい感じがした。

実際、ムツツリー二の周囲に血の池が出来ていた。一体いつの間に見たのやら。

「美春。ちよつとこつち向いて」

「えっ？ なんですか、ヴェルさ……」

無防備に振り返った美春の口に、エビフライ（小）を突っ込む。ごめんよ美春。後で助けてあげるから。

「……………（ガクン）」

動かなくなった美春をアスファルトの上に寝かし、押し倒されていた島田さんを起こす。

「大丈夫？」

「……………」

「美春には少し眠ってもらったから」

「……………」

「……もしかして、怒ってる？」

「当たり前でしょ!!」

彼女の拳を受ける明久の痛みが、よくわかった。

「まったく、助けるならもっと早く助けなさいよ」

「ごめん」

「謝るくらいなら、そもそも美春をけしかけたりしないで!」

「……反省してます」

「本当は?」

「別に反省してません」

「もう一発殴つところかしら」

拳に息を吹き掛けるのは止めて。

「で、一体どうしたって言うのよ。吉井達はいつの間にか昼寝してるし、美春も寝ちゃったみたいだし」

寝てるわけじゃないんだけど、説明するのも面倒だ。みんなの脈が止まった時は、どうしようかとも思ってたけど……まあ良いか。生きてるし。

「実は、週末姫——瑞希に料理を教えることになったんだけど、島田さんもうかなくて」

「ウチも? それより、いつの間に瑞希を呼び捨てにするようになったの?」

流石女子。よくそれに気が付いた。明久だったら気が付かないだろう。

「瑞希に、明久の好きな料理や好みの味付けを教えようって言うたら——」

「ウチにも教えてください! 良かったら美波って呼んでもらって構いません!」

島田さん、君もか！？

「えっと、じゃあ美波も参加する？」

「はい！！」

「じゃあさ、日曜日美波の家は大丈夫？ 女の子二人が独り暮らしの男の家に来るのはまずいし、瑞希の家も駄目らしいんだ」

「ウチの家？ たぶん大丈夫だと思うわよ。週末は両親は仕事でいないから、どうせ家にいないといけないし」

「なら行つて良いんだね」

「うん。一応親にも聞いておくわ」

これで場所の確保は完了だ。後は、瑞希の料理の腕を改善すれば俺達の命の危機は回避出来る。

「問題は、今あるコレをどうするかだな……」

目の前に置かれた中身が全く減っていない弁当箱の前に、俺は頭を抱えた。俺が食べきっても構わないんだけど、なんとなく納得いかない。

「……僕、生きてる？」

「……のようじゃな」

「……一瞬、あの世が見えたぞ」

「……生きてるって素晴らしい」

ムツッリニ。君は出血多量で死にかけたただだから。

「アンタ達どうしたのよ。昼寝なんかして、疲れてるの？」

「う、うん。昨日のDクラス戦の疲れが出たみたい」

「ワシもじゃ」

「……俺も」

「俺もだ」

あくまでも料理のことには言及しないつもりか。そんな誤魔化しで騙されるはずが……。

「そうなんですか。皆さん体調管理はしっかりしてくださいね」

騙されていた。

単純というか、お人好しというか。瑞希の将来が不安になった。

「みんな起きたね。じゃあ、この瑞希が作ったお弁当をみんなで食べようか」

「……自分の食べるからいい」「……」

綺麗にハモっていた。

しかし………

「明久の弁当って、瑞希が作ったんだよね？」

「はっ！？ しまった!？」

やっぱり気付いてなかったのか。

「明久……男を見せろ」

雄二が明久の肩に手を置き、哀愁に満ちた表情で激励していた。

お前内心面白がってるだろ。

「あ、そうだ。僕にはヴェルから貰ったお弁当があるから……」

往生際が悪い。

「瑞希、美波。アレはなんだ!？」

「「えっ!？」」

俺の声につられて明後日の方向を見る二人。本当に単純で良かった。

（今だ！ 明久口開ける!!）

（そんな！ 無理だよヴェル！ 僕の退化している胃にコレは刺激が強すぎる!!）

（なら死ね！ お前は愛のためなら死ねる男だろう!？）

（死ねるかあ!）

ちい！ 普段食ってないくせにいい動きをしゃがる。やっぱり自

分の命が掛かっていると尋常じゃない身体能力を発揮するな！

（しかし甘い！！）

（なっ！？ ヴェルの姿が消えくぼあっ！？）

少しだけ、ごく微量に本気を出す。明久が俺の姿を見失っている間に懐に入り、これまた手加減して鳩尾を殴った。

（明久、愛のために死ねええ！！）

（んごべば！？）

開いた口に、二つの弁当の中身を流し込む。突然の事に目を白黒させている明久の口を無理矢理動かして咀嚼を手伝い、呑み込ませた。

「……………（ガクン）」

さっきの美春同様首をガクリと垂らして、明久は動かなくなった。

「………
任務完了だ。」

「お主、本当に何者じゃ？」

「今一瞬姿が消えなかったか？ 消えたよな？」

「……………鬼神」

「ムツツリーニ。だんだんランクが上がってきてない？」

これ以上俺はどこを目指せば良いのか。

「ちよつとヴェル。何にもないじゃないの」

「ごめん。見間違いだったみたいだ」

「あれ？ 吉井君はまた昼寝ですか？」

「ああ。そうなんだ姫路。どうやら相当疲れてたみたいだな。お

前の分まで弁当を食ったらずぐに寝ちまった」

「凄まじい食いつ振りじゃったのう」

「……………（コクコク）」

「そうなんですかあ」

「全くしょうがないわね」

白眼を剥いて、泡も吹いているのに寝ていると言うのは無理があるだろう。

しかし、彼女達が信じているならそれで良いか。世の中には、知らなくて良いこともある。

「あつ、そういえば」

パンツ、と何かを思い出したように両手を合わせた姫路さん。

……………なんだろう。とてつもなく嫌な予感がする。

「私、デザートも作ってきたんです」

そうだね。食後のデザートも大切だね。

なんて迷惑なことを。

自覚が無いって恐ろしい……………！

「あつ、すいません。スプーンを忘れてきちゃったみたいなので、ちよつと取ってきますね」

トテトテと歩いていき、瑞希は屋上を後にした。残された俺達は、引きつった表情で、そのデザートとやらが入っているパックを睨んでいる。

「…………………………」

「アンタ達どうしたのよ。そんな怖い顔をして」

一人瑞希の料理の恐ろしさを知らない美波が不思議そうな顔をしている。彼女には、教えた方が良いかもしれない。

「美波、ちよつとこれ味見してみて」

「……………それくらい構わないけど……………」

頭上に疑問符を浮かべながら、美波は蓋を開けソレ（ヨーグルトっぽいもの）に人差し指を突っ込む。そして、そのまま何の警戒もなくソレを口に運んでいった。

（ヴェル、それはちと止めた方が良いと思うのじゃが）

（いや、どうせ今週末の料理指導の時に解るんだ。今の内に知っておいた方が良い）

小声で話している間に、ソレをつけた人差し指が美波の口に入る。しばらくは何の反応もなく、ただジッと指をくわえている。

（……………なあヴェル。幾らなんでも動きが無さすぎじゃないか？）

（そうだね……………何かリアクションがあつていいはずなんだけど）
（もしや気絶しておるのではないか？）

……………まさか。

心配になつて顔を寄せてみると、美波は指をくわえたまま硬直していた。俺は慌てて脈拍、呼吸を確認する。

良かった……………。生きてはいるようだ。少量だったのが幸をそうしたのだろう。

「美波、起きなよ」

彼女の目の前で、指をパチンと鳴らす。これで、体内の毒素は完全に消えたと思うけど……………。

「う……………ん……………？ あれ？ ウチ、どうしてたの？」

「良かった。気が付いたんだね。何してたか覚えてる？」

「えっと。確か、瑞希が作ってきたデザートの味見をしたら突然目の前が真っ暗になつて……………そうよ！ アレを食べたらなんだか急に苦しくなつたのよ！ ちょっとヴェルということ！？」

く、苦しい！ 胸ぐらを掴んでガクガクと前後に振らないでくれ！

「島田、落ち着くのじゃ。今から説明する」

た、助かった。秀吉が彼女を羽交い締めにしてくれたおかげで解放された。

「美波、今から全部話すからしつかり聞いてくれよ」

事情説明中――

「――ええつと、つまり瑞希の料理は殺人兵器で、さっきアンタ達が倒れたのも、美春が急に寝ちゃったのも、今吉井がこうなってるのも全部その料理のせいだと。そういうこと？」

「そう。そういうこと」

「信じられんかもしれんが、これは本当の話じゃ」

「島田もさつき意識を失っただろう？　それが証拠だ」

「……………（コクコク）」

死んでいる明久以外の男達と共に、美春を説得する。まだ少し信じられていないようで、疑いの眼差しを俺達に向けていた。

「そんなこと言われても、信じられないわよ」

「……………わかった。じゃあ、実証しようじゃないか」

「実証、ってまさかヴェル。食べるつもりか！？」

「無理じゃ！　死んでしまうぞ！？」

「……………無謀すぎる！」

みんな。ありがとう。心配してくれて。なんだか感動して涙が出てきそうだ。

でもやらないといけないんだ。知らないままでは、美波が瑞希の料理を食べようとするのも防がないといけない。それはあまりにも負担が大きい。だから、知ってもらわないといけないんだ。

「俺は大丈夫。まあ見ててよ」

「……ヴェル！」「」

心配そうな表情で俺を見てくる三人に笑いかけ、デザートの入ったパックを持ち上げる。そして、倒れたままの明久に近付き、さつき美波にしたのと同じように指を鳴らした。

「……………うつ。あ、あれ？　生きてる？」

息を吹き返した明久は、身体を起こしあちこちを確認している。

「おはよう明久」

放っておいたらずっと確認していそうなので早目に声をかける。

すぐ近くに立っている俺を見て、明久は顔を綻ばせた。

「あつ、ヴェル。また生きて会えて嬉しいよ」

「俺もだ」

友の生還を喜び抱擁を交わす。しばらく抱き合った後、身体を離して明久が一言。

「ところで、その手に持つてるのは、なに？」

「ああ。これ？　これは瑞希が作ったデザートだよ」

「……………えっ？」

「もう一回死んでくれ」

呆けている明久の口に、そのヨーグルトを流し込む。今度は液体だから、凄く食べさせ易かった。

「ぶべらばへー！？」

意味不明な言葉を発し、明久は再びコンクリートの地面に身を沈める。そして二度と、動くことはなかった……………。

「どう？　これで信用した？」

デザートを処理し、美波への証明も完了した俺は、皆の方に向き直った。

「ヴェル……………アンタって……………」

「やはり、鬼畜じゃな」

「……………期待を裏切らない」

「なんとなく予想はしていたが、マジでやるとはな」

みんなの視線が若干冷たい。こんなことすれば、普通そうなるよね。

「大丈夫。ちゃんと蘇生するから」

「「「「「そういう問題じゃない!」「」「」

命あつての物種だと思っただけどなあ。

第10話 Bクラス戦に向けて（前書き）

連載を始めて一ヶ月。

その内容がBクラスへの宣戦布告というのも味気無いですが、話の進み具合から言ってもこれが限界でした。

連載半年記念には、何か甘い話でも書きたいんですけど、その前に今の内容を気にした方が良いでしょうね。

第10話 Bクラス戦に向けて

激動の時を過ごした後、俺達はようやく昼食にありついた。

瑞希の料理で昏倒していた明久と美春を解毒して、今は静かにもそもそと弁当を食べている。ただ、美春は起きるとまた騒ぎ出しそうなので眠らせたままだ。

「そういえば坂本、次の目標だけど」

「ん？ 試召戦争のか？」

「うん」

ちなみに、その美春は美波の膝を枕にして眠っている。起きたら大騒ぎだろうけど、冷たいコンクリートの上に寝かせるのは流石に可哀想だし、死にかけたのだからこれくらいの幸福があっても良いと思う。

「相手はBクラスなの？」

「ああ。そうだ」

「まあ、Aクラスを攻めるのに、Bクラスの室外機を壊させる必要はないよね」

それだったら初めからDクラスにAクラスを攻めさせた方が良い。圧倒的過ぎて話にならないだろうけど。

それを言っと、俺達なんて指先だけでも倒されてしまいそうだけど、考えるのはよそう。

「どうしてBクラスなの？ 目標はAクラスなんでしょう？」

美波のそんな指摘。Aクラスに戦争を吹っ掛けると宣言したのに、Bクラスを攻める理由がわからないのだろう。明久も、分かっ

なさそうな顔をしている。

「正直に言おう」

雄二が急に神妙な面持ちになる。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」
「そりゃ、そうだよね。」

文月学園に六個あるクラスの内、最強の実力を誇るAクラスと最弱に位置するFクラス。その実力差は明白だし、何よりAクラスの代表である霧島さんは、まさしく学年最強の生徒だ。Fクラスの生徒が束になっても敵わない。

代表を落とせない以上、俺達に勝つ希望は存在しないってことになる。

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」

「いいや、そんなことはない。Aクラスをやる」

「雄二、さつきと言ってることが違うじゃないか」

美波の言葉を引き継ぐように、明久が間に入った。さつきは勝てないと言い、今度はAクラスをやると言った。明久としては、Aクラスに勝てるかどうかが気になるのだろう。

「明久。確かにクラス単位じゃ俺達に勝ち目は絶対じゃない。けど、戦いようによつては僅かな勝機はあるかもしれないぞ」

「え？ ヴェル、それ本当？」

「ああ。そうだろ雄二」

「もちろん。でなきゃ戦争なんて吹っ掛けたりしない」

「でも、本当にそんな方法があるの？」

明久の不安げな表情。他の皆も、同じ表情をしていた。

「Aクラスとは一騎討ちで決着をつける」

「一騎討ちで、ってどうやって一騎討ちに持ち込むの？」

「その為のBクラス戦なんだよ」

「ヴェルの言う通りだ」

大きく頷く雄二。それに引き換え、明久はますます分からないと言った具合に首を傾げている。

「明久。試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「え？ も、もちろん！」

知らないな、こいつ。

「明久。下位クラスは負けたら設備のランクを一つ落とされるんだよ。DクラスならEクラスの設備に、EクラスだったらFクラスの設備に、って具合にね」

「へえ。そうだったんだ」

「これくらい常識だ」

「あれ？ でもFクラスはどうなるの？ 下にHクラスなんて無いよね？」

Hクラス？ 何を言ってるんだ明久は？

「……………H！（ボタボタ）」

ムツツリー二も変なところに反応するんじゃない。

「吉井君、Fの次はGですよ…………？」

「アンタ、アルファベットもろくに言えないわけ？」

「ち、違っ！ 今のは少しえっちなこと考えてたからで…………」

「まさかのカミングアウトだな」

「間違えたと素直に言えば良かったのにのう」

「明久の変態度合いを明らかにしたただけだったな。前から分かってたけど」

「みんな嫌いだっ」

不貞腐れてしまった明久を宥め、話を続ける。

「俺達が負けた場合は脇において、逆に上位クラスが負けた場合は、どうなる？」

「悔しい」

確かに悔しいけどさ……………！

「ムッツリーニ、ペンチ」

「雄二、それは甘い。ここは指折りを使うべきだ」

「僕の指が窮地につ！？」

馬鹿なことばかり言う子には、お仕置が必要だよな。

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

今度は瑞希のフォローが入る。良い娘だ。これで料理も上手かつたら完璧なだけだね……。それは俺がなんとかするしかないか。

「つまり、うちに負けたクラスは最低の設備と入れ替えられるわけだね」

「そういうこと。ていうか、昨日のDクラス戦で平賀君が設備の入れ替えがどうのって言うてただろう。忘れたのか？」

「そう……だっけ？」

忘れたのも仕方ないか。明久だし。

「でだ。俺達はそのシステムを利用して、交渉をする」

「交渉、ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えな代わりにAクラスへと攻め込むよう交渉する」

「なるほど。そのまま設備を入れ替えたらFクラスだけど、Aクラスに負けてもCクラスの設備で済むわけだ。Bクラスとしても異存は無いはず。これは上手くいくかもしれないな」

色々細かい問題はあるが、良い作戦だ。上手くいけばAクラスとの戦争は楽に進むだろう。

「そういうことだ。そして、Aクラスにはそれをネタに交渉する。」

『Bクラスとの戦争直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

「なるほどね」

明久が納得したように何度も深く頷いている。

学年二番の実力を持つクラスと戦った後に攻め込むというのは、なかなか嫌らしい戦術だ。Fクラスも連戦になってしまいが、そこは血気盛んな男が集まるクラス。不満という原動力も糧にして、

いつでも臨戦態勢だ。

逆にAクラスは、モチベーションが高い人はそんなにいないはず。勝って得るものは無いし、俺達と戦うのなんて面倒以外の何物でもないだろう。

まあ、雄二の幼馴染みの霧島さんは、やる気満々だろうけど。

「じゃが、それでも問題はあるじやろう。体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実にあるのは確かじゃからな。それに――」

「それに？」

「そもそも一騎討ちで勝てるのじやろうか？　こちらに姫路がいるということは既に知れ渡っていることじやろう？」

瑞希はうちのクラスの主戦力だ。それが知られている以上、彼女を無力化する策を敵は用意してくるだろう。

「秀吉。それを言ったら次のBクラス戦も同じだよ。わざわざ危け――一番強い人間を放っておくなんてこと、するわけないだろう？」

「ねえ、今『危険』って言おうとしなかった？」

気のせいです。

「そのことについては問題ない。俺に考えがある。心配するな」
自信満々に宣言する雄二。代表であるこの子が言うのだ。何かしら良い手立てがあるのだろう。

「とにかく、まずはBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」

「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」

みんなも、今はそれを気にしないことに決めたのだろう。雄二、信頼されてるな。

「で、ヴェル」

「ん？ どうしたの？」

「今日のテストが終わったら、Bクラスに行って宣戦布告して来てくれ」

「俺がか？ 明久じゃなくて？」

雄二なら、こういう役割は（少し酷い真似をしてでも）明久に任せると思ってたんだけど……。

「普段なら俺も明久に任せてるところなんだが、さっきの見たら流石になぁ……」

さっきの、って俺が明久に瑞希の料理を食べさせたことだろうか。確かにあれを見たら、流石に同情するのを禁じ得ないだろう。

無理矢理食べさせた俺にも原因があるしな。

「仕方ない。俺が行くとしようか」

「意外とあつさり決心したな」

「なんだよ。雄二が行けって言ったんじゃないか。なんなら明久に行かせようか？ 別に俺は構わないけど」

「僕は良いからヴェル行ってきたよっ」

明久があからさまに俺の背中を押す。前のDクラスへの宣戦布告で一つ賢くなっているな。

「……まっ。明久は行く気はないみたいだし、やっぱり俺がいくよ」

「そうか。じゃあ頼む。ヴェルは明久と違って美少年だからな。多分殴られる心配はない」

「やだなあ雄二。誉めても何も出ないぞ？」

和やかに笑い合う俺達。しかし、それで納得出来ない男子が一人。「ちよつと雄二！ 僕と違ってってどういうこと！？ 僕だって

365度どこから見ても美少年じゃないか！」

「5度多いぞ」

「実質5度じゃな」

「俺が美少年だってのは認めてるんだな」

ちょっと嬉しい。

「三人とも嫌いだっ」

また不貞腐れてしまう明久。大丈夫。君もしっかり（一部の人間にとっては）美少年だから。

「とにかく、後は頼んだぞ」

雄二が俺の肩に手を置いて激励した直後、昼休みの終わりを告げる鐘が鳴り、再びテスト漬けの午後が始まった。

午後のテストを全て終えた放課後。俺はBクラスの教室を訪れていた。

理由はもちろん、明日の試召戦争の宣戦布告をするためだ。

「たのもー」

まるで道場破りのような事を言いながら、Bクラスの扉を開ける。帰りのHRも終わり、生徒達が帰り支度をしていて騒がしかった教室内が、突然の訪問者（俺ね）の登場で静まり返る。

「なんだ、お前は？」

みんなが俺の登場に驚いている中、一人の男子生徒が前に出てきた。短く刈り揃えられた黒髪と剃り残しの目立つヒゲ。ズル賢い感じのする淀んだ瞳。

一目見て分かった。こういうタイプの人間は、勝つ為ならどんな卑怯な手段も厭わない。良く言えば合理的。悪く言えば卑怯者。そういう人種の人間だ。

「そうか。君がBクラス代表の根本恭二だね」

根本恭二。霧島さんや瑞希のように学力の面でその名はそれほど知られていない。ただ、悪名は有名で、『球技大会で相手チームに一服盛った』とか『喧嘩に刃物は当選装備』とか『カンニングの常

連』などの噂の絶えない生徒だ。

「そうだが、まずは俺の質問に答える。お前は何者だ？」

「ああ。悪い悪い。自己紹介がまだだった。俺はFクラスのヴェルサスIIスクワラン。君たちBクラスに宣戦布告するためやって来た使者だ」

『使者』という単語に、全員の目の色が変わる。

おーおー。殺気立ってるねえ。

「へえ。あの最低クラスの使者さんか。しかも、俺達に宣戦布告だつて？ おいおい、冗談は止してくれよ」

小馬鹿にしたように笑いながら、俺をじろじろ見てくる根本君。あんまり気分の良いものではない。

「もしかして、昨日のDクラス戦で勝って調子に乗ってるのか？ だったら止めときな。お前なんかじゃ俺達には勝てないんだ。淡い幻想を抱く前に、しつかり勉強して出直してこい」

しつ、しつ、と虫けらを払うように手を振っている。しかし、俺はその程度の事で尻尾を巻いて逃げ帰る気にはならないよ。

「悪いね根本君。俺達は別に調子に乗ってなんかいないよ。それに俺達にとって君みたいな雑魚はただの通過点なんだ。だから、グダグダ言つてないで宣戦布告を受けろ」

「……なんだと？」

それまで余裕だった根本君の顔が固まる。俺の挑発の効果はあったようだ。

彼のような人間は、自分より格下だと思っっている人間に挑発されると、そいつを徹底的に叩き潰そうとする。これで、彼は間違いないく宣戦布告を受けるだろう。狡猾で、出来るだけ残虐に俺を叩き潰すために。

「顔だけじゃなくて耳まで悪いみたいだね。余計なことはどうでも良いから宣戦布告を受けやがれて言ってるんだよ」

「……………」

彼の顔から表情が消える。その無表情の仮面の下で、どれだけ俺

のことを罵り、俺を嵌める算段を立てているかは見当もつかない。挑発も、十分過ぎるくらい十分だ。後はとっとと退散するとしよう。

「開戦は明日の午後、昼休み終了の鐘が鳴った直後だ。臆病風に吹かれるなよ？」

行き掛け、いや、帰り掛けの駄賃に最後の挑発をして、俺は彼らに背を向けBクラスを後にしようと思った。

しかし、

「待てよ」

根本君に呼び止められ、俺は仕方なく振り向いた。当の根本君は、薄ら笑いを浮かべながら俺を見ている。

「おいおいヴェルサスとやら。まさかも帰るつもりなのか？」

「ああ。もう用は済んだんだ。これ以上居座られたら君たちも気分が悪いだろう？」

「そんなことはないさ。なんならずっとここにいてくれて構わない」

相当頭に来ているようだ。最初から予想はしていたけど、簡単には帰らせてくれそうにない。

「いやいや。迷惑掛けるわけにはいかないからね。俺はもう帰らせてもらうよ」

「そう言わずゆっくりしていけよ。下位クラスの使者も丁寧にてなすのが、俺達の楽しみなんだ。なあみんな？」

根本君にそう振られ、クラスの生徒全員が首を縦に振っていた。

やっぱり、相当怒っているらしい。みんな目が怖いよ？

今にも飛び掛かってきそうな生徒達を右手を上げて制し、憎らしい笑顔を俺に向けてくる根本君。

「みんなも頷いていることだし、ちょっとだけ待ってくれよな！」
根本君の手が振り降ろされる。その合図を皮切りに、Bクラスの生徒全員が飛び掛かってきた。明久も、Dクラスでこんな目に遭ったんだなあ。

しかし、これは良い機会だ。ちょうど実戦に近い訓練をしたかったところだし。

「ちょっとだけ遊んであげようか」

「ただいま」

Fクラスの扉を開けて、元気良く中に入る。

「おう。ご苦労だったな、ヴェル」

まず目に飛び込んだできたのは、笑顔で手を振っている雄二。どうやら俺が戻ってくるのを待っていたらしい。

「お疲れ、ヴェル」

その横には明久が居た。めちやくちゃ明るい表情だ。自分に全く被害がなくて喜んでいるな？

「雄二、明久。待っててくれたんだ」

「代表として、使者の安否を気遣うのは当然だろ？ よく無事に戻った」

「雄二。僕がボロボロになって帰ってきた時と反応が違わない？」
「当たり前だろ？ 明久はどうなっても構わないが、ヴェルは大事な戦力なんだ。対応が違うのはしょうがない」

「あつ、そつか……」

おい。それで納得するんじゃない。

「……じゃない！　それは僕のことを邪魔者扱いしているだけじゃないか！」

お。気が付いた。いや、言われたらすぐに気付いてほしかったけど。

「それよりも、首尾はどうだ？」

「上々かな。少し挑発し過ぎちゃった気もするけど」

「……二人とも、僕の事は無視ですか」

明久がジトつとした目で見てくるけど、気にしない。

「あれ？　そういえば、ヴェルはボロボロになってないね」

俺のことは見ている間にそのことに気付いたのか、明久が指摘してくる。気にされなかったらそれで良かったんだけど、聞かれた以上は仕方がない。あつたことを全て話すでしょう。

「ああ。俺も明久みたいに襲われそうになっただけで、返り討ちにしたよ」

「おいおい。学校で暴力沙汰は止めてくれよ？」

理不尽と暴力の塊みたいなＦクラスの代表を務める雄二が言えた義理じゃないと思う。

「大丈夫。怪我はさせてない。ただ、男子達を女子にぶつけて少しエッチなハプニングを起こさせてきただけだから」

『『『なにいいいい！！！！？？』』』

うわっ。びっくりしたっ。

見ると、どこから湧いて出たのか怪しい格好のクラスメイト達が犇^{ひし}めいていた。昨日の朝と言いま今と言いま、この子達は一切どうなっているんだろう。

『ヴェル！　それは本当か！？』

『Bクラスの男子共め！ 自分達だけそんな良い目に遭いやがって！』

『待て！ そのハプニングを起こしたのはヴェルだ！ つまり、ヴェルに頼めば俺達にだって同じことが起きるはず！』

『『『つ！！！？？』』』

いや、そんな期待と羨望の眼差しを向けられても困るんだけど…。

『ヴェル！ いやヴェル様！ どうか俺達にも施しを！』

『私の秘蔵コレクションの全てを献上しますから！ 何とぞその奇跡の技を私めに！』

『姫路さんとの恋愛イベントを俺に与えてくださいーい！』

『『『宜しく願います！！！』』』

黒い逆三角形の覆面を被った集団が、俺に向かって一斉に頭を下げているこの状況。まるで、俺がこの集団の代表みたいじゃないか！
どうしようかと明久に視線を向けると。

「宜しく願います！！」

明久も頭を下げていた。

「おーまーえーはー」

「頭が割れる割れる割れる割れる！！ 止めて下さいヴェルさま

ゝあゝあゝあゝ！？」

拳骨で明久の頭を左右から挟み、グリグリと動かす。ただでさえ

面倒臭い連中に囲まれてるのに、明久までふざけるんじゃない。

——大真面目にやってると思うけど。

「まったく。女子の少ないこのクラスで、そんなこと出来るわけないだろ」

『『『なにっ！？』『』『』』

「当たり前だ。女子がたった二人しかいないんだぞ？ それに比べて男子は四十八人。この内数人だけが良い目を見たら、君たちその子をボコボコにするだろう？」

『『『当然だ！』『』『』』

即答するなよ……。

「とにかく、そういうわけだから無理」

こればかりは仕方がない。面白そうだけど、好きでもない男子とそんなイベントが発生したら女子が可哀想だし、諦めてもらうしかないね。

『ちくしょー！！』 これで俺にも春が到来すると思ったのに！！』

そんな簡単に訪れないよ。

『くそっ！ このクラスに姫路さんと島田さんと秀吉以外にも女子がいればなあ！……』

秀吉は男だつて。それに俺は『女子は二人』つて言つたはずだぞ。

『俺達のこの煩惱と欲望はどこに吐き出せば良いんだ!?!』

家に帰つて部屋で一人寂しくやつてくれ。脇にティッシュを忘れるな。終わったらしっかり手を洗え。お兄さんとの約束だぞ♪

『『『Bクラスの男子共、赦すまじ!?!』』』

最終的にそういう発想になるんだ……。

この子達の思考回路つて一体……。

「ヴェル。よくやった。どうやらコイツらの士気がより一層高まつたみたいだ」

「そうだな……。良かったよ……」

この子達が馬鹿で、本当に良かった。

「よし皆、明日は気合い入れていくぞー!」

『『『おつしゃああああ!?!?!』』』

気合いの入った掛け声を上げながら、みんな慌ただしく教室を後にした。残ったのは、俺と瑞希だけ。

……………ん? 瑞希?

何をしているのかと思えば、手に例のラブレターを持ったままそわそわしていた。どうやら、あれを明久の卓袱台の下に入れるか入

れまいか、ずっと悩んでいたらしい。相当悩んでいるようだ。男共があれだけ騒いでいたのに全く気付いていなかったみたいだし、現に俺がこうして見ているのにも気付いていない。

……声を掛けるのも野暮だ。俺もこっそりと帰るとしよう。

「頑張つてね」

教室を出る時、まだ迷っている瑞希の背中に、俺は小さくそう呟いた。

第10話 Bクラス戦に向けて（後書き）

次回は明後日か明後日に更新したいと思います。

次回Bクラス戦。嫉妬に燃えるFクラス男子達の活躍をお楽しみに！

第11話 Bクラス戦 一日目 前編 男の嫉妬は恐ろしい！（前書き）

いよいよBクラス戦の開幕。

大筋はちゃんと原作通りですが、オリジナルの展開も織り混ぜていきます。

バカテスト 化学

【第六問】

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね。

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント
君は化学をなめてませんか。

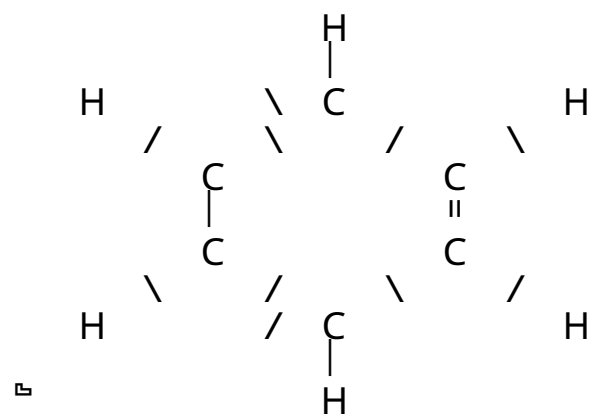
吉井明久の答え

『 B - E - N - Z - E - N 』

あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。

ヴェルサスⅡスクワランの答え

『



』

教師のコメント

小さい解答欄の中に組成式を書いた君の器用さには脱帽します。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。

今日も昨日に引き続き、午前中はテストだった。前の戦争で総合科目勝負をやったおかげで、テストの量が多く二日も掛かってしまった。

腹が減っては戦は出来ぬということで、ついさつき昼食を摂り、今は戦争前最後のミーティングの真っ最中だ。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入だが、殺る気は充分か？」

『当たり前じゃあああああ！！！！』

昨日の放課後の一件のせいか、既に黒装束で身を飾っているクラスメイト。その姿もかなり異様なものだが、テンションもまた異様なまでに高まっていた。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない！」

『任せとけやあああああ！！』

「前線の指揮は姫路瑞希に取ってもらう。野郎共、死んで漢を見せってみろ！」

「が、頑張ります」

男達の異常なノリについていけない瑞希が、引き気味な様子で一歩前に出る。

『つよしやああああ！！ やったらあああああ！！』

血管がぶち切れんあまりに声を張り上げる前線部隊の男達。

この気合いの入りようなら、廊下での戦闘は負けなだらう。と
いうか、戦う前に向こうが気迫にやられて引く気がする。

だって、この悪鬼と化した男達が四十人も襲い掛かって来るんだ
よ？ こういう状態になった人間は何をするか分からないし、恐怖
というものを感じていないから質が悪い。俺だったら間違いなく逃
げるね。

キンコンカンコン

昼休み終了の鐘が鳴る。昨日宣告してきた通り、試召戦争の開幕
だ。

「行くぞ野郎共！！ モテない男の実力を見せてやれ！！」

『粛清じゃあああああ！！』

雄二のダメ出しで、俺達が勢い付く。今回の作戦には勢いが必要
だ。

俺達はBクラスを目指し、教室を飛び出した……………のだが。

「待つてたぞ馬鹿共」

渡り廊下旧校舎側は既に、Bクラスの生徒達によって占領されて
いた。

昨日の一件で士気を上げていたのは、どうやら俺達だけではな
かったようだ。全力でFクラス（というか俺）を完膚無きまでに叩き
のめすつもりらしい。

その為の待ち伏せか。考えたな。

立地条件から言つて、Bクラスの方が渡り廊下に近いので、あつ
という間に占領させるのは当たり前だ。両勢力がぶつかり合うこの
場所を制した方がこの戦いを優位に運べる。しかも、勢いになった
相手の出鼻を挫く効果も期待できる。まさに一石二鳥というわけだ。

「ここから先は通させはしない！ 試獣召喚っ！」
サモン

『試獣召喚っ！』

先頭の男子生徒が召喚したのを皮切りに、Bクラスの生徒が一斉に召喚する。その数はざっと二十五体。戦力の半分をここに注ぎ込んで来ている。つまりそれだけ向こうも本気というわけだ。

『試獣召喚っ！』
サモン

それに対抗して、俺達も召喚。みんなの姿をデフォルメした召喚獣が現れる。みんなと同じ逆三角形の黒覆面に、黒装束。さらには巨大な鎌まで持って、まるで死神の行進みたいだ。

……………ん？

おかしいな。俺の目が悪くなったのか？ 召喚獣まで、今の皆と同じ姿になっているような。

もう一度よく目を凝らして、召喚獣達の姿を見てみよう。

逆三角形の黒覆面と黒装束。

死神が持っているような巨大な鎌。

どうやら見間違いはなかったらしい。皆の召喚獣はちゃんと召

喚者と同じ姿をしていた。

ってなんで召喚獣までみんなと同じ格好になってるんだよ!?

『シャアアア——!!!!!!!!!!』

しかもなんか奇声を上げてるし!!

俺は男達の嫉妬を舐めていたらしい。まさか、その妬ましが試験召喚システムにまで干渉して召喚獣の姿を変えてしまおうとは……。

恐るべし。モテない男達の執念。

『お、おい。なんかあいつらの召喚獣やバイぞ!』

『勝てる気がしねえよ! 撤退したほうが良いんじゃないか!?』

『ひ、怯むな! 戦力では俺達の方が上なんだ! Fクラスの馬鹿共になんかに負ける訳がない!』

悪いこと言わないから、早く逃げた方が良いと思うなあ……。

『八つ裂きじゃああああ!』

『血祭りじゃああああ!』

『【ピー】じゃああああ!』

あんまり危ないことを言うんじゃない!!

『A班、B班は正面の敵を殲滅! C班、D班は敵に囲まれないように援護! 陣営を崩すな!』

『『『了解!——』』』

見た目は怖いし、正直頭おかしいんじゃないかと思ってたんだけど、指示は的確だ。しかも、いつの間にやら班分けまでしていたよ
うで、動きが洗練されている。

この子達。底が知れない……。

『Bクラス 野中長男

総合 1943点

VS

Fクラス 近藤吉宗

総合 886点

&

Fクラス 武藤啓太

総合 784点』

『Bクラス 金田一祐子

数学 159点

VS

Fクラス 君島博

数学 78点

&

Fクラス 金田耕平

数学 69点』

『Bクラス 里井真由子

物理 152点

VS

Fクラス 久保晃

物理 75点

&

物理 62点』

少し遅れて点数が表示される。二人一組になっているのでBクラス生徒にも引けを取っていない。まあ、執念でこの点数を取ったよ
うなものだしな……。

ちなみにBクラスが高橋先生をつれていたので総合科目の勝負が行われているけど、今回俺達の主力は数学だ。Bクラスには比較的文系が多いのと、なぜか数学の長谷川先生は召喚可能範囲が広いのが理由だ。

余談だが、どうやら召喚可能範囲には個人差があるようだ。しかし、その理由は学園長にもわからないらしい。
そんなものよく作つたよね。

それはともかく、俺達には他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生がいる。立ち会いの教師を多くして、一気に駆け抜ける作戦だ。

しかし、向こうの人数が予定より多いので、突破には少し時間が掛かる。それまでこちらの戦力が削られないように気を付けないと。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

若干戦況が俺達に有利な中、我等が最終兵器の瑞希がやって来た。体力の無い彼女は、俺達の全力疾走について来られなかったみたいだ。

「来たぞ！ 姫路瑞希だ！」

Bクラスの誰かが叫ぶ。懸念していた通り、Fクラスに瑞希がい

ることは知られていたようだ。

その声を聞いて、Bクラスの生徒の目付きが変わった。しかし、男達に阻まれてほとんどの生徒が瑞希まで到達できない。

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

彼女の一番近くに居た明久が声を掛ける。

「は、はい。行つて、きます」

肩を弾ませながら戦場に向かつてくる瑞希。戦う前から満身創痍な彼女がこの人混みの中に入っていくのは苦しいだろう。

「みんな！ 彼女の道を開ける！！」

『おう！！』

まるでモーセを前に割れた紅海のように、人混みが割れ道が出来る。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

割れた人混みの先から、Bクラス女子が瑞希に駆け寄ってきた。

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

早速潰しに掛かってきた辺り、やはり瑞希は相当危険視されているようだ。その考えは正しいし、挑み掛かった彼女には敬意を表したいところだけど、残念相手が悪すぎる。

他の生徒も加勢したいと考えているだろうけど、男達に阻まれてそれは叶わない。

『サモン
試獣召喚！』

二人が同時に喚声を唱える。それ応えて魔方陣が展開。召喚獣が姿を現した。

岩下さんの召喚獣は剣を構え、瑞希の方は身の丈の倍以上はある大剣を軽々と持っている。

二人にそっくりな召喚獣だったが、瑞希の召喚獣は、敵のそれとは異なる箇所が一カ所あった。

それは、

「あれ？ 姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

「？ 結構解けると、アクセサリーをしてるの？」

明久が言っているのは、彼女の召喚獣が左手首に付けている綺麗な腕輪のことだ。

明久には縁の無い話だから忘れてしまっているようなので、その腕輪について簡単に説明しておこう。

召喚獣は召喚者のテストの得点に比例して強くなる。そして、その得点が一定の点数を越えると、召喚獣にデフォルトの装備以外に腕輪が装備される。その腕輪を着けた召喚獣には特殊能力が付与され、点数と引き換えに絶大な力を使う事が出来るという仕組みだ。

「そ、それって!？」

岩下さんは明久と違いその腕輪の意味を覚えていたらしい。恐怖で顔を歪ませ、明らかに怯えている。

「じゃ、いきますね」

瑞希が小さな手をキュツと握り込む。その動きに合わせて、彼女の召喚獣が左腕を敵の方に向けた。

どうやら、能力を使用するつもりらしい。

しかし、敵味方が入り交じって戦っているこの戦場で能力を使うのは得策じゃない。能力によっては味方まで巻き込まれる可能性がある。

「総員退避！」

彼女の能力が発動する前に撤退命令を出す。集中力の増しているクラスメイト達は即座に反応し、敵から距離を置いた。

その直後、瑞希の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボツ！

『うわあああーっ！』

左腕から光線がほとばしり、岩下さんを含めた十体程の召喚獣が炎に包まれる。

『Fクラス 姫路瑞希

数学 412点

VS

Bクラス 岩下律子

数学 189点

&

Bクラス 菊入真由美

数学 151点

&

・

・

・

・

・

・

&

&

Bクラス 野中長男

数学 187点

』

戦死したBクラス生徒の皆さん。御愁傷様です。

腕輪が装備されるのは点数が400点を越えた生徒だけ。普通の生徒じゃ、まず手も足も出ない。

「お、おい！ 一度に十人も殺られたぞ！？」

「なっ！ そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、危険すぎる！」

俺もそう思うよ。

瑞希、色んな意味で危険すぎる。

「み、皆さん、頑張つて下さいー！」

指揮官らしくない瑞希の言葉。しかし、その可愛らしい指示の効果は絶大だった。

「よっしゃああー！！ やったるでえーっ！」

「姫路さんサイコーッ！」

調子良いな、みんな。

「くっ！ 生き残った奴は後退だ！ 中堅部隊と入れ替わるぞ！」

戦死だけはするな！」

敵側のそんな指示が飛ぶ。この調子なら狙い通り敵をBクラスに釘付けにすることも出来そうだ。

「姫路さん、とりあえず下がって」

「あ、はい」

明久が、能力の使用で著しく点数を消費した瑞希を下がらせる。敵の士気は完全に挫いたし、彼女抜きでも前線部隊の殲滅は簡単だろう。

しかし、気になるのは話が上手く行きすぎているような気がすることだ。昨日根本君を直接見た俺としては、敵の出方が甘い気がしてならない。

アイツなら、もっと残忍で狡猾な手段を幾らでも使ってくると思っただけど……………。

……………まさか。

「明久、秀吉。教室に戻るぞ」

他の生徒は撤退していくBクラスを追撃していつて、残っているのは数名だけだ。

「そうじゃのう。ワシもそうしようと思っていたところじゃ」

「え？　なんで？」

どうやら秀吉はBクラス代表が根本君だと知っていたらしい。

逆に明久は全く知らないみたいだけど。

「明久、Bクラスの代表はな……」

「うん」

「あの根本なんだよ」

「根本って、あの根本恭二？」

「そうじゃ。あの悪名高き根本恭二じゃ」

本当に彼は評判の悪い生徒のようだ。秀吉もそうだけど、明久も

『根本恭二』という名前を聞いて苦い顔をしている。

「なるほど。それなら戻っておいたほうが良さそうだね」

「雄二に何かがあるとは思えんが、念の為にの」

「よし決まりだ。前線部隊の何人かも着いてきてくれ」

襲われるようなことはないだろうけど、一応人数は居たほうが良い。俺と明久と秀吉は、前線に残る瑞希に一言告げて、数人を連れ教室へと引き返した。

第11話 Bクラス戦 一日目 前編 男の嫉妬は恐ろしい！（後書き）

Fクラスの男子達の煩惱ってどれくらいの力があるんですかね…。

アニメでは確かFFF団の格好をした召喚獣は自爆してた気がするんですけど、あれってFクラスの男達だから出来てたんでしょうか？

それとも、やろうと思えば誰でもやれたりするんでしょうか？
………謎です。

第12話 Bクラス戦 一日目 後編 とって良いのはとられる覚悟がある奴

ちょうど一週間振りの更新です。本当はもう少し早く投稿するつもりだったので、遅くなってしまいました。

ほぼ原作通りに進めていてこの更新率の低さ。申し訳なく思います。

「うわあ、これは酷いね……」

「まさかこうくるとはのう」

「これもまた戦術、かな」

教室に引き返してきた俺達を出迎えたのは、破壊された卓袱台や真つ二つに折られたシャーパーンなどの類이었다。

「これじゃ、点数の補給も出来ないね」

「うむ。地味じゃが点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「嫌がらせっていうより苛めだと思うけど？」

自分より弱い相手にここまでするのは、器の小ささが露呈している気がする。やったことは地味だし。

「気にするな。修復に時間は掛かるが作戦に支障はない」

これは雄二の台詞。どうやら彼は教室を留守にしていたらしい。教室から人が消え失せた間に、破壊工作がなされたようだ。

「雄二、どこに行つてたのさ。おかげで教室がめちゃくちゃだよ」

「まあまあ、落ち着け明久。代表が教室から出てたんだ。大方、敵側から何かしらのアプローチがあつたんだろう？」

「まあな。Bクラスから協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしてたんだ」

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃないの？」

「体力のない瑞希はどうするんだよ？」

「あ、そっか」

そう。一見こちらにはメリットが無いように思われる協定だけど、本当はそうではない。体力勝負で一気に決着をつけたいところだけど、最終的には代表を打ち取らなければいけないわけだから、団体よりも瑞希の戦闘力に全てが掛かっている。

体力のない彼女の為に、この協定は都合が良い。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「なるほど。そうするとますますもってこの協定は俺達に有利ってわけだね」

「そういうことだ」

鷹揚に頷く雄二。

しかしそうなると気になるのは、なんでBクラスはそんな協定を言い出したのかってことだ。根本君だって、こちらに瑞希がいることは知っているはずだし、それを承知の上で協定を言い出したってことは、何か秘策でもあるのだろう。

しかし、そんな秘策があるか？

俺達は机や筆記用具を壊された程度で、他にはなんの被害も――

何気無く、無惨に破壊された卓袱台に目を向けた時にあることに気がついた。

.....なるほどね。

「みんな、自分の荷物を確認するんだ」

「どうしたのじゃ？ 突然何を言っておるのじゃ？」

「良いから早く。たぶん、破壊された卓袱台や筆記用具は凶。本当は俺達の弱味を探しにきたんだよ」

「え？ えっ？ なに？ ということ？」

明久、察しが悪い。

「……なるほど。そういうことか」

手で口元を隠しながら思案に耽っていた雄二が声を漏らす。流石代表。どこかのバカと違って察しが良い。

「この場にいる全員で教室を調べる。自分の荷物から何か無くなっていたり、盗聴器やカメラを見付けたら即報告しろ」

恐らく、教室内の盗聴盗撮は行われていないはずだ。試召戦争中は教室に残っている生徒は皆無だし、誰もいない教室の様子を把握しても意味がない。

まあ、代表の雄二が一人きりでいるのを襲おうって言うなら話は別だけど、雄二が一人きりになるなんてそんなことは絶対にあり得ない。

盗聴盗撮よりむしろ、何かが盗られている可能性が高い。Fクラス男子のことだ。弱味になりそうな物の一つや二つ持っているだろう。

「あつ！ 俺の荷物がない！」

「俺もだ！ 一枚無くなってる！」

早速無くなっている物が見つかったようだ。

一枚つてことは何かを書いた紙とか、恥ずかしい写真かな？

「「秀吉の写真が無い！！」」

「どうしてそんなものを持っているのじゃっ!？」

秀吉の疑問ももつとみだけど、そんなものを持つていつても、男達の懐と秀吉のプライドが痛いだけのような……。

「君たち、後で新しい写真をあげるから、それ以外に無くなってるものを探して」

「「分かりました、ヴェルさん!」」

「ヴェル!？」 お主も何を言っておるのじゃ!？」

「ごめんね秀吉。君の犠牲は無駄にはしないよ。」

「ところで、なんで突然教室を調べ始めたの?」

明久が自分の鞆の中身をぶちまけながら訊ねてきた。

「なんだ。まだ気付いていないのか。」

「さっき言っただろう。Bクラスは俺達の弱味を探しに来たんだよ」

俺も自分の鞆の中を確認しながら返事をする。恐らく俺の鞆には盗聴器が仕掛けられているはずだ。戦争は関係無く、根本君の個人的な怨みで。

昨日は少しやり過ぎた。その腹いせに俺を陥れようという魂胆なのだろう。だからと言って、指をくわえて待っている俺じゃない。

「さあて、俺なら盗聴器をどこに仕掛けるかなあ……。」

「その『弱味を探す』って言うのがよくわからないんだよね。僕達の弱味を握ってどうするの?」

「もちろん、俺達の動きを封じる為さ。いや、正確に言えば瑞希の動きを止める為だね」

「???」

「まだわかっていないな。」

「つまり、俺達の内誰かの弱味を握って瑞希を脅迫するんだよ。」

『言う通りにしなければこいつの恥ずかしい写真を学校中にばらまく』とかね。心優しい彼女の事だ。言う通りにするだろう」

「そんな! 酷いよ!」

「まだあくまでも可能性の話だよ。大した物が見付からなかった

可能性だつてあるんだ。だから、こうやって教室中を確認してるんじゃないか」

おつ。あつたあつた。超小型の盗聴器。じゃあ、プチッと潰しちゃいますか。

「……それに、もし見つけたとしたら向こうから瑞希に対して何かしらのアプローチがあるはずだ。その時に、向こうの手を封じることができれば何の心配もない」

「それは、そうだけど………」

表情を暗くして俯く明久。この子はバカだけど優しいから、そういう卑怯な手段は赦せないのだろう。

「明久、心配なら君が彼女のことを見ててあげなよ」

「え？」

「そうすれば、彼女の様子がおかしかったらすぐに気付けるだろう？」

「そつか……。うん！ そうだよね！」

明久に任せることに不安を感じないわけじゃないけど、多分大丈夫だろう。やるときはしっかりやってくれる男だ。

しかし、俺達誰かの弱味だったらまだ良いけど、もし瑞希自身のを見付けられたら問題だ。

そんなものあるかどうかも怪しいけど。

……いや、もしかしたら一つあるか？

「明久、瑞希の鞆はある？」

「え？ あ、うん。ここに置いてあるけど」

「ちよつと貸して」

「う、うん。でもどうするの？」

「もちろん中身を改める」

「そつか。そうだよね……つて、うええええええ！？」

「ヴヴヴェル!? も、もしかしたらそれは非常にまずいんじゃない……」

「もしかなくてもまずいに決まってるだろ。勝手に人の鞆の中を見るなんて」

「だ、だったら止めた方が良いんじゃない……？」

明久があわあわ言っている。しかし、その言葉に反して彼の手は瑞希の鞆に伸びていた。

……言動と行動が一致してないよ？

「明久、周りをよく見てみなよ」

「えっ……？」

伸びてきた明久の手を掴み、周囲に視線を向けるように促す。その視線の先には……。

「はあはあ……島田の鞆……」

『秀吉の鞆……』

「姫路さんのかばああん！！」

女子（一人男子）の鞆一つで鼻息を荒くするクラスメイト達。

「彼等に任せておけるかい？」

「ヴェルがやったほうが安全だね……」

「でしょ？」

明久も人のことは言えないだろうけど。

「さて、と。アレは盗られていないだろうか……」

瑞希の鞆は閉じられていたけど、間違いなく一度開けられているはずだ。事実、この教室内で口の開いていない鞆は彼女のものだけ。誤魔化すなら、もっと上手く誤魔化せよなあ。

「ヴェル、何を探してるの？」

「この間、瑞希が書いてたラブレター」

「……………ソレ、ナンノコトカナ」

片言になってるぞ。

「とにかく、それを探してるんだ。もう出した可能性もあるけど

……………」

「けど？」

「出してたら今頃あの怪しい集団が黙っていないだろう」

それに、明久の挙動も不審になってるはずだろうしね。

「……………そうかぁ。FFF団は容赦ないからなぁ」

あの怪しいクラスメイト達はFFF団なんて名前だったのか。

……………色々な意味で怖いな。

ひとまずそれは脇に置いて、引き続き瑞希の鞆の中を調べる。モノがモノだけに、彼女も隠す場所には気をつけているはずだ。他人に見られることはもちろん、万が一渡す本人に見られたらことだからね。

「隠すなら、ここか……………」

学生鞆の中にある小さいポケット。ここくらいにしか隠す場所が無い。他の場所だと大切なラブレターがしわくちゃになる危険性があるし、取り出すのもここなら簡単だ。

「さて、あるかなぁ」

取り出すわけにはいかないので、まずはそのポケットに手を突っ込んで確認。指先に紙のようなものが触れる。何か入っているようだ。

次に視覚で確認。指先に触れたソレを引き抜き、実際に見てみる。ソレは、一昨日に見た封筒と、何ら変わらないものだった。

「おかしいな……………」

「どうしたの？ まさか、無かったとか！？」

「いや、あったよ」

「えっ？ なら何がおかしいの？」

「あることがおかしいんだ」

「??？」

「どういうこと？ って顔してるな。」

「教えるべきか？」

「……………いや、今は黙っていた方が良さそうだな。」

「どうやら瑞希の鞆の中には厄介なものが入っているようだし、今は俺も騙されているフリをした方が良さそう。」

「悪い明久。どうやら俺の勘違いだったみたいだ」

「そう、なの？ なら良いんだけど……………」

「言いながら、封筒を元の位置に戻す。明久はなんとなく納得のいていないようだけど、渋々といった具合に引き下がってくれた。」

「明久。しっかり瑞希を見守っててやれよ」

「う、うん……………うん？」

「よく分かっているみたいだけど、それでいい。その疑惑。その不信感が、明久を答えまで導いてくれることを信じよう。」

それからしばらく教室内を徹底的に調べ回ってみたけど、大した物は盗られていなかった。結局被害は、秀吉や美波や瑞希などが撮られた女子達の写真が数十枚。

「なんでわざわざ持って来ていたのかは気にしないけど、それらを保障するために、俺は多少の出費を強いられてしまった。」

「新しいのを上げるなんて、軽々しく言わなければよかったなあ……………」

『……………毎度あり』

流石に一枚五百円、千円は高過ぎない？

「皆ご苦労だった。ひとまず、大したモノが盗られていなくて良かった。壊された設備や筆記用具は俺が手配しておく。皆は戦闘に戻ってくれ」

『おおーっ！』

新しい写真を手に入れて上機嫌な男子達は意気揚々と教室を後にした。後に残ったのは、俺と雄二だけだ。

「ヴェル、どうした？ 戻らないのか？」

「ああ。雄二には、あらかじめ話しておいた方が良いと思ってね」

「……良い話ってわけじゃなさそうだな。分かった。聞こう」

流石雄二。話が早くて凄く助かる。

「実は——」

「明久！」

雄二との話を終えた俺は、すぐさま先に行った皆の後を追った。すると明久は何故かFクラスの部隊の人混みを抜けた先に居た。

「ヴェル！ ちょうど良いところに来てくれた！」

「悪い。遅れた。それで、どんな状況？」

「うん。実は島田さんが人質にとられちゃって……」

明久が指差す方を見れば、なるほど確かに美波がBクラスの生徒二人に囲まれ捕まっていた。これじゃあ、迂闊に手を出せそうにもない。

「新しく来たお前もそこで止まれ！ それ以上近寄ると、この女は補習室送りだぞ！」

美波の召喚獣の首に剣を近付け、俺達を牽制してくる。

このままだと、彼女は殺られて西村先生の鬼の補習を受けることになるだろう。それは流石に可哀想だ。

なんとかして、相手が美波に止めを刺す前に倒さないといけないな。

「ヴェル、僕に考えがある。ここは任せてくれないかな」

「へえ。明久がそんなことを言うなんて珍しいね。分かった。その考えってやつをみせてくれよ」

「分かってる。まあ見ててよ」

ウインクしながら俺に向かって親指を立てる明久。

なんでだろう。凄く自信満々に見えるのに、めちゃくちゃ心配だ。

「総員——」

明久が右手を挙げる。それに合わせ、部隊の男達が身構えた。

明久は一呼吸置いて、挙げた右手を勢い良く振り下ろした。

「突撃いーっ！」

「なんでだよー！」

人質に構わず突撃命令を出した馬鹿に天誅を下す。このバカ。いつも酷い目に合わされてる仕返しに美波を見捨てる気だな？

「ま、まて、吉井！」

敵からの待ったコールがかかる。そりゃ驚くよね。

「コイツがどうして俺達に捕まっと思ったっている？」

「馬鹿だから」

「殺すわよ」

捕まっていなければ、美波はすぐにでも明久に飛び掛かりそうな勢いだっただ。

「コイツ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

へえ。優しいじゃないか美波。

「島田さん……」

明久が美波に驚いたような顔を向ける。でも、感動してるというより戦慄しているといった感じの顔だ。

「な、なによ……」

美波はそれに気付いていないのか、頬を赤く染めてそっぽを向く。そのツンデレっぷりはなかなか可愛いと思うんだけど、明久の目にはそう映らないのだろうか？

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

「「違うわよ（だろ）！」」

どうやら、明久の目は既に腐っているらしい。普段の美波の明久に対する接し方も問題なんだろうけど。

「ウチがアンタの様子を見に行っちゃ悪いっての！？ これでも心配したんだからね！」

「え……？」

「明久、そこまで信じられないって顔しなくても良いんじゃないかな？」

失礼にも程がある。

「島田さん。それ、本当？」

「そ、そうよ。悪い？」

ぷいっと顔を背ける美波。

流石に明久も信じたのか、納得したように何度もゆっくりと首を縦に振っていた。

「へっ。やっとわかったか。それじゃ、おとなしく……」

「総員突撃いーっ！」

「どうしてよっ！？」

どうして、ってそんなの決まっているだろう。

「あの島田さんは偽者だ！ 変装している敵だぞ！」

明久が、救いようのないバカだからだ。

「ち、違う！ コイツは本当に……」

「黙れ！ 見破られた作戦に固執するなんて見苦しいぞ！」

「だ、だから本当に本物……」
「皆、殺れーっ！」

『Bクラス 鈴木二郎

英語W 33点

VS

Fクラス 田中明

英語W 65点

』

『Bクラス 吉田卓夫

英語W 18点

VS

Fクラス 須川亮

英語W 59点

』

哀れBクラスの二人。せっかく人質までとったのに、あつという間にやられてしまった。

「ぎゃあああー……！」

「たすけてえー……！」

近くにいた補習講師に連行されていく二人。可哀想に……。

「皆、気を付ける！ 変装を解いて襲い掛かってくるぞ！」

……問題は、まだ勘違いしているこのバカだな。

「よ、吉井、酷い……。ウチ、本当に心配したのに……」

「まだ白々しい演技を続けるのか！ この大根やく……痛い！？」
捕まっている美波が、敵の変装だと思い込んでいる明久の脳天に拳骨を入れる。なんだか、中身が空っぽのような音がしたけど、気のせいだと信じよう。

「な、何をするんだ、ヴェル！」

「明久の目を覚まそうとしてるんだよ。彼女は正真正銘本物の美

波だ」

「な、何を馬鹿な事を言ってるんだ！ まさかこんな大根役者の言葉を真に受けてるの！ 本物の島田さんが僕のこと心配するはずないじゃないか！ 日頃痛め付けられてる僕が言っただ！ 間違いない！」

「……………とか言ってますけど？」

「うつ……………」

途端に島田さんが顔を伏せる。普段自分がどんな態度で明久に接していたのか、ちゃんと自覚があったようで良かった。

「で、でも！ 本当に心配したんだから！」

「ヴェル、これでもコイツが島田さんだって言うの？ 僕の事を心配したなんて言ってるんだよ！？」

「…………いや、普通信じるだろう」

ここまで心配してくれてる美波を偽者呼ばわりって、心が荒みきってるなあ…………。

「皆、コイツを取り囲め！ ヴェル抜きでも、この人数ならＢクラス一人位には勝てるから！」

どうやら俺を説得するのは諦めたようだ。この子はどうしたら信じてくれるのだろう…………？

「吉井、信じてよ…………。ウチ、本当に心配したんだよ…………？」

「黙れ偽者！ 今からその化けの皮を剥がして——」

「本当に、『吉井が瑞希のパンツを見て鼻血が止まらなくなった』って聞いて心配したんだから！」

なんでそんな嘘に騙されるかな？

「包囲中止！ コレ本物の島田さんだ！」

明久も、どうしてその話で彼女が本物だって確信するかな？
なんだか頭痛がしてきたよ…………。

「島田さん、大丈夫だった？」

さっきまでの態度とは真逆の姿勢で、美波に手を差し伸べる明久。もう少し前にその行動が出来ていれば良かったのにね。

「吉井、ウチのこと、本物だつて認めてくれるの……？」

「もちろん。僕が『姫路さんのパンツを見て鼻血が止まらなくなつた』なんて、猿にでもわかりそうな嘘を信じるのは島田さん以外いな……」

差し出された手を掴み、明久の身体をギュツと抱き締める美波。

周りの男達の間には衝撃が走る。

普通に見れば、捕らわれの姫を助け出したご褒美つて感じた。だけど、さっきの流れから言つて、それははないだろう。

『『吉井クロス……！』』

もつとも、FFF団にはそんなこと関係無いようだけど。

「ぐっ……ふっ……！」

明久の口から息が漏れる。見てみれば、美波の腕が明久の背中では組まれ、胴を強く締め付けていた。これは、ベアハッグか。

二人の体格はそんなに変わらないし、美波は馬鹿力だ。明久へのダメージは絶大のはず。今息が漏れていたのも、肺が圧迫されているからだろう。

「ヴェ、ヴェル……た、たすけ………」

そう言われても……。

「良いじゃないか明久。それだけ密着していれば、いくら美波がぺったんこでも、胸の膨らみが分かるだろ？」

「なっ……！」

あつ。美波が離れた。

「ぶはあ……はあ、はあ……助かつたあ………」

技から解放された明久は、何度も何度も深呼吸を繰り返していた。こんな状況じゃ、女子の胸の感触を楽しんでる余裕はなかったかな？

「ヴェル！ あ、ああアンタ何てこと言つたのよ……！」

代わりに、美波が大袈裟なくらい反応してくれた。顔を真っ赤に染め上げて、慎ましい胸を両腕で庇いながら、俺に食って掛かってくる。

「なんてことって言われても、あの技をやると必然的に『当てんのよ!』みたいな感じになるから、てっきりわざとやったのかと思って」

「ばつ、そんなわけないでしょ!? な、なんでウチが吉井にそんなこと……」

「明久。美波はあんなこと言ってるけど、実際はどんな感じだった?」

「え?」

「な、なに聞いてんのよアンタは!？」

「ここはやっぱり本人に聞くのが一番でしょう。」

「えっと、その……島田さん」

「な、なによ?」

明久は困ったような表情を浮かべて頬をポリポリと掻いている。しかし、その顔が若干の赤みを帯びていたのを、俺は見逃さなかった。なんだ。少しは意識してたんだ。

「小さくても、意外と柔らかいんだね」

その感想はありなんだろうか?

「小さくてもは余計よ! この馬鹿ああーっ!」
なしだったようだ。

「吉井! このウジ虫野郎! 一人だけ女子の胸を堪能しやがって!」

「許さん! 神や仏が貴様を許しても、俺は絶対に許さねえ!」

「死ね! 死んで詫びろ!」

FFF団も怒り心頭のような。いつの間にか着替えて、明久を取り囲んでいる。

「あれ！？ いつの間にかすごくピンチ！？」

美波に十字固めを掛けられていて身動きの取れない明久は、絶体絶命だ。ジリジリと円陣が狭まっていく。

「助けてヴェル！ 嫉妬に狂った男達と島田さんに殺される！！」
人の壁の向こうから、明久の切羽詰まった声が聞こえるけど……。

「ごめん明久。今回はフォロー出来ないや」

「ちくしょう！ 僕が殺られるのを楽しんでるな！？」

「よくお分かりで」

「ヴェル！ 末代まで呪ってやるから……って、うお！？」

その瞬間、黒い人だかりが宙を舞い、明久に襲い掛かった。

「うわあああああ……！！」

断末魔が、人の壁に吸い込まれていく。

暴れ回っているその黒い塊に背を向けて俺は再び戦場に戻っていた。

願わくは、帰ってきた時に明久が存命でありますように。

第12話 Bクラス戦 一日目 後編 とって良いのはとられる覚悟がある奴

次回は土日間に更新したいと思っています。

というか、一巻の内容を終わらせるまでは週二回のペースで更新したいです。

そのあとは……その時に考えましょう（笑）

第13話 Bクラス戦 一日目 放課後 世の中そうそう思い通りには進まない

土日に更新すると言っておきながら、月曜日のこんな時間に更新しています。

今回も前後編にしようかと思っていたのですが、それだとまた更新が遅れそうなので、いっぺんに書き上げました。

誤字脱字、おかしい点を見付けたら、ご報告よろしく願います。

明久が、FFF団 With 美波に殺られてから約二時間。Bクラスとの協定通り休戦中で、俺達は教室に戻って来ていた。

「あの、吉井君は大丈夫なんですか……？」

畳の上に横たえられた明久を心配そうに見つめながら、瑞希が俺に訊ねてきた。今のところ瑞希だけだよ。明久が酷い目に遭って心配してくれるのは。

「大丈夫。明久は意外と頑丈だから」

去年はさんざん西村先生に扱しき倒されてたから、ちょっとやそつとのことでは死にはすまい。

「でも……」

それでも心配そうな瑞希。

明久を運んできたのは俺だ。

もし死んでいたらせめて骨だけでも拾ってやろうかと思って見に行くと、複数人に暴行された後頭を廊下に叩き付けられたような怪我をして明久は倒れていた。

俺に着いてきていたきていた瑞希は大騒ぎで、すぐさま教室に運び込んだわけだけど、まだ目を覚まさない。

それは心配もするはずだ。

「大丈夫、大丈夫。すぐに起きるって」

言いながら、彼女の柔らかい髪にそつと手を乗せて優しく撫でる。撫でている間に、段々と瑞希の表情が弛ゆるんできた。

うんうん。悲しげな顔よりこっちの方が可愛らしいよ。

「……………お主は見境というものが無いのかのう？」

瑞希の頭を撫でていると、背後から秀吉の声。

「うん？ 見境って……ああ。この頭を撫でてること？ これは俺の癖みたいなものだから気にしないで。それに、誰彼構わずして
るわけじゃないよ」

「そうなのか？」

「うん」

少なくとも嫌われている相手には絶体していない。友達以上の相手（男女問わず）だけだ。

「む……………」

そう言っても納得していないらしい秀吉は、ジトツとした視線を向けてくる。この子は本当に男子として見られたいのだろうか？

「秀吉。そんな顔していると、好きな男子が別の女子を構って嫉妬してる女の子みたいだよ？」

「なっ！？ ワシは男じゃ！ それに何故ワシがヴェルのことが好きなどと……………」

「別に誰も秀吉が俺を好きだなんて言っていないよね」

「っ！？」

そんな顔していると、ますますもって女の子みたいだ。

「ははは。冗談だよ。冗談。秀吉が好きなのは俺じゃなくて、こ
うやって撫でられることだろう？」

空いている手で秀吉の頭も撫でる。最初はむくれ面の彼だったが、
少しずつ表情が和らいできた。

「……………この撫で心地は卑怯じゃ」

「気持ち良いでしょう？ 結構評判良いんだよ。俺のコレ」

「誰にじゃ？」

「気になる？」

「……………質問を質問で返すでない」

「ははっ。悪い悪い。これはスキンシップみたいなものだからね。
今まで色んな友達にしてきたんだ。親しい友達にね。だから、秀吉

も瑞希も友達だよ。ね、瑞希？」

「……………ふみゆ」

ありや。微睡んでますか。相当和んでいるらしい。

「凄い威力じゃな……………」

感心したような、呆れたような。そんな秀吉の声。そんなこと言ってる場合じゃないような……………。

「瑞希、寝ちゃ駄目だぞ」

舟を漕ぎ始めた瑞希の肩に手を置いて、軽く揺らす。まだ完全には眠りに入っていなかった彼女は、すぐに覚醒した。

「……………ふえ？ あれ？ 私……………？」

「瑞希、大丈夫？」

「あ、ヴェル君。はい。大丈夫です。すみません。私、少しうとうとしていたみたいで……………」

「仕方がないさ。今日もハードな一日だったし、Dクラス戦に引き続いての二連戦で疲れが溜まってるんだよ」

それに、彼女は元々身体が弱いんだ。気も張っていたし、疲れも溜まる。

「しばらく、休んだ方が良いよ」

「そうさせてもらいます……………」

大きく欠伸をしながら、瑞希は畳に横たわった。

当然ながら、明久の隣に。

「……………ふみゆ」

相当疲れていたのだろう。瑞希はすぐに寝息を立て始めた。

明久、残念だったね。せっかく美少女が隣で寝てるなんて美味しい状況なのに、気絶してるなんて。

ガラッ——

丁度瑞希が寝入った時、Fクラスの扉が開き、雄二が入ってきた。
「お帰り雄二。何処に行ってたんだ？」

「ちよつとトイレにな。それより、まだ明久は寝てるのか。しかも姫路まで……」

「今は寝かせといてあげなよ。明日は二人に少し辛い目に遭わせることになるからね」

「……そうだな」

ドスンと、俺達の近くの卓袱台の前に座る雄二。ちなみに、壊された設備の全ては俺が直した。そっちの方が早いし、これくらいはありだろう。

「二人とも今日はご苦労だった。少しの休息だ。時間が来るまでゆっくり休んでくれ」

「まだ何かあるというのか？ 協定通り、今日の戦闘は終了じゃろう？」

「表向きは、な」

それ以上雄二は何も言わず、黙って今日の被害をメモにまとめ始めた。それ以上の追及を、有無を言わせず許さない雄二の態度に、秀吉も聞くのを諦めざるを得ないようだ。

「ヴェル。雄二が言っていたのは、どういことなのじゃ？」

代わりに、俺に訊ねることにした模様。

「大丈夫。すぐに分かるよ」

「????」

小首を傾げて考え込む秀吉。

別に説明するのが面倒だとか、尺の関係とか、そういう理由なんかではない。決してない。

「……ここはどこ？」

おつ。どうやら明久が目を覚ましたようだ。

「おお、明久。気が付いたのじゃな」

「命に別状は無いみたいでよかったよ」

明久はゆっくり身体を起こすと、まだ虚ろな目で周囲を確認する。

そして、俺を見付けると、顔をじっと見詰めてきた。

ジイ――

「なんでそんなに見てくる？」

段々と明久の目が大きく見開かれていく。そして、

「ヴェル！ 覚悟ーっ！」

「待った明久。静かにしてなよ」

飛び掛かって来そうだった明久の額を押さえて止め、空いた手で彼の脇に横たわっている人物を指差す。

「あつ……」

俺の言いたい事は伝わったらしい。明久は慌てて自分の口を押さえて腰を下ろした。

（ちよつとヴェル。なんで姫路さんが僕の隣で寝てるのさ！）

（彼女も疲れてるんだよ。良いじゃないか。寝かせて上げれば）

（そうだけど……僕の心臓が持たないよ……はぁ……）

その気持ちは分かるよ。

「んっ……………」

つと。どうやら明久が身を起こしたのに呼応したらしく、瑞希も身動き目を覚ました。明久よりも意識がはっきりしていたらしく、彼の顔を見て花が咲くように笑った。

「あ、吉井くん。目を覚ましたんですね。良かったです」

「あ、うん。心配してくれてありがとう、姫路さん」

瑞希も身体を起こして、伸びをする。まだ眠いようで、欠伸をしていた。これだけ短い睡眠だと、あまり疲労回復には効果が無い。大丈夫だろうか。

「それより、今の状況はどうなってるの？」

「今は協定通り休戦中じゃ。続きは明日になるはずなんじゃが…

…」

そう言って俺の顔を窺ってくる。さっきの言葉がよっぽど気になっているようだ。

「ヴェルがどうかしたの？」

「いや、なんでもないのじゃ。気にせんでくれ」

「？　なら良いけど。それで、戦況の方は？」

「一応計画通りに教室前までは押し込んだ。こちらにも相当な被害が出たがな」

雄二が、さっきまで書いていたメモを手渡した。明久がそれに目を通すのに合わせて、雄二が戦況を解説する。

一応、廊下戦を制した俺達に若干のアドバンテージがあるけど、そこにほぼ全ての戦力を注ぎ込んでしまった。おかげで、こちらは完全に疲弊していて戦況はよりこちらに不利だ。それは予想の範疇だから、問題は無いんだけどね。

「ハプニングはあったけど、今のところは順調ってわけだね」

「まあな」

「今のところは、ね」

向こうが次にどんな手を打ってくるかが問題になる。

「……………（トントン）」

「お、ムツリーニか。待ってたぞ。何か変わった事はあったか？」

「ここでようやくムツリーニが登場。」

今日の彼は戦闘には参加せず、情報収集に勤しんでいた。その情報俺達の命を握っている。

「ん？　Cクラスの様子が怪しいだ？」

「……………（コクリ）」

ムツリーニの話によると、どうやらCクラスが試召戦争の準備をしているらしい。この状況で、そんなことをするってことは――

「漁夫の利を狙うつもりか。いやらしい連中だ」

「雄二、どうするの？」

「んー、そうだなー」

雄二がちらりと時計を確認する。今の時間は四時半。この時間なら、Cクラス代表は残っているだろう。

「Cクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使って攻め込ませるぞ、とか言つて脅せば俺達に攻め込む気も失せるだろう」

「そもそも、俺達がBクラスに勝つなんて微塵も思っちゃいないだろうしね」

軽口を叩いている俺に雄二が視線を送ってくる。

心配しなくても大丈夫だよ。

「よし。それじゃあ、今から行ってくるか」

「そうだね」

雄二が立ち上がり、皆もそれに続いて立ち上がろうとする。

「秀吉はここに残っていてくれ」

「ん？ なんじゃ？ ワシは行かなくても良いのか？」

「ああ。お前の顔を見せると、次の作戦に支障が出る。今回は待機だ」

「よくわからんが、雄二がそう言うなら従おう」

秀吉はあっさり引き下がってくれた。もしかしたら、何かが起これと察してくれたのかもしれない。

「じゃあ、行くでしょうか」

秀吉を残し、俺、明久、雄二、瑞希、ムッツリーニでCクラスに向かう。人数が少ないのが不安だな。

「——全く、ウチだっていつかきつと胸が大きくなるはずなんだから」

「（……………望みは薄いな）」

廊下に出たところで、何やら黒いオーラを噴出しながらぶつぶつ呟いている美波と、その一步後ろを恐る恐る着いてきている須川君と遭遇。須川君は鞆を肩に担いでいるので、今から帰るところなんだろう。

「あ、島田さんに須川君。ちょうど良かった。Cクラスまで付き

合つてよ」

明久。勇者だな。美波の黒いオーラを物ともせず近付いていくなんて。

「……………別に構わないけど」

「俺も大丈夫だ。しかし、なんでまたCクラスに？」

「事情は歩きながら話すよ」

二人を仲間に引き入れた。片方は暗い雰囲気醸し出しているけど大丈夫だろう。

——たぶん。

二人に事情を説明しながらCクラスに向かう。二人も状況を理解して、顔色が変わった。これなら大丈夫だろう。

——たぶん。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

教室の扉を開くなり、雄二がそこにいる全員に告げる。

放課後だというのに、教室にはまだかなりの生徒が残っていた。どうやら、試召戦争の準備をしているというのは本当らしい。

「私だけど、何か用かしら？」

俺達の前に姿を現したのは、まじりつけの無い黒髪をベリーショートにした気が強そうな女子。名前は小山友香。Cクラスの代表で、バレー部のホープ。好きなタイプは『頭の良い男』だったかな。ちなみに、すでに彼氏がいる。

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ ふうん……………」

雄二の言葉を聞いて、小山さんはいやらしい笑みを浮かべていた。やはり、これは罠だったようだ。

「……………ああ。不可侵条約を結びたい」

雄二も、その笑みに気づいているだろうけど、敢えて話を続ける。

「不可侵条約ねえ……………。どうしようかしらね、根本クン？」

小山さんは振り返り、教室の奥にいる人達に声を掛けた。

やっぱりいたな。小山さんの彼氏の根本恭二君。

「当然却下。だって、必要ないだろう？」

「なっ！？ 根本君！ Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

奥から取り巻きを連れて現れた根本君を見て、明久が驚きの声を上げる。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する一切の行為を禁止したよな？」

「何を言って——」

「先に協定を破ったのはソッチだからな？ これはお互い様、だよな！」

根本君が告げると同時に取り巻きが動き出す。人だかりが割れると、そこには数学の長谷川先生が隠れていた。先生は小柄なので隠すのも容易だ。

「長谷川先生！ Bクラスの芳野が召喚を——」

「させるか！ Fクラスの須川が受けて立つ！ 試獣^{サモン}召喚！」

大将の首を獲りに来たBクラス芳野君を、須川君が代わりに抑える。

須川君、ナイスフォローだ。

「僕らは協定違反なんかしていない！ これはCクラスとFクラス——」

「無駄だ明久。根本は条文の『試召戦争に関する一切の行為』を盾にしらを切るに決まっている」

「ま、そゆこと」

「へ理屈だ！」

「へ理屈も立派な理屈の内ってな」

「みんな、ここは逃げるぞ！」

「くそっ！」

みんなが戦闘を行っている須川君に背を向け、Cクラスから離脱していくのを俺は一人見送っていた。

「おや。ヴェルサス君は逃げないのかい？」

「全員で逃げても捕まるだけだからね。ここで足止めをして、みんなが逃げる時間を稼いだほうがいい」

「へえ。自己犠牲精神が旺盛なことだ」

「って訳だから、助太刀するよ。須川君」

「ヴェル……。へっ。馬鹿野「気にするな！ どうせ雑魚だ！

さっさと倒して坂本を討ち取れ！」」

「せめて最後まで言わせて上げて！ 須川君、泣いてるじゃないか！」

「違うぞ、ヴェル。これは、心の汗さ」

泣き張らした顔で言われても説得力ないから！

「ああもう！ とにかく行くぞ！ 試獣^{サモン}召喚！」

幾何学模様の魔方陣が展開され、俺の召喚獣が現れた。遅れて、俺の点数が表示される。

「Bクラス 芳野孝之

数学 161点

VS

Fクラス 須川亮

数学 41点

&

Fクラス ヴェルサスIIスクワラン

数学 198点

」

「……なにっ！？」

俺の点数を見て、仲間内からも驚愕の声が上がる。さっきの戦闘で消費してしまったけど、まだまだ十分に点数が残っている。これ

ならまともに戦えそうだな。

「お前、前回のDクラス戦じゃ最弱の部類だったはずだろ！？
なんだその点数は！？ Bクラス並みじゃないか！」

なんだ。一応俺のこともしっかり調べてたんだ。意外と徹底しているじゃないか。

「まさか、不正行為を……」

「失敬な。そんな真似するわけないでしょ？ ねえ、長谷川先生？」

「そうですよ、根本君。あの点数はヴェル君の実力です」

「って訳だ。残念だったね、根本君？」

「くっ……！」

憎々しげに俺を睨み付けてくる根本君。雑魚だと思って油断してるから、しつぺ返しを食うんだよ。

「仕方ない。坂本は待機させていた別動隊に追わせる！ 俺達もこいつらを倒してすぐに後を追う！ 全員で掛かれ！」

「おおーっ！」

別動隊か。厄介だなあ。そうなるとますますここでの時間稼ぎが重要になる。

『Bクラス 工藤信二

数学 159点

&

Bクラス 真田由香

数学 166点

&

Bクラス 上田祐介

数学 174点

&

Bクラス 浜田拓真

俺達二人を囲むように布陣を敷く彼ら。しかし、根本君は代表だからなのか前線には出てこない。もつとも、出てきたとしたら、俺が狙う相手が一人になるだけだ。出ないほうが得策だろう。

「殺れーっ！」

根本君の掛け声で、四人が一斉に飛び掛かってきた。

タイミングは全員ぴったりだったけど、それだと……

「ほい、と」

須川君の召喚獣の首根っこを掴み、彼らの攻撃をかわす。標的のいなくなった空間に四体が全く同時に着地した。そうすれば必然的に、衝突事故が起こる。

「お前ら何やってんだ！」

「芳野と工藤が突っ込んできたんだよ！」

「何言ってるんだ！ お前がぶつかって来たんだろ！」

「それに真田だってぶつかってたじゃないか！」

「何よ！ 私が悪いっていうの！」

些細なミスで責任の擦り付け合いを始める四人。敵を前にそんなことしてちゃいけないよ。

「いけ」

一番手近に居た工藤君の召喚獣に肉薄する。四人とも言い争いに夢中で、召喚獣の支配が甘い。敵の接近に気付いても、すぐには対処出来なかった。

「しまっ……！」

工藤君が慌て向き直らせる。しかし、不用意なその行動で致命的な隙を俺に見せてしまった。俺は召喚獣の拳を固く握り込み、突出させた中指を彼の喉元に叩き込んだ。

その一撃で、彼の召喚獣は消滅。

「次」

フィードバックによつて伝わってくる召喚獣の消滅していく感触。それが完全に消える前に俺は拳を離し、次の獲物に狙いを定める。次は、動きが荒い真田さんの召喚獣だ。

「このーっ！」

近付いていく俺の召喚獣目掛けて剣を振り下ろしてくる。しかし、相当焦っているのか、剣筋がぶれ過ぎだ。

「そんな攻撃じゃ、虫一匹殺せないよ」

素早く懐に入り込み、甲冑の隙間に抜き手を放つ。別に、甲冑ごと貫いても良いんだけど、相手と点数が近い場合にはやりたくない。あと二人も残ってるし。

「よくも二人を！」

真田さんの召喚獣に止めを刺した直後、浜田君のが襲い掛かってきた。

上手く隙を突いた良い攻撃だ。これは完全に避けられそうはないな。

咄嗟に、左腕で身体を庇う。フィードバックで、鋭い痛みが腕に走るが、切断はされなかった。危ない危ない。

「残念だったね。惜しかったよ」

攻撃を防がれ、身動きの取れない浜田君の召喚獣。その頭を鷲掴みにして、床に叩き付ける。その反動で剣が抜け、また痛みが走ったけどそんなことは気にしてられない。

その一撃ではまだ敵は倒せておらず、再び立ち上がろうとした。俺はその召喚獣の頭を踏みつけて立ち上がれないようにした。そして、すぐ側に落ちていた彼の武器を拾う。

「くそっ！ 浜田を離せ！」

「おっと。それ以上近付かない方がよいよ。友達の命が惜しかったらね」

最後に生き残った上田君が今にも襲い掛かってきそうなので牽制する。もちろん、人質にした浜田君（の召喚獣）を使って。

「くそっ！ 卑怯だぞ！」

「君たちはそれを言えた義理じゃないだろう。それに、人質なんて取らなくても俺が優位なこの状況で、俺のことを『卑怯』とは言えないんじゃないかな？」

「くっ……………！」

流石に返す言葉が見つからないようだ。自分達がするのは良いけど、されるのは駄目だなんて理屈は通らない。認めたくはないが、先生の前だから認めざるを得ないってところだろう。

「さて、根本君。どうする？ このまま戦闘を続行する？ 俺は別にそれでも構わないんだけど……………」

ピタリと、剣を首筋に当てる。

「そうだったら、あと一人は確実に戦死するよ」

「ね、根本……………」

不安げな目で根本君を見つめる浜田君。根本君としては、彼を見捨てても何も痛くないが、そうなるとクラス内での立場が危うくなる。見捨てるという選択は出来ないはずだ。

「……………くそっ。わかった。戦闘は終了だ。これ以上やってもこちらには何のメリットもない」

生き残っている三人は頷き合い、上田君が一步引いた。それを見た長谷川先生が召喚フィールドを消したので、俺と須川君、それから押さえられていた浜田君の召喚獣も姿を消した。

やれやれ。ようやく一段落着いた。

「じゃあ、俺達は帰らせてもらっよ」

「ちっ……………！」

舌打ちをしながら顔を背ける根本君。その姿を横目で確認しながら、俺は呆然としていた須川君を連れてCクラスを後にした。

……………おっと。大事なことを忘れていた。

「根本君」

「……………なんだ？」

「また明日、ね」

「ッッ……………」

怒りに満ちた彼の顔を最後に、俺は今度こそその場を後にした。

『残念だったわね、根本クン』

『ふんっ。坂本を討ち取れなかったのは誤算だが、大した問題じゃない。それにまだ手は残ってる。ヴェルサスめ。その高らかになった鼻、今にへし折ってやるからな』

『……………ヴェル君か。面白そうな人』

「あー、疲れたー」

俺達が教室に戻ってしばらくすると、戸を開けて明久と美波が入ってきた。どうやら二人で別動隊の足止めをしていたらしい。

「よ、吉井君！ 無事だったんですね！」

入ってきた明久へ一目散に駆け寄る瑞希。

明久。鼻の下が伸びてるぞ。

「うん。これくらいなんともいであっ！」

瑞希に返事をした明久の爪先を、力一杯踏みつける美波。なんだから機嫌が悪いようだ。また明久が何かしたのだろう。

「ふんっ」

「し、島田さん。僕が何か悪いことでも」

「（キッ！）」

「あ。い、いや。美波」

うん？ 明久が美波を呼び捨てにしている？ 一体何があったんだ？

「……随分二人とも仲良くなつたみたいですね？」

「え？ コレで？」

「明久、そう思うのももっともだけど、名前を呼び捨てにしているじゃないか」

「それはその……流れで」

どんな流れだ。

「お。戻ったか。お疲れさん」

「無事じゃったようじゃな」

「ん。ただいま」

雄二と秀吉もちちらにやって来る。ムツツリー二は少し離れた席から明久に向かって頷いていた。あまり心配をしていなかったらしい。

「さて、お前ら」

「ん？」

雄二が、その場にいる全員に告げる。

「これで俺達はCクラスとも敵対してしまった。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、Bクラス戦の直後にCクラス戦はきつい」

向こうもそれが狙いだ。俺達が勝ったら間髪入れずに攻め入ってくるだろう。そうなったらおしまいだ。俺達は為す術もなくやられてしまう。

「それならどうしようか？ このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな……」

「問題ない」

不安げな皆に対し、雄二が野性味たつぷりの顔を爛々とさせながら告げる。

「次の作戦はしっかり考えている」

「作戦？」

「ああ。結構は明日の朝だ。その時に詳しい内容は話す」

雄二が俺の顔を見る。俺は小さく頷き返し、後は互いに何も言わない。

今日はそれで解散。各々帰宅していった。

俺も、明日に向けて色々準備をしておこうか。

第13話 Bクラス戦 一日目 放課後 世の中そうそう思い通りには進まない

もっと早く書けば良かったのですが、皆さん感想や評価もよろしく願います。

そして、まもなく15000PV

皆さん、読んでくださってありがとうございます！

第13・9話 Bクラス戦 二日目直前 女装？ いや、これは変装だ！（前書

お久しぶりです。約二週間強ぶりの更新です。

今回はタイトル通り二日目開始直前の話です。本当はBクラス戦にも突入するはずだったんですが、切りが悪かったのでそちらは次回ということ。

では、どうぞ。

第13・9話 Bクラス戦 二日目直前 女装？ いや、これは変装だ！

バカテスト 英語

【第七問】

問 以下の問いに答えなさい。

『good および bad の比較級と最上級をそれぞれ答えなさい』

姫路瑞希の答え

『good		better		best
bad		worse		worst

教師のコメント
その通りです。

吉井明久の答え

『good | gooder | goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。

good や bad の比較級と最上級は語尾に -er や -est をつけるだけではダメです。覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad | butter | bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝、昨日Cクラスへと出向いたメンバー + 秀吉に雄二が告げた。

只今の時刻は八時半少し前。開戦時刻は九時だから、行動を起こすにはちょうど良い時間と言える。

「ヴェル。例の物は用意出来てるか？」

「もちろん」

雄二に問われ、俺は鞆から“あるもの”を取り出した。

「それって、この学園の制服よね？ …………… 女子用の」

そう。俺が今取り出しましたのは、赤と黒を基調にしたこのブレザータイプの制服。他校やオトナのオトモダチに大人気の文月学園の制服（女子用）だ。

「ねえ。ヴェルがどうしてそんな物を持ってるの？」

「着るから」

「……え——っ!？」

絶叫する皆。

しまった。言い方が悪かった。

「し、知らなかった。ヴェルにそんな趣味があったなんて……」

「でも料理が上手かったり、意外と家庭的だったりするし、なんだか納得できるわ……」

「……………一度見てみたい」

「すまんヴェル。俺のせいで、お前の密やかな趣味が明るみになっちゃったな」

皆、好き勝手言ってくれるね？

「そんなにおかしなことかろう？」

秀吉。それはそれでどうかと思う。

「違う違う。女装が趣味ってわけじゃないから。秀吉が演劇で女子の格好をするのと同じだよ。俺も、まあ、部活……みたいなもの……かな？」

正確には部活じゃなくて、潜入とか陽動とか情報収集とか、学園長の依頼関係で使うんだけど、言っと色々面倒臭い。そもそも、言っちゃったらスパイっぽくない。

「あー。なるほど。部活か。そういうことなら納得だ」

「そうならそうと先に言つてよね。びっくりするじゃない」

「……………一度見てみたい」

みんな、今の説明で納得しちゃうんだね。これだったら本当のことを言つても軽く流された気がするぞ…………。

「部活つて。ヴェル、何か入つてたっけ？」

明久が首を傾げながら訊ねてくる。どうでも良いことはよく覚えてるんだな。

「昨日仕立て直したから、サイズはぴったりだと思つよ」

「あれ？ 僕の質問は無視？」

聞こえません。

「ああ。無理言つてすまないな。助かつた」

綺麗に畳んでおいた制服を雄二に手渡す。しつかりと彼のご要望通りに出来ていると思うけど…………もし俺が持つて来なかつたらどうするつもりだったのだろう？

「ところで雄二。ヴェルにそんなもの持つて来させてどうするの？ 雄二が着るの？」

「殺すぞ」

冗談に聞こえないよ、雄二。

「着るのは俺じゃない。秀吉だ」

ズイツと、俺達のコントを静観していた秀吉の前にその制服を突き出した。

「…………雄二。これはどういうことかのう？」

「着てくれ。コレを」

「…………本気か？」

「本気も本気だ」

「むう…………あまりこういう格好をするのは本意ではないのじゃが…………」

と言いつつも、一応は制服を受け取っている秀吉。かなり嫌そうだな、というか引きつった表情をしている。

さつき俺が、着るって言った時はそんなの普通みたいなのを言
ってたくせに。

「……雄二。これはその作戦とやらに必要なことなのじゃな？」

「そうだ」

「……そういうことなら、仕方あるまい。着させてもらうぞい」
姉上も分かってくれるじやろう、とかなんとか呟きながら、秀吉
は自身の服に手を掛ける。今すぐに着替えてくれないと、開戦まで
に間に合わないから良いんだけど……。

「ちよつと！ 木下何やってるのよ！」

どうして美波は明久の目を塞いでいるのだろう。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

ムツツリー二も凄まじい速さでカメラのシャッターを切っている。
……………そのカメラはどこから出した？

「な、なんじゃ。ワシは男じゃぞ！ ここで着替えても問題なか
ろう！」

「男のくせに色っぽい木下がいけないのよ！」

「そんな理不尽な！？」

上半身裸のまま秀吉が絶叫する。

確かに、秀吉の裸体は男にしては色っぽいよね。秀吉は自分の容
姿を正確に理解した方が良いな。

「というか、坂本もヴェルも見えてないで止めなさいよね！」

おっと。美波のおとがめが俺達の方にも飛び火してきた。まった
く仕方がないな。

「秀吉は男だ。別に問題はないだろう」

「右に同じ」

俺の友達にも秀吉のような美少女のような美少年がいたし、海や
大浴場なんかで裸姿には見慣れているからあまり新鮮が無い。

それに……………いや、やっぱりなんでもない。

「あ、アンタ達って…………」

リアクションの薄い俺達を見てよろめく美波。それでもしっかり

明久の目は塞いでいる。

「あー！ もう分かったわよ！ 木下はここで着替える！ ほら
！ ちゃっちゃと着替えなさい！」

「なぜそんなに怒鳴られねばならぬのじゃ……？」

どこか納得のいかない様子の秀吉だったが、美波に一睨みされて慌て制服に腕を通した。そして、秀吉の着替えも終わり、ようやく明久が解放される。

「……………なんだろう。凄く惜しいことをした気がする」
解放された明久はがっくりと膝を着いて項垂れていた。

そんなにシヨックだったのか……？

「……………（チョンチョン）」

項垂れている明久に近付き、肩をつつくムツツリーニ。そして、手に持ったデジカメのディスプレイを明久に見せる。

「ムツツリーニ！ 君は親友だ！」

すると突然明久が活気付き、ムツツリーニに飛び付いて頬擦りしていた。あのディスプレイにはさっきの秀吉が写っているのだろう。しかし……。

「……………一枚七百円」

「金取るのかよ、ちくしょーっ！！」

あきんど
商人は親友にも厳しいねえ……。

「む……………」

明久が友情の儚さを噛み締めている一方、秀吉は自分の身体をあちこち見回して唸っていた。どうしたのだろう？ まさか、サイズが合っていないかったとか？

「秀吉。キツかったり弛かったりするなら、今すぐに直すよ」

「いや、そういう訳ではないのじゃが……………お主はいつも裁縫セットを持ち歩いておるのか？」

俺が鞆から取り出した小さい箱を見て、秀吉は呆れたように溜め息を吐いた。持っていると色々と便利なんだよね。

「そうではなくてのう。不思議な程にワシにピッタリなのじゃが、

これはどうということなのじゃ？」

「ああ。それは、俺が仕立て直したからだよ。ってさっき言ったじゃないか」

「……どうやってワシの服の寸法を知ったのじゃ？」

あつ。それ聞いちゃう？

「……………」

「……………」

黙って見詰め合う俺達。しかし、いい加減時間も無いし、早くこの話題は終わらせるとしようか。

「それは——」

「それは？」

「直感」

「嘘を吐け!!」

まんざら嘘でもないのだけど。

「そろそろ話を進めても良いか？」

「ああ。雄二、ごめん。作戦の説明をどうぞ」

というかそれが本題なんだから話を進めないと困る。

「……雄二、秀吉に女子用の制服を着せてどうするの？ その姿だと、Aクラスにいる秀吉の双子のお姉さんと思分けが付かないじゃないか」

「それがこの作戦の要だ。なんのために昨日、秀吉をCクラスに連れていかなかったと思ってるんだ？」

「……それって、まさか秀吉にお姉さんの振りをさせるってこと？」

「そうだ。秀吉には木下優子として、Aクラスの使者を装ってもらう」

雄二がそう言った途端、秀吉の顔色が悪くなる。多少は予想していたであろうに……。

「というわけで早速Cクラスに行くぞ」

「おーっ!!」

「なぜヴェルがそれ程まで乗り気なのかが分からぬ……」
なぜって、そんな面白そうだからに決まってるじゃないか。

「あ、僕も行くよ。美波と姫路さんはどうする？」

教室を出る間際、一応二人にも確認を取る明久。ちなみに、ムツツリー二は行かないようだ。何故かは……まあ問わないでこーう。

「うーん。ウチは止めとく。回復試験の勉強もしておきたいし」
そういえば、昨日の戦闘で美波はかなり点数を消費してしまったから、それを回復しないといけないんだった。こう言くと失礼だけど、意外と勤勉だよな。

「あ、そつか。じゃあ姫路さんは？」

「……………」

明久が、卓袱台を前にしてボーツと座り込んでいる瑞希に尋ねる。そういえば、台詞も何もなくて存在感が希薄だったけど、瑞希は最初からこの教室に居た。しかし、さつき秀吉が生着替えを始めた時も、今も何の反応も無い。
二人が先に行くのにも構わず、俺も足を止めて瑞希の様子を窺った。

「……姫路さん？」

「……えっ？ あ、はい。なんですか、吉井君」

明久がもう一度呼び掛けてようやく反応を示す瑞希。若干だけども拳動が不審だ。

「だから、姫路さんは一緒に行かないのかなって」

「私ですか？ 私は……」

視線を自身の手元に落とし、瑞希が一瞬考えるような素振りを見せた。というより寧ろ、手に持った何かを見ているようだ。

俺の位置からでは、ソレが何かまでは見えないけど、大体の予測はつく。

「……私も遠慮しておきます」

「そつか……………」

そんなにがっかりしなくても……。

「……じゃあ、行ってくるよ」

「また後で」

明久は少し残念そうに肩を落としながら、俺は努めて明るく振る舞いながら、教室を後にする。騒ぐ訳にはいけないので、歩く速さを上げ、出来るだけ静かに移動しているとすぐに二人に追い付いた。Cクラスまでかなり距離があるし、二人はゆっくり歩いているのだから、追い付けない方がおかしいんだけど。

合流した後もしばらく歩き、Cクラスの近くまで来た辺りで俺達は足を止めた。

「俺達が着いて行けるのはここまでだ。悪いがここからは秀吉一人で行ってくれ」

秀吉は木下優子さんに成り済まし、Aクラスの使者を装っていくのだから、Fクラスの俺達が着いていくのはおかしい。残念だけど俺達は少し離れたこの場所から、秀吉の勇姿を見守ることしか出来ないのだ。

「気が進まぬのう……」

「そこをなんとか頼む」

「むう……」

まだ煮え切らない様子の秀吉。しょうがない。ちよこつとだけ背中を押して上げようか。

「秀吉。一度引き受けた仕事を投げ出すなんて男らしくないなあ」

「……男らしくない、じゃと？」

お。良い食い付きだ。

「男だったら、自分でやると言ったことはやり通さないと。そうしないとますます皆から女の子扱いされるよ？」

「……………」

秀吉の顔付きが変わる。迷いの無くなった良い表情だ。

……………これでスカート姿じゃなかったら格好良かったと思う。

「……………良いじゃろう。そこまで言われてはやるしかある

まい。男として！」

今は女装してるんだけどね、とは茶化せなかった。

「演劇部のホープと言われるワシの実力。心して見るがいい！」

「お、おう。頼んだぞ秀吉。出来るだけ相手を挑発してくれ」

「任せるがよい！」

秀吉の高いテンションに雄二も若干引き気味だ。男のように扱われていなかったこと、そんなに気にしていたのか……。

「あー、あー、コホン——こんなものかしら？」

何回か声を出し、一つ咳払いすると秀吉の声が変わっていた。普段でも男子にしては高い声なんだけど、それよりも更に高い。まるで女子のような声になっている。

「じゃあ、行ってくるわね」

髪を靡^{なび}かせ、優雅に歩いていく秀吉。

凄いな。流石は演劇部のホープだ。見た目には何の変化も見られないけど、声も目付きも動きの癖も、秀吉ではない誰別の人間のものだ。今秀吉は完璧にお姉さんを演じきっているのだろう。

「ヴェルってさ、人にやる気を出させるの上手いよね」

秀吉の後ろ姿を眺めていると明久が感心したように声を掛けてきた。

「まあ、今まで色んな人を見てきたから多少は、ね」

折角ある才能をフルに使えないのは勿体無い。だから俺は、少しだけ手を貸してあげるだけだ。何にせよ、結局一番大事なのは本人の気持ちだからな。

「良いなあ。僕もヴェルみたいな事が出来たら皆を上手くりよ——じゃなかった、使えるのに……」

今『利用』って言うおうとしなかったか？ しかも『使える』って、それ結局何も誤魔化せてないだろ。

「……一応聞くけど、どんな風に使うつもりだ？」

「えーっと。例えば、お昼にパンを買わせに行ったりとか、肩を揉ませたりとか、雄二を貶めたりとか……ヴェルはどうして僕の頭

を撫でてるの？」

「バカな明久に大した事なんて出来るわけないよね。安心したよ」
もっと欲望に満ちた事をすると思っていただけ、大した事なくて
本当に安心した。

「少なくとも褒めてはないってことは分かったよ……」

明久がガツクリと肩を落とす。

明久らしくて俺は良いと思うけど。スケールは小さいけど。

「二人とも静かにしろ。秀吉が教室に入るぞ」

などとふざけていると、雄二に叱られた。この距離なら声が届く
ことはないと思うけど、用心するに越したことはない。俺達は押し
黙り、秀吉の動向を窺った。

丁度、扉に手を掛け中所に入るところだ。勢いよくガラリと扉を開
け、秀吉は言い放つ。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

そうきたかあ……。

「流石だな、秀吉」

「うん。これ以上はない挑発だね……」

「というか、アレが秀吉のお姉さんに対するイメージなんだね……」

……

ツンデレを通り越して、ただのバイオレンスな人になってるよ。

確か秀吉のお姉さんは品行方正、才色兼備な優等生って書いてあ
った気がするんだけど……。

『な、何よアンタ！』

怒気を孕んだこの声は小山さんだろう。彼女が怒るのも仕方がな
い。なんせ、いきなり入って来た上に人を豚呼ばわりだからなあ……
……。

『話かけないで！ 豚臭いわ！』

色々とツツコミどころが満載で困るんだけど……。

『アンタ、Aクラスの木下ね？ ちよっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！ 何の用よ！』

相当頭にきているのだろう。昨日の余裕綽々の態度が今は微塵もない。おかげで秀吉の女装にも全く気付いていないようだ。まあ、普通は女装した弟が来てるなんて思わないだろうしね。

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！ 貴女達は豚小屋でブウブウ鳴いているのがお似合いだわ！』

『なっ！ 言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？』

……そう言いたくなる気持ちは解るよ。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

それにしても、秀吉の演技は凄いな。演技と感ぜせないこの自然な感じ。まさに、役を自分の物にしている。伊達にホープとは言われていないってことか。

『ちようど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！』

そう言い残し、靴音を立てながら秀吉は教室を出てきた。

『どうじゃ、ワシの演技は？ 大したものじゃろう』

どこかスッキリした顔で秀吉が近付いてくる。

『ああ、素晴らしい仕事だった』

『完璧だったよ、秀吉』

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！ Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスから小山さんのヒステリックな叫び声が聞こえてくる。秀吉の挑発の効果は抜群だ。

『どうじゃ、ヴェル。ワシは男らしかったかのう？』

秀吉が得意げな顔で俺の顔を見上げてくる。俺は笑顔を向け、秀吉の頭に優しく撫でた

「うん。お姉さんを演じてた秀吉は男らしくて格好良かったよ」

「そうじゃろう、そうじゃろう。男らしかったじゃろう。アレは姉上の本性をワシなりに推測した渾身の演技じゃからな。姉上以上に女らしく振る舞って……………うん???」

秀吉が頭の上に疑問符を浮かべ始めた。ようやく、自分の行動の矛盾に気付いたらしい。

「さて、作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

「了解。さ、秀吉も行くよ」

「う、うむ…………?」

まだ頭を悩ませている秀吉の腕を引き、俺達は早足でFクラスを目指した。

今日の試召戦争が始まるまであと十分。

第13・9話 Bクラス戦 二日目直前 女装？ いや、これは変装だ！（後書

今回のタイトルの話数が微妙なのは、14話の直前だったからです。

最後の方に『あと十分でBクラス戦』みたいなことが書いてあるのに、13・5話って言うのも変な感じがしたので、13・9話にしました。

言い訳は以上。

次回からのBクラス戦ですが、後半は七割がたオリジナルにする予定です。また更新が遅くなりそうですが、早く上げられるよう頑張りますのでよろしく願います！

……………というか、Bクラス戦長いなあ……………

第14話 Bクラス戦 二日目 前編 反撃開始! ——の前に事情説明(前

皆さんお久しぶりです。

前回から約三週間ぶりの更新(汗)

まだBクラス戦の途中だというのにこんなに更新が遅くてすみません。

しかも、今回はほぼ会話ばかりで戦闘がほとんど無いというこの体たらく。本当すみません。

ではそんな第14話ですがどうぞ〜♪

「ドアと壁をつまく使うんじゃない！ 戦線を拡大させるでないぞ！」
秀吉の指示が飛ぶ。

僕らがFクラスに戻った後、九時からBクラス戦が開始された。
協定通り、昨日終了した状態からの開戦だ。

雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込める』とのこと。

そんなわけで指示を遂行しようと戦闘を進めているのだけど、ここで一つ問題があった。

姫路さんの様子がおかしい。

本来は彼女が総司令官なんだけど、今日は一向に指示を出す気配がない。それどころか戦闘に参加する意欲がないように見える。一体どうしたのだろうか。

困ったなあ。こんな時頼りになるヴェルも今は回復テストを受けていていないし、どうしたら良いんだろう。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

そんなわけで今指示をとっているのは、ヴェルから副指令を任せられた秀吉。今のところは雄二の指示通りうまくやれている。けど、それもいつまで持つか……。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

押し戻された左の出入り口にいるのは古典の竹中先生だったか。まずいな。Bクラスには文系が多いから、このままだと左側の戦線が壊滅してしまう。ここは強力な個人戦力で戦況を変えないと。

「姫路さん、左側に援護を！」

雄二の作戦では午後には姫路さんが担う重要な役割があるらしいので、あまり彼女に頼るわけにはいかないけど、今の状況じゃ仕方がない。

「あ、そ、そのっ……！」

しかし、肝心な姫路さんは戦線に加わらず泣きそうな顔をしてオロオロしている。マズい！ 突破される！

「だああーっ！」

人込みを掻き分け戦闘が行われている場所を目指す。

そして、立会人の竹中先生にそつと耳打ちした。

「……ッラ、ずれてますよ」

「っ！？」

慌てて頭を押させ周囲を見渡す竹中先生。

ヴェルに教えて貰った先生の脅迫ネタ………じゃなくて、恥ずかしい秘密　く古典教師編く　が役に立った。こんなところで僕のとっておきを使う羽目になるとは。計算外だ。

「少々席を外します！」

しかし、とっておきただけあつて効果は抜群。少しだけ間ができる。

「古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！ 消耗した人は補給に回って！」

応急処置だけど、これで少しは持ち直すはずだ。

さて、この間に。

「姫路さん、どうかしたの？」

姫路さんに声をかける。昨日ヴェルに言われたこともあって、姫路さんのことを気にかけていたつもりだったんだけど、様子のおかしい理由が分からない。今朝から少し元気が無かったとは思ってたけど、本当にどうしたのだろう。

「そ、その、な、何でもないんですっ」

姫路さんが大きく首を振るのに合わせて、長い髪が左右に広がる。

明らかに何でもないと様子じゃない。目尻には涙が溜まっているし、挙動も不審過ぎる。

「そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。言ってくれたら僕も少しは力になれるだろうし」

「本当に何でもないですから……！」

そうは言うけど、今にも泣きそうな顔は変わらない。その様子からも何かあるのは明らかだ。でも、一体何が……？

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラスに拉致された模様！」

右側までもBクラスの得意とする文系科目に切り替えられるなんて。かなりピンチだ。

「私が行きますっ！」

そう言って前線に駆け出す姫路さん。でも、

「あ……」

急にその動きを止めてうつむいてしまった。

なんだろう。何かを見て動けなくなったようだけど――。

姫路さんが見ていた方を目で追ってみる。

その先には窓際で腕を組んでこちらを見下ろす卑怯者――根本君の姿があった。

根本君がどうかしたのだろうか？

ここからは見えにくいけど、目を凝らして観察する。特に何もないようだけど――

「っ……！」

そこで僕は見た。彼が手にしている物を。

何の変哲もない、手に入れようと思えば普通に手に入る物だけど、逆にいくらかお金を出しても買えない物でもある。

彼が手にしていた物。

それは三日前の放課後に姫路さんが恥ずかしがって僕らから隠した、あの封筒だった。

「そんな……なんで根本君がアレを……？」

昨日、荒らされた教室で姫路さんの鞆の中にアレが入っていたことはヴェルが確認したはずだ。ちゃんと『ある』って言っていたし……そう言えば、あの時ヴェルはこうも言っていたっけ。

『あることがおかしいんだよ』と。

あの時は全然意味が分からなかったけど、もしかしたらヴェルは姫路さんの封筒が持ち出されていた事に気付いていたんじゃない……。でもそうだとしたらなんで僕に教えてくれなかったんだろっ？ いや、そもそもなんで姫路さんを救おうとしてくれなかったんだ？

「……………」

普段使わない頭をフルに使って考えていると、姫路さんがうつむいたままスカートの端を握り締めているのが目に入った。

ハッとした。

何をしてるんだ僕は。ぐだぐだ考えていたって仕方がない。今は動かないと……！

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだからあまり戦線には加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「……はい」

「じゃあ、僕は用があるから行くよ」

「あ……！」

姫路さんは何か言いたげだったけど、それに構わず僕は駆け出した。本当に大事な用ができたから。

「どういことなんだよ、ヴェル！」

まずは、色々知っているであろうヴェルを問い質さないと。
あの野郎をブチ殺すのはそれからだ。

回復テストを終えた俺は、教室でゆっくりと過ごしていた。実際にはゆっくりしているわけじゃなくて、雄二が書いている戦力表を見ながらどう動くかを検討しているのだけど、それはどうでも良い。俺は待っているのだ。

ちらりと時計を確認する。戦闘が始まってかれこれ数時間。昼にはまだ早いけど、そろそろ戦況が悪化し始める頃合いだ。

「……そろそろだな」

「ん？　どうかしたのか？」

雄二がそう言い終えた瞬間。

「ヴェル！！」

荒々しく扉を開け、明久が入ってきた。そして、俺に向かって一直線に駆け寄ってくる。呼び止めようと腰を浮かした雄二を手で制し、俺は立ち上がり明久と向き合った。

「明久、来るのを待ってたよ」

別段明るく言った訳ではない。かといって暗く言った訳でもない。至って平坦な声で、俺は明久にそう言った。

「……それって、やっぱり全部知ってたってこと？」

明久の表情が強張る。相当頭に血が昇っているようだ。このままだと、雄二が居ると言うのに弾みで瑞希のラブレターのことを口走

ってしまいそうだ。

俺は明久の手を引き廊下に出た。今は戦争中で廊下には人影が全く無い。ここなら話を聞かれるような心配はないはずだ。

「その様子だと、今どうなっているか把握出来てみたいだね」

「……ヴェルは、やっぱり全部分かつてるんだよね？」

「ああ、もちろん。全容は掴んでいるつもりだ」

「それならどうして!!」

胸ぐらを掴まれ顔を引き寄せられる。明久の方が俺より背が低いから、胸ぐらを掴んだら必然的に俺が彼の方に上半身を傾ける体形になる。しかし、この体形なら明久と視線が同じになるから、かえって話しやすいかもしれない。

「……………」

俺を睨み付けたまま、何度か口を開閉する明久。色々と言いたいことがあるすぎてまとまっていけないのだろう。明久がそうしている間、俺はじっと待っていた。

そうしてしばらく経ったところで。

「……ごめん。いきなり掴み掛かったりして」

そう謝って明久は手を放した。

「……良いのか？ 殴つても構わないんだぞ？」

乱れたネクタイを指で弄びながら訊ねる。最低でも殴られるだろうと覚悟していた分、明久がそうしなかったのは少し——いや、かなり意外だった。

「……ヴェルが好き好んで誰かを哀しませたりしないのは、よく知ってるから。今回も何か考えがあるんでしょ？」

明久とは出会ってまだ一年。長い付き合いとまでは言えない。だけれど、その短い一年の間に色々なことがあった。本当に色々なことが。

その為か、明久は俺の本質を少しだけ理解してくれている。だから、今も俺のことを信用してくれている。

本当に、このバカは——。

「ああ。……ごめん。本当はすぐにもでも行動を起こしたかったんだけど……」

「謝るなら僕じゃなくて姫路さんに謝ってよ」

少しは冷静になっていているようで質問はしているけど、やっぱりまだ怒っているらしい。

……当然か。

時間はあまり無いけど、今の内に全てを明久に話しておいた方が良いかな。雄二には説明してあるし。

俺はそう決めて、壁に背を預け明久と向き合った。

「もちろん瑞希にも謝るつもりだよ。だけど今はBクラス戦に集中しないとイケない。でなきゃ俺達の作戦が全て水の泡だ」

「え？ それってどういう……」

明久が驚きの表情を浮かべる中、俺は懐からあるものを取り出した。それは、今瑞希を苦しめている元凶であり、同時に彼女の想いが込められた物。瑞希が書いたラブレターの入っていたものと同じピンク色の封筒だ。

「え？ なんで！？ だってそれは根本君が持つてるはず……」

俺が手にしたソレを見た途端、慌ててBクラスの教室を見る明久。その反応を見て、俺も同じ方向を見遣った。

「やっぱり本物は根本君が持つてるのか」

「ほ、ほんもの？ 本物ってどゆこと……？」

明久が頭上に疑問符を大量に浮かべている。俺はその質問には答えず、代わりに俺が手に持っている封筒を手渡した。

「……？」

「ソレ。開けてみて」

「え、でも……」

「良いから」

俺に言われ渋々封を切って中身を改めようとする。しかし、結局明久が中身を見ることはなかった。何故なら――。

「……空っぽ？」

そもそも、その中には何も入っていないから。

「これって、一体なに？」

「それは昨日俺が瑞希の鞆の中で見付けた封筒だよ」

「でも、じゃあ中身は？　もしかして、中身だけ持っていかれた
ってこと？」

「違う違う。それには元々中身なんて無かったんだ。それは根本
君が置いていった罠なんだよ」

「罠……？」

そう。この封筒は罠。

俺達を欺く為の偽物であり、あわよくば俺達を貶めようという卑
劣な罠でもある。

「その封筒はね、俺達に瑞希のラブレターが無くなっている事を
気付かせない為の偽物なんだよ」

折角切り札を手に入れたとしても、その手が筒抜けでは効果は無
い。

今は落ちぶれていても、昔は神童と呼ばれていた雄二がこちらに
はいる。もし切り札の存在を知られたら対抗策を講じられるかもし
れない。それを回避するために、この偽物は置かれていたのだらう。
これが、罠の役割一つ目だ。

「でも、どうして根元君はそんなものを用意してたのさ。姫路さ
んのラブレターは、僕達誰かの弱味を探してた時に偶然見付けたん
じゃないの？」

「俺も最初はそう思ってた。だけど本当は違ってたんだ。彼は最初
から瑞希のラブレターを狙ってたんだよ」

そう考えると、全て納得がつく。

卑怯と言われる程合理性を重視している根本君が、あるかどうか
も分からないFクラス男子の弱味を探なんて不合理なことをする
のはおかしいと思っていたんだ。

だけでもし最初から狙いが決まっていたとしたら？　破壊された
卓袱台や筆記用具も、荒らされていた鞆も、全てが罠だったとした

ら？

全てが、説明出来る。

「そんな……」

中身の無い封筒を呆然と見詰めていた。相当ショックを受けているはずだけど、こういう時に切り替えが早いのが明久の良いところだ。

「でも、ちょっと待ってよ。じゃあ根本君はいつ姫路さんのラブレターの事を知ったのさ？」

最もな質問だ。偶然じゃないのなら、彼がいつコレを知り得ることが出来たのか。俺も言い切ることは出来ないけど、それはたぶん

「三日前の放課後だ」

その可能性が一番高いと、俺は思っている。

「その日って、僕達が姫路さんと教室で偶然会った日だね。でも、遅い時間だったし、生徒はほとんどいなかったような……」

「確かに、『ほとんど』はいなかった。だけど、『誰一人』いなかったわけじゃない」

俺のように用事があつて残っていた子もいるだろうし、明久のように忘れ物を取りに戻ってきていた子もいたかもしれない。

「根本君も何かの理由で学校に残っていて、帰り際に俺達の声が聞こえたんだろう。そして、瑞希のラブレターのことを知った」

もちろん、その時は今しているような使い方をするつもりはなかっただろう。もしくは、もっと下劣な事を考えていたか、だ。それはともかく、Fクラスとの戦争が始まったために、ソレを脅しのネタにしたのはまず間違いない。

「なるほど……」

口元に手を当て何度も頷いている。

こんなときに不謹慎だけど、その頭の回転をもう少し勉強の方に向けたら成績が上がるんだろうなあ、と思った。

「でも、そこまで分かつてるならそれならどうして何もなかったのさ」

「しなかったんじゃない。出来なかったんだよ」

……いや。これは嘘だ。やろうと思えばすぐにでもラブレターを取り戻す事は出来た。だけど、しなかった。極力危険を避けるために。

「ヴェル、それってどういうこと？」

その問に対して、今度は右のポケットからあるものを取り出した。それもまた瑞希の鞆から取り出した物なのだけど……。

「それって……小型カメラ？　なんでそんなものを？」

「これは、さっき見せた偽物のラブレターの更に奥に入っていた物だ」

そしてこれが、根本君が囹を仕掛けた二つ目の理由に繋がってくる。

「でも、さっき囹は僕達から気を逸らせる為って言うてたじゃないか。なんでカメラまで置いていく必要があったの？」

「それは、瑞希の秘密について知っている人間、つまり俺達を嵌める為に置いていかれたんだ」

「僕達を嵌める？」

そう。俺達を嵌める為の罠。よくそんなことを考え付いたものだと感心してしまう。根本君は、俺が明久のどちらかが盗まれたことに気付くだらうと踏んでコレを置いていった。たぶん、俺の方が気付くかもしれない、と思っていた程度だろうけど。

「明久。君は鞆の中身を取り出す時はどうする？」

「どうするって、そりゃ手をつ突っ込んで取るでしょ」

「じゃあ、何処にあるか分からない物を探す時は？」

「え？　うーん。中を覗きながら探すかな。もしかしたら底の方にあるのかも知れないし」

「そう、鞆の中を覗き込む。俺が瑞希の鞆を調べた時も同じように探した。そして、封筒とそのカメラを見付けたんだ」

何処にあるか分からない。まして他人の鞆だ。確認するためにも鞆の中を覗かなくてはいけない。その顔を、設置されたカメラで撮

影するのが根本君の狙いだっただ。

撮られ方は女子の鞆を荒らす変態のレッテルを貼られ、更に根本君は罟がバレたかどうかを確認出来る。まさに、彼にとっては一石二鳥ってわけだ。

「それって、ヴェルは今根本君に弱みを握られてるってこと？」

明久。それは暗に俺を変態って言っていないかい？

「大丈夫。一応用心してたから髪の手先くらいしか映ってないと思うし、さすがにそれで個人を特定するのは無理だ。それにそのカメラ、音は拾えないタイプだから声での判断も出来ないよ」

流石の根本君も顔が解らなければどうすることも出来ないはずだ。それにコレは仕掛けた人間の方も非難を浴びる可能性が高いから、彼もそこまでコレに固執しないだろう。

「封筒の方も中身までは確認せずにおいたから、彼はまだ気付かれていないと思ってるはずだ。そこが付け入る隙になる」

人間誰しも余裕があると油断が生まれる。Fクラスは瑞希がいなければどうともなると考えている根本君なら尚更だ。

「そうか。それがさっき言ってた作戦ってことなんだね」

「正確に言うると作戦の一部だけだね。本当に大変なのはこれからだよ」

俺達が話していた間にも戦局は悪化しているはず。向こうはまだ半数近くの人数を残しているし、瑞希も行動不能。後は生き残っている俺達だけでなんとかしてはならない。

「さて、これで俺の話は終わりだけど何か質問は？」

「うん……。大体の話はわかったけど、結局作戦ってなんなの？」

「それはこれから雄二と一緒に説明する。質問が無いなら、一旦教室に入るぞ」

「う、うん」

戸を開け教室に入ると、雄二は床に寝転がっていた。そして、俺達が入ってきたのを一瞥すると、寝た姿勢のまま声をかけてきた。

「話は終わったか？」

「ああ」

「よし、と。じゃあ反撃開始といきますか」

立ち上がった雄二が大きく伸びをする。俺達が話し合っていた間ずっと横になっていたのか、身体中の関節が鳴っていた。

「雄二、その前に明久にも作戦を伝えないと。まだそれは説明してないんだ」

「うん？ そうなのか。……いや、そうだな。俺から言うのが通りつてもんだ」

そう言うと、雄二は明久を真つ直ぐ見据え何時に無く真剣な表情を浮かべる。普段からは想像出来ないその表情に明久も身を固くしていた。事の次第を把握しているから更にそうなるのだろう。

「明久、お前に任務を言い渡す。俺達の命運が懸かった重要な任務だ」

何時になく強い口調。明久の事の重大さを意識したのか喉を鳴らしていた。

「……分かったよ」

意を決した明久の返答。その言葉を聞いて、雄二は一度深く頷いた。

「よし。じゃあこれから作戦の内容を説明する。時間が無い。一度しか言わないからよく聞いてろよ……」

雄二の説明が終わった直後、俺は戦闘が行われているBクラス前までやって来た。

「右側出入り口、もう持たないぞ！」

「誰か現国の点数が残っている奴、援護に回れ！」

「左側出入り口も限界だ！」

あれから更に戦局は悪化していたようだ。生き残っている仲間も

残り少ない上に教科はBクラスが得意な文系のものばかり。いつ突破されてもおかしくない。

「みんな！ 援護に来たぞ！」

駆け足で戦場に向かう。みんな生き残るのに必死だったけど、援護と聞いて希望の色を見せた。

「ヴェル待つてた！ この状況をどうにかしてくれ！」

そういうのは須川君。秀吉の姿が見えないところを見ると、どうやら戦死してしまったらしい。そして今は彼が戦場の指揮を取っているようだ。

「分かつてる。点数の残っている人は全員左側出入り口に向かつて！ 瀕死の人は回復試験を受けるんだ！」

「しかし、そうしたらここが！」

「大丈夫。ここは、俺が何とかする」

須川君の表情が固まる。俺が無茶苦茶な事を言っているのは分かっている。Bクラスの生徒相手に一人で挑むなんて普通に見たら、正気の沙汰ではないだろう。

だけど、俺に、な、ら、可、能、だ。須川君も、昨日俺の戦いっぷりを目の当たりにしたのだから、少しは察してくれよ。

「……分かった。ここは任せる。みんな聞こえたな！ 点数のある奴は左側出入り口を援護！ その他は回復試験に臨め！」

須川君の言葉にざわついていた生徒達も動き始めた。それからの行動は素早いもので、あっという間にFクラス生徒の姿は消えた。残ったのは、俺とBクラス生徒十二人だけだ。

「君達、今の話は聞いてたよね。これからは俺が相手だ」

そう言って一歩前に出る。それだけで警戒したように彼らは身構えた。無理もないか。宣戦布告の時に少し派手にやり過ぎたから。でもそれが今回はプラスに働いた。

また派手に暴れさせてもらう。

「試獣召喚サモンっ」

幾何学模様の魔方陣の中から召喚獣が姿を現す。当たり前だけど

武器は持っていない。しかし、今回は前回と違い腕輪を着けていた。綺麗な腕輪を。

「みんな怯むな！ 相手は一人、しかも丸腰だ！ この人数で攻めれば勝てる！ 行くぞ！」

「……おおーっ！！」

俺の召喚が完了したのとほぼ同時に、彼らは一斉に襲い掛かってきた。さすがに点数で負けているつもりはないのか、かなり強気な攻撃だ。俺はその攻撃の隙を抜け、全てをかわす。少し苦しい箇所もあったけど、ほぼ無傷でかわすことが出来た。

「諦めるな！ いくら避けられたとしても必ず当たる！ 200点近くあったとしても削り切れるはずだ！」

どうやら昨日の戦闘で俺の点数は伝わっていたらしい。なるほど。だからこんなにも強気なのか。瑞希クラスの相手には勝ち目がないとしても、点数が近ければ人数が多い方が勝つ。

確かにそれは間違っていない。質が同じなら、勝負を決めるのは量が戦術だ。そして彼らには量がある。

だけど、忘れてはいやしないかい？ その話には質が同じだという前提が必要だ。しかし、俺達の質は同じじゃない。

ここでもようやく俺の点数が表示された。

『Fクラス ヴェルサスII スクワラン

現代文 436点』

「……はっ？」

俺の点数を見て唖然とする彼ら。そんな彼らを尻目に俺は召喚獣を構えさせた。

「さあ、行くよ」

本当の勝負はこれからだ。

今回はかなりぐだくだな感じが否めませんね(汗)

ここおかしいんじゃないか思っても、寛容な心で見逃してやって下さい。

こんな駄文にお付き合いいただきありがとうございます。

次回の更新は早目にしたいと思いますが、最近忙しいのでまた遅くなるかもしれません。

では、次回もよろしく願います!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5105v/>

バカとテストと恋愛喜劇（ラブコメディ）

2011年11月15日02時26分発行